

---

# オーズ・ディケイド・平成ライダー 火を噴け！ 栄光の十二人ライダー

イマジンカイザー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オーズ・デイケイド・平成ライダー 火を噴け！ 栄光の十二人ライダー

### 【Nコード】

N5226X

### 【作者名】

イマジンカイザー

### 【あらすじ】

グリードとの戦いも終結し、平和になったオーズの世界に、光のオーロラを超えて、突如謎の怪人集団「アポロシヨッカー」が攻めてきた！ 相対するは世界の破壊者デイケイドと、平成ライダーのコアメダルを手にした火野映司！ 鴻上フアウンデーシヨンやクスクスィの面々も巻き込んだの一大戦争が今、始まる！

## 第一話：「羊とオーロラとピンクの男」（前書き）

本小説は『仮面ライダー000』最終回後の展開を踏まえ、千回記念回（本編に於ける第27、28話）及び『レッツゴー仮面ライダー』に相当する出来事がなかった世界観での二次創作です。

本小説では、食玩及びカプセルトイでしか登場しなかった『平成仮面ライダーのコアメダル』が、『オーズ本編に登場したコアメダル』の”代わりに”登場します。

ディケイド側はオーズを知っていますが、オーズ側は一部を除いて自分たち以外の仮面ライダーを知りません。

これらの点をご理解いただいた上で本編をお楽しみください。

## 第一話：「羊とオーロラとピンクの男」

その日の高原は雲一つない、澄み切った空だった。牧草の乾いた匂いが鼻孔をくすぐり、少し冷やかな気候と相まって、嗅ぐ者に落ち着きと安らぎを与えていた。

青々と茂った草原の上を、肌触りの良さそうな真白い毛の羊の群れと、それらを連れた十数人の男女が横切った。上は老齡ながらも鬢かくしゃくとした女性。下は羊たちを先導する馬の上に乗った小さな少年。どうやら彼らは良質な牧草を求め、北へ南へと旅をしている羊飼いの遊牧民のようだ。

皆一様に羊毛で拵しらひえられたコートや帽子を纏まとっているが、その中に同じ服装をしている割には、妙に顔立ちの異なる男がいた。

馬に乗って列の先頭を陣取る、立派な鬚あこひげを蓄えた男性は、隣で馬の手綱を引いて歩くその男に声をかける。

「嫌な風だ。山の向こうから嵐が来る。早い所ここから離れるぞエジー」

「ああ、はい。って……俺はエジーじゃなくて『映司』ですよ、サヴァンおじさん」

「ううむ。お前の言葉は訛りが強くてな、済まんかった、エッチ」「いや、だから……。エッチでもスケッチワンタッチでも、お風呂に入ってアツチッチでもありませんって。映司です、火野映司」  
「そんなことはどうでもいい。さっさと馬に乗れ。手遅れにならないうちに」

映司、と名乗る男は「また名前を覚えてもらえなかった」と落胆しつつも、馬の背に腰を据え、一団の遙か後方に指示を飛ばす。引き返せという命令は瞬く間に伝わり、皆馬の背に乗って羊を先導しつつ、踵を返して元来た道を引き返し始めた。

手綱を握って馬を操る映司の肩を、背後から優しくつつく者がいる。彼と一緒に馬に跨る小さな少年、末っ子のパドルだ。

「ねえ、ねえねえエイジ。あの話の続き、また聞かせてよ。ねえねえ」

「エイジじゃなくて映司。いい加減覚えてくれよパドル。ええつと、どこまで話したっけ。俺の初恋の話？ それとも正義の味方になりたい御父さんと男の子の話？ じゃなきゃ、爆弾作りが大好きで、自分のために他の人たちまで吹き飛ばそうとした人の話……かな」

「ううん。パパスのダディさんが、敵の一味と仲間になっちゃったころー」

「ああ、もうそこまで話してたっけか。ええつと……」

目を輝かせて催促を続けるパドルに応じ、映司は記憶を反芻させ、

仮面ライダーオーズ・火野映司<sup>ひのえいじ</sup>。世界を丸ごと喰らわんとする途方もない欲望を持ったメダルの怪物・グリードたちを下し、世界の終末を阻止した彼は、少しのお金と明日のパンツ、今は亡き相棒の形見を手し、自らが欲した絆の手を結ぶため、世界中を巡る旅を続けていた。

彼は今、旅の途中でモンゴルの遊牧民たちと行動を共にしている。名前をきちんと覚えてもらえないのは悔しいが、皆人当たりが良く、流れ者の自分を快く受け入れてくれたことを喜んでいた。

「 というわけ。尤も、伊達さんはその手術に成功して、最後の戦いの前に帰って来てくれたんだけどね」

「ふうん。最後……、つてことは、エイジの戦いはもう終わったの？」

「ああ、そうさ。世界を滅ぼそうとする化け物たちはもういない。俺たちみんなでやつつけたからね。……そう、もう終わったんだよ」

”戦いは終わった”。そうだ、世界の終末もグリードが全てを喰らうこともない。何もかも元に戻ったんだ。喜ぶべきことじゃないか。

しかし、それを手放しに喜べない自分もいた。世界を救った代償も大きかったからだ。映司はそんな複雑な気持ちを振り切るように、ズボンのポケットに収まった「かつての相棒」を握り締めた。

「エイジ、どうしたの？ そんな浮かぬ顔してさ」

「何でもないよ。さてと、次のお話は……」

何も知らないこの子にそれを話して何になる。映司はポケットから手を出して迷いを振り切り、先程までと変わらない笑顔を見せた。だが今度はパドル少年の様子がおかしい。嵐とは別の方向を指差し、不安げな表情でそちらを見つめているのだ。

「エイジ、エイジ。大変だ、嵐だ。嵐が来るよ」

「それは分かってるよ。だから必死に引き返してるんだろ」

「違うんだ。雨とか風じゃない。もっと恐ろしい」何か」が」

促され、パドル少年の指す方を向く。映司が見る限り、後方の嵐より危険なものは見当たらなかった。

彼は一体何を恐れているのか。首を傾げつつも「大丈夫だよ」とパドルをなだめる映司だったが、彼らの遙か前方に、不気味な色合いの『光のオーロラ』が現れ、状況は一変した。

押しても引いてもたわむだけで、通り抜けられないオーロラに、羊たちはおるか、飼い主たちも戸惑って足並みを崩してしまふ。口々に何がどうなっているんだと愚痴る中、二つの『何か』が光のオーロラを砕いて飛び出し、平野の上に降り立った。

逃がさんぞ、仮面ラーイダ・デイケーイ！

俺は別に逃げちゃいねえぞ、人聞きの悪いことを言うな！

一人は煤けた銅の鎧を全身に纏い、蠍の絵柄の盾と柄に鎖が付いた斧を構えた、炯炯とした目付きと口髭顎髭が印象的な男。もう一人は、斜めに黒線が入った剣を構え、四角い柄。ピンク地の顔に黒の縦縞が無数に刻まれた、緑色の複眼の戦士だった。顔どころか体じ

ゆうがピンク色で、鎧の男に負けず劣らず不気味な印象を受ける。各々武器を構え、緊張した面持ちで向かい合っていることから、少なくとも彼らが仲の良い間柄でないことは理解した。しかし映司にとってどちらが敵か味方か、はたまた双方が敵なのかは分からない。

周囲の空気が徐々に張り詰めて行く中、先に言葉を発したのは鎧の男の方だった。男は歯を見せてにやりと笑い、向かい合うピンクの戦士にかかつて来いと手招いた。

「この『ドクトルG』相手にここまで粘れるとはな、敵ながら天晴れだ、仮面ライダー・デイケーイ。しかしそれも終わり。この世界を貴様の墓標にしてくれよう」

「墓標を刻むってんならよ」ピンクの戦士が息を弾ませて言い返す。「刻む名前くらいきちんと言えろ。俺の名前はデイケーイじゃねえ、仮面ライダー・デイケーイだ」

”デイケーイ”と名乗るピンクの戦士は言い返しつつ立ち上がり、鎧の男に向かつて駆ける。男の方も待つてましたと言わんばかりに、手にした盾と斧を構え、挑み来るデイケーイを迎え撃つ。

映司と遊牧民たちの前に現れた謎の闖入者。不気味な風貌の彼らに皆困惑し、馬や羊が乱れ始めた。

「おいおい、エジー、ありゃあ何なんだ」

「俺が聞きたいくらいですよ。それよりも早くここから離れましょう。この壁を伝って行けばどこかで切れ目に辿り着ける筈です」

異様な光景だが、それに気を取られて困惑している場合ではない。とぼつちりを食う前にこの場を離れなければ。幸い、彼らはこちらに気付いておらず、自分たちの戦いに集中している。逃げるには今しかない。

「サヴァンおじさん、みんなに合図を。兎にも角にもここから離れなくちゃ」

「分かった。とっとと逃げるぞ！」

サヴァンは馬の尻を叩いて走らせ、家族に羊たちを囲い込んだ上

で自分の後に続くよう指示を飛ばす。遊牧民たちが離れて行く中、  
ディケイドとドクトルGとの戦いが始まった。



第一話：「羊とオーロラとピンクの男」（後書き）

ドクトルG

「仮面ライダーV3」に登場した初期の大幹部。V3のことを「仮面ライダー」ではなく「仮面ライダー」と独特のイントネーションで呼ぶ所が妙に印象深い悪役さんですね。

一応、この話を書くにあたって彼（及び彼の怪人態）が登場する回を視聴して勉強してはみたのですが、文面には一切反映されていないのが悲しい所。

”エッチスケッチワンタッチ、お風呂に入ってアッチッチ”って、ここで書いても今の人たちには通用しないんでしょうかね。自分が母親伝いに聞いて、強烈に頭に残った言葉なので、そもそも母の造語なのかも知れませんが。

## 第二話：「斧と鎧と甲殻類メダル」

ディケイドの武器・ライドブツカーのソードモードがドクトルGの盾にぶつかり、釣り鐘を撞木で叩いたような轟音が周囲に響く。よろけはしたが、男に手傷を負わせることは出来なかった。

「硬いな……。面白エ、斧には斧でどうだ」

FORM RIDE 「DEN-O AX」

このままでは立ち居かないと判断したディケイドは、ライドブツカーを左腰に戻し、そこから「フォームライド」のカードを抜いて腹部のバツクルに装填。彼の体は電車の警笛のような音と共に、金色の鎧に身を包んだ仮面ライダー、『電王・アックスフォーム』へと変わった。

「小賢しい、姿が変わった所で、我が鎧は貫けぬ！」

それが何だと、今度はドクトルGがディケイドに飛び掛かる。ディケイドはそれを避けることなく受け止め、近寄ってきた彼の右手を掴み、アックスフォームの専用武器『デンガツシャー・アックスモード』で袈裟に裂いた。

「なな、なっ！ おの、おのれエ……」

盾で凌ぐことすら失念し、斧の強烈な一撃をその身に浴びたドクトルGは、傷口から赤い火花を散らして吹き飛んだ。ディケイドは相手が起き上がるよりも前に接近し、斧を二三度振って確実にダメージを与えて行く。

「くろう……。調子に乗るなッ」

だがドクトルGも負けてはいない。斧をその身に浴びてよろけた瞬間、態勢が崩れたことを利用してディケイドの胸部を蹴り付け、距離を取りつつ立ち上がる。

「やるな、ラーイダ・ディケイ。しかアし、貴様の付け焼き刃

の斧捌きでは、このドクトルGの首は取れぬ。絶対に取れぬのだ！  
「そうかい」デイケイドはライドブツカーから新たなカードを抜き出して言葉を返す。「だったら一つ勝負と行くか」

FINAL ATTACK RIDER「d - d - d - d - DE  
N・O」

「面白い、望むところ！」

デイケイドが金の縁取りのカードをバツクルに装填し、軽く手を叩いたと同時に、血気盛んに斧を構えたドクトルGが襲い来る。デイケイドはデンガツシャーを構えて迎え撃つ「振り」をし、斧を天高くに放つて、ドクトルGが斧を振り下ろすよりも早く、彼の左頬に回し蹴りを叩き込んだ。

「なっ、何故……」

「馬ア鹿。誰も”斧で”勝負するとは言つてねえだろ」

不意を付かれ、大きく態勢を崩すドクトルG。そこに先程デイケイドが振り上げたデンガツシャーが降りてきた。デイケイドは高く飛び上がって空中で斧を掴み、そのままドクトルGに向け真一文字に放った。

構えた盾すらも砕かれる程の一撃を喰ったドクトルGは、切り裂かれて離れそうになる右半身と左半身を両手で押さえ付けつつ、『卑怯者め』と思い切り叫んだ。

「よくも騙してくれたな！ 戦士の風上にも置けん奴め、もう許せぬ！」

「それ、お前らが言えた義理かよ……」

そう言つてやれやれと両手を振って溜め息をつくデイケイド。ドクトルGは懐から一枚の黒い『メダル』を取り出して、額の前で構えた。

「見るが良い、仮面ラーイダ・デイケーイ！」

ドクトルGがそう言つと、彼の額に自販機の投入口のようなものが現れ、手にしたメダルが一人でに吸い込まれて行く。

瞬間、彼は黒い煙の中に姿を消し、頭には蠍の鎧、腕に逞しい蟹

鉄、脚には海老の殻を模した外殻を纏った怪人へと姿を変えた。

「これぞ、我が真の姿にして新たな力！ 重装綱力二レーザー、だ！」

「おいおい、なんだそいつは。ナントカの仮装大賞の時期にやまだ早いぜッ」

言うが早いか、デイケイドは相手が動き出すよりも先に、カニレーザーの眉間を狙って斧を振るう。しかし平たく変形した蟹の鉄に阻まれた上に、叩き折られて使い物にならなくなってしまった。

「何ッ！ なんつう硬さだ……よッ!？」

「ふはは、重装綱カニレーザー様に、薪割りの斧など効くわけなからう。アポロ首領に仇なす愚か者め、このまま叩き割ってくれ」

カニレーザーの巨大な鉄がデイケイドを襲う。デイケイドは姿勢を低くし、バックステップで距離を取ると、焦りの色を浮かべて「参ったな」と呟いた。

「ああ硬くちや外側からぶっ壊すのは無理だな。だったら、内側から蒸し焼きにしてやる」

FORM RIDE 「HIBIKI-KURENAI」

デイケイドはカニレーザーに対抗すべく、赤く燃え盛る鬼のカードをバックルに装填。青い御霊と赤い炎に包まれたデイケイドは、その姿を「響鬼・紅」へと変質させた。

ATTACK RIDE 「ONGEKIBOU-REKK

A」

姿を変えると同時に、一対の撥を呼び出し、硬い外殻で守りを固めるカニレーザーを叩く。殻には傷一つ付かないが、清めの音撃と共に放たれた熱き炎は、カニレーザーの外殻を貫いて、奴に呻き声を上げさせた。

「熱……熱い！ だが、負けん！」

攻撃を受けて尚襲い来るカニレーザーに、冗談じゃないぜとぼやくデイケイド。蒸し焼きにするという考えは有効らしいが、倒し切るには力が足りない。蟹鉄を掻い潜って、奴の腹に直接叩き込まな

ければ意味がない。

鉄の動きは見た目よりずっと素早い。ただ懐に入るだけでは捕ま  
って胴から下を切り落とされるのが落ちだろう。素早いだけではい  
けない。何かで隙を作らなくては。そう思案していたデイケイドに  
向かい、黒色の光線が放たれた。

「うわっ、と！ 危ねえな、当たったらどうする気だ」

「それならば万々歳よ。超装綱カニレーザー様を鉄だけの怪人と思  
うな。発射、発射、発射ーッ！」

頭部と両手の鉄、三ヶ所から放たれるレーザーがデイケイドを襲  
う。数が多いがかわす分には大したことはない。デイケイドはプロ  
ボクサーのように腰のフットワークでレーザーを巧みにかわし、徐  
々に間合いを詰めて行く。

懐に近づくデイケイドを間近に、カニレーザーの心に焦りが生じ  
て狙いがさらに粗くなる。鉄で裂くには近付かれ過ぎた。外殻の内  
部を蒸し焼きにされては、さすがのカニレーザーもただでは済まな  
いだろう。焦るカニレーザーの目に、オーロラから逃れんとする遊  
牧民たちの姿が留まった。

この機を逃す手はない。カニレーザーは仮面の下でにやりと笑い、  
遊牧民たちの殿しんがりを行く映司とパドル少年に照準を合わせ、両腕のレ  
ーザーを放った。

「戦士だとか言っておいてやるのが汚ねえぞ、ちきしょう」

「そんなもの、貴様に言えた義理か」

放たれた光線が自分を狙ったものではないと気付いたデイケイド  
は、ライドブツカーをガンモードにして構えるも、光線は彼らの目  
と鼻の前まで迫っており、相殺は間に合わない。デイケイドはやむ  
なく二枚のカードをドライバーに装填し、踵を返して駆け出した。

KAMEN RIDER「KABUTO」

ATTACK RIDER「CLOCK UP」

デイケイドが変身カメンライドしたのは、赤き一本角の仮面ライダー、カブト。

カブトの持つ超高速移動能力『クロックアップ』で、光線が映司たち  
に当たるよりも早く、光線と彼らの間に先回りしようと言うのだ。  
二人に当たる前に光線を追い越したデイケイドは、腕を胸の前で  
十字に組んで、カニレーザーの光線を受け止める。もんどり打って  
宙を舞ったデイケイドは超加速空間から投げ出され、青々と茂った  
草木の上を暫く転がった。

「勝機！ 喰らえ、仮面ライダー・デイケーイ！」

仰向け大の字になって倒れ込むデイケイドに向け、カニレーザー  
は頭部のレーザー射出口の裏、後頭部から毒針を伸ばし、彼の背中  
に思い切り突き刺した。

背中から毒を注入されたデイケイドは、全身を襲う激痛と痺れに  
耐えかね、両膝について倒れ込んでしまう。

「エイジ、何だったのさ今の。あの赤い、なんであそこで倒れて  
いるの？」

「俺にだって分からないよ。でも……」

あの二人が何故戦っているのかは分からない。しかし一つだけ分  
かった事がある。デイケイドと名乗るピンクの戦士。彼は今、己の  
身を省みず、自分たちをカニレーザーの光線から庇ってくれた。そ  
の彼が今危機に瀕しているのだ、見過ごせる訳がない。

しかし、今の自分に何が出来る。嘗ての戦いに於いて、全てのコ  
アメダルとオーズドライバーを失い、ただの人間となった自分に、  
あの化け物と戦う力など皆無だ。下手に手助けに入っても何もなら  
ないのではないか。

どうすればいいかと思ひ悩む映司だが、そんな自分を誰かが”呼  
んでいる”ことに気付く。耳に届いた声ではない。頭の中に直接響  
いてくる声だ。

やはり放つてはおけない。映司は自身の懐を探って何かを確信す  
ると、馬をデイケイドたちの方に向け、後ろに乗るパドル少年に「  
降りて」と言った。

「そこで待っててくれパドル。俺、あの人を助けに行かなくちゃ」  
「助けに行くって……」パドル少年が不安そうな声で言う。「エイ  
ージはもうオーズじゃないんでしょ？ 助けるったってどうするの  
さ」

「大丈夫、何とかなるさ。なんとか、ね」

映司は自分自身に言い聞かせるようにそう言つと、鞭で馬の尻を  
思い切り叩き、彼らの元へと走らせた。

## 第二話：「斧と鎧と甲殻類メダル」（後書き）

デイケイド本編で登場しなかったカメンライド・フォームライドカードはそれなりに使うつもりです。響鬼・紅ってあれ、デイケイド放送時にはスーツがなかったのでしょうか。それとも単に使うタイミングがなかったのか……。

そういえば、「超装光ギンガマン」なんてものがありましたね、そういえば。あっちの方が見てて語感が良いのに、読みは一緒な筈なのに、超装鋼だと妙な気持ちになるのは何故なのでしょう。

基本的に状況説明 戦闘 状況説明……を交互に繰り返して行くようになるかと思えます。

ほぼ日更新で全20〜25話構成で終わらせたいと思っているのですが、こちらの都合でズレ込む可能性もあるので、現時点ではなんと……。



第三話：「青色メダルと輝く勇気と心に剣」（前書き）

カウント・ザ・メダルズ！ 現在、火野映司が所持しているメダ  
ルは

ヘッド・コア：割れたタカ・コア……一枚

### 第三話：「青色メダルと輝く勇氣と心に剣」

「ふふふ、貴様もこれで最後だな、仮面ライダー・ディケイイ」  
毒に侵され突っ伏したディケイドにカニレーザーが迫る。なんとか逃れようと地を這うも、彼の鍔は目と鼻の前まで迫っている。カニレーザーは彼の首を刎ねんと鍔を振り上げるが、ディケイドの足元に転がった二枚の“メダル”を目にして、鍔を止めた。

「赤に青……、首領が探していた”残りの”メダルではないか。成程、どおりで見つからぬ訳よ」

「くそつ、お前には……渡さねえ、ぞ」

そう言って手を伸ばすも、毒に侵されたディケイドの手は震えるばかりで、落としたメダルを拾うことすら出来ない。カニレーザーは彼の手を軽く払い除け、二枚のメダルに手を伸ばす。

しかし、彼がメダルを握ろうとしたその時、彼の視界を夜と間違えんばかりの漆黒の煙幕が遮った。

タコ、カン！

「なな、何だこれは！ くうう、何も見えんではないかッ」

突然視界が遮られたことに取り乱すカニレーザー。ディケイドはその隙に体勢を立て直して距離を取り、何が起こったのかと辺りを見回した。

見ると、「タコ」の形をした一匹の機械が墨のようなものを吐きつつカニレーザーの周りを浮いている。どうしたことかと首を傾げるディケイドに、馬に乗って戻ってきた映司が声を張り上げた。

「今の内です、逃げてください！ ピンクの人」

「ピンクの人だあ！？」唐突に現れた謎の男に対し、ディケイドは驚いて言葉を返す。「俺のことはいい、助かったんならとっと逃げろ！」

「今にも死にそんな人を見捨てて逃げろって言うんですか？」映司が声を荒げる。「そんなこと、俺には出来ません！」

「んなこと言ってる場合か、戦いの邪魔なんだよ、逃げろって！」  
「退きません！ 逃げろって言うなら、あなたも一緒に逃げましょう」

「馬鹿言つな、俺が逃げたらあいつが追ってくるだろ！」

「じゃあ俺だつて退きません」

ああ言えばこう言う、こう言えばああ言う。ディケイドと映司の間で両者一步も退かない言い争いが続く。

言い争いに夢中になっていたからか、二人はカニレーザーがタコの煙幕を振り払い、タコカンを砕いたことに気付かなかつた。

カニレーザーは右の缺で映司の胸を、左の缺で彼の首を絞めつつ言う。

「何処の馬の骨が知らんが、神聖な戦いを汚す輩は許せぬ、断じて許せぬ！」

戦いの邪魔をされ怒り心頭のカニレーザーは、映司を地面に押し付け、ゆっくりと力を込める。映司は引き剥がそうと缺に手を掛けるが、怪人と人間との力の差は歴然であり、引き剥がすどころか逆に絞め付けられていく。

もう駄目なのか……諦めるしかないのか？

嫌だ。諦めたくない。パドルもそのピンクの人も、俺を受け入れてくれたサヴァンおじさんたちも皆！ 誰も護れていないじゃないか。

力だ、力が欲しい。繋いだ手を離さなくても済むだけの力が、皆を護れる力が！

首と胸を絞められ、気が遠くなりかけた映司は、左腕を缺と自身の首との間に割り込ませ、力を欲して辺り構わず右手を伸ばす。カニレーザーは彼のそんな様を見、悪足掻きはよせと映司の右手を踏みつけた。

「無駄だ無駄だ。ただの人間であるお前に、超装鋼カニレーザー様

は止められぬ！ 死ねェい」

嫌味たらしくにやりと笑い、両の鉄に思い切り力を込めるカニレーザー。しかし彼は、映司を殺そうとするあまり二つのことを失念していた。一つはディケイドが先程、赤と青の二枚のメダルを落とっていたこと。もう一つはそのメダルが、自分たちのすぐ近くに落ちているということだ。

「ぬう……おおおッ!?」

そしてそれは、超装鋼カニレーザー最大の誤算だった。彼に踏み付けられる寸前、映司はその場に転がっていた青のメダルを掴み取っており、同時に彼の胸から勢いよく飛び出した「柄」によって、カニレーザーは跳ね飛ばされてしまったからだ。

「なん……なんなんだ？ 今何か、俺の……って、なな、何だこれ！」

跳ね飛ばされたカニレーザーもそうだが、当の映司も、自分の胸から剣の柄が飛び出ているという、訳の分からない状況を把握出来ず戸惑ってしまう。

戸惑いはしたが、驚いてばかりもいられない。胸に刺さっているようだが、血は流れておらず痛みもないので、とりあえずその柄を抜くことにした。

柄は何のとつかかりもなく引き抜け、ヘラクレスオオカブトの角を象った見事な剣が現れた。

引き抜くと同時に映司は気付く。先ほどまで握っていた青色のメダルがない。体の中に吸収されてしまったのか、それともこの剣が青色のメダルそのものなのか、それは分からない。しかし、一つだけ分かることがある。

「ここに剣があつて、奴が吹っ飛んでいるってことは……戦えってことなんだろう？ なあ、そうなんだろう！」

映司は剣を支えに立ち上がり、体勢を立て直している最中のカニレーザーに斬りかかった。完全に不意を突かれたカニレーザーは、胸を打たれて転げ回るも、その後何事もなかったように立ち上がる。

「ぐうう、人間ごときがよくもやってくれたな！ 容赦せぬ！ ああ容赦せんとも！」

カニレーザーの怒りに任せた鍔が映司を襲う。映司は剣の刀身で攻撃を受け、丁寧に捌きつつ、カニレーザーの堅牢な鎧に一撃一撃を丁寧に入れていく。その都度よろけるカニレーザーだったが、装甲を貫くことは出来ず、決定的なダメージを与えられずにいた。

「何かと思えばこんなもの、屁でも無いわ！ そおれい！」

「うわ、ああ！」

力負けし、刀身で防御しつつも吹き飛ばされて宙を舞う映司。上手く着地出来ず、足を挫いてふらつく彼に、ディケイドは何をやっているんだと檄を飛ばした。

「仮面ライダーの力を使ってそのザマか？ 期待外れにも程があるぞ！ もっと真面目に戦え！」

「真面目について……俺は十分本気ですよ、これ以上何をしろって言うんです！」

映司の尤もな言葉に、ディケイドは彼の持つ剣と、彼の足下に転がった赤色のメタルを見て言葉を返す。

「剣の柄だ。その窪みにもう一枚のメダルをぶちこめ、お前の足下に落ちているそれだ！」

「足下、ですか？ メダル、メダルと……」

言われて、足下を見回しメダルを探す映司。赤のメダルはすぐに見つかった。ディケイドの言う通り、拾い上げて剣に嵌め込もうとするが、カニレーザーがそれを見過ごす筈がなかった。

「言った筈だぞ人間よ、無駄な足掻きはやめるとな！」

そうはさせるかとカニレーザーが迫る。彼にメダルを奪われる前に剣の柄に嵌め込めた映司だが、刀身を盾として構えるには近付かれ過ぎてしまった。

「小癩な、このまま真つ二つに裂いてやるわ！」

「くう……こうなったら、喰らえッ」

守りに入る時間はない。ならば駄目元でも攻めるだけだ。映司は

懐に入り込んだカニレーザーに対し、逆に一撃見舞ってやった。

「逃げずに斬り返して来るとは……、なかなかやるではないか。しかアし、武器を持つとうが不意を突こうが、人間ごときにこのカニレーザー様を跪かせることは出来ぬ、絶対に出来ぬのだ！」

彼の不意を突いた一撃は、カニレーザーの胸部に届いた。届いたは良いが押し込んで斬り崩すことは敵わず、勢いを殺されてあつさり止められてしまう。

カニレーザーの額の水晶が輝いた。殺人光線発射の合図だ。押さえ込まれて動けないでいる映司は、最早これまでかと歯噛みするが、瞬間、刀身から発せられた”雷”によつて、カニレーザーは火花を散らし吹き飛んだ。

「なっ！ 何だこれは！？ 何故私が吹き飛ばされているのだッ」「何だつたんだ、今の……」火花を散らし、弾ける音を響かせる赤のメダルを見、これがピンクの男が言っていた力かと驚く映司。

そして同時に、オーズ<sup>ヘルト</sup>ドライバーを用いずに力を発揮出来るメダルなどあるのか。あるとしてこれは一体何なのか、これを持ち込んだ仮面ライダーディケイドとは何者なのか 様々な疑問が頭の中で駆け巡る。

しかしその事について考えている暇はない。不意打ちを喰らって倒れていたカニレーザーが、再び起き上がって来たからだ。

「なんと言う、なんとと言う失態！ 一度ならず二度までも！ 人間ごときに遅れを取る……とはッ！ 許さぬ、絶対に許さぬぞ！」

「あれでもダメ……なのか」「二枚のメダルの力を用いてなお、カニレーザーを倒せない事実には愕然とする映司。しかし、その様子を傍から見ているディケイドは、彼に「もういい」と言つて下がらせ、一枚のカードをドライバーに装填した。

「よくやったな旅人。後は俺に任せな」

「任せろつて……」不安げな声で映司が言う。「そんなにふらふらで大丈夫なんですか？」

「心配ねえよ。お前が時間稼ぎしてくれたお陰で、十分休めたしな」

FORM RIDE「AGITO BURNING」

カードをドライバーに装填すると共に、燃え盛る業火の戦士、「アギト・バーニングフォーム」へと姿を変えた。

「面倒なもんぶちこんでくれやがって、一発で仕留めてやるぜ」

FINAL ATTACK RIDE「a - a - a - AGITO」

同時に、金の縁取りに六本角の紋章が象られたカードを装填。デイクイドの右手に炎が灯り、その勢いのまま、煙幕に気を取られたカニレーザーの胸に叩き込んだ。

「ふっ、ふふふふふ、そんなもので我が鎧が砕けると……でも……んん、んんん!？」

受けた直後こそ高らかに笑っていたカニレーザーだったが、その衝撃で胸部から亀裂が走ったことで、笑顔が焦りに変わる。

亀裂の生じた箇所は、先程映司が剣を振るったあの部分。不発に見えたあの一撃で、カニレーザーの装甲にわずかにヒビが入っていたのだ。そこに叩き込まれた強烈な炎の拳。ヒビを通じてカニレーザーの体内に直接叩き込まれた熱は、瞬く間に彼の体を蒸し焼きにした。

「おお……おっ……、ここまで……か。だが、私はあまりに過ぎぬ。すぐさま第二陣が、アポロ首領の手の者が貴様たちを、おおッ!!」  
全て言い終わらないうちに、カニレーザーは目や口から炎を噴き、堅牢な殻の内側から爆ぜる音を響かせて倒れ込む。そのまま二度と立ち上がることはなかった。

デイクイドは安堵の溜め息を漏らして腰を下ろし、腹部のバツクルを左右に引いて変身を解く。ピンクの戦士が端正な顔立ちの青年に変わったことに、彼を助けた映司は驚きの声を上げた。

「あ……。人間、だったんですね」

「何だよ、その棘のある言い方。それはそうと色男、お前に聞いたいことがある」

「聞きたいこと、とは？」首を傾げ、映司が聞き返す。

「自分で言うのも何だけどよ、ピンク……あぁいやマゼンタにバーコードみたいなラインの入ったカイクツを、どうして助ける気になつたんだ」

「簡単なことですよ」青年の問いに、映司は当然だとしても言わんばかりの顔で言葉を返す。「あなたは自分の身を省みずに、見ず知らずの俺たちを助けてくれた。そんな人が悪い奴だとは、思えなかつたからです」

「あんなもん、偶然だ偶然。まあ、それはさておき……」

青年は気恥ずかしそうに後ろ手で頭を掻くと、映司の前にそつと右手を差し出した。

「色々あったがまあ、助かったことは確か、だな。礼を言う。俺は門矢士<sup>かどやしか</sup>。写真家で通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

「仮面ライダー……ですか」映司は門矢士の妙に尊大な態度に戸惑いつつも、彼の差し出した右手を握り返して言った。「俺は火野映司。こちらこそ、危ないところを助けて頂いて」

「気にするな。そういやお前、旅人なんだってな。どおりで胆が据わって居る」

「いや、それって旅人かどうかなんて関係無いんじゃないか……というか、今の怪物にさっきのオーロラ……これは一体何なんです」

「気持ち分かるがな」はやる映司に、士は落ち着けと促した。「順序良く行こうぜ。話すと少しばかり長くなる」

「長く……なるんですか？」

「何だ。事情は聞きたいが、長話には耐えられないってんじゃないだろうな。そんなガキみたいな言い訳は通らねえぞ」

「いえ、そうじゃなくて……」子どもを待たせているんだと言おうとした瞬間、映司の背に遠くで待っていた筈のパドル少年が抱き付いた。

「パドル？　なんでここに！　危ないから待っててくれって言ったじゃないか」



「悪いやつはエイジがやつつけてくれたんだし、いいじゃん」パドル少年は目をきらきらと輝かせて言葉を継ぐ。「僕、全部見てたよ。エイジ、すっごく格好よかった。エイジは本当に”オーズ”だったんだね」

「いやいや、やつつけたのは俺じゃなくて、この人だよ。俺はその手助けをしただけさ」

映司はそう言って、土の方へと手を述べるが、当の土はどうしたことか挨拶もせず、パドル少年の両肩を掴んでこう言った。

「小僧、お前今……この旅人のことを”オーズ”って言ってたな。そいつは本当なのか？」

「ほ、本当だよ」パドル少年が言った。「エイジはいつもオーズだった時のお話聞かせてくれるし、さっきだって蟹のお化けをやっつけてたじゃん。あれでオーズじゃないわけないよ」

「なるほど……な」土は顎に指を乗せて暫く何かを考えると、そういうことかと一人で結論付け、映司に言った。

「この世界の仮面ライダーオーズ。そいつがお前なのか、火野映司。どつりでそのメダルを扱える訳だ」

「この世界の、って……」聞き間違いかと思い、映司は土に尋ねた。「会ったことがあるんですか？ その……俺じゃないオーズに」

「一度だけな。あの時はお互い素性も聞かず、変身も解かなかったから、仕方なかったんだけどよ」

「それはそうと、この世界とかあの世界とかって……土さんこそ一体何者なんです。訳が分かりませんよ」

「面倒臭いが仕方ねえ。俺はだな、お前らとは別の……」

「えっ？ 何ですって？ 聞こえませんかよ、土さん」

「何い？ だから、俺はお前らとは別の……」

「何ですか！？ 風の音がうるさくて……」

「ちゃんと聞けよ！ っていうか、なんなんだよこの風は！」

両者の言葉を遮る荒々しい風に、何だ何だと空を見上げる二人。彼らの目に映ったのは煤けた緑色の大型のヘリコプターだった。

「何だッ、やるうってんなら相手になるぜ」土はかかってこいとデイケイドライバーを取り出し、迎え撃とうとするが、ヘリの側面を見て「何か」を感じた映司に止められた。

「待ってください、あのマークって、まさか……」

映司が目をつけたのは、ヘリ左側部に描かれた水鳥を模ったマークと、その下にローマ字で書かれた”KOUGAMI FOUNDATION”と言う文字。もしやと思った映司は土たちを下がらせ、ヘリを着陸させて中から人が出てくるのを待つ。

「お久しぶりです、火野さん」

ヘリのタラップの中から姿を見せたのは、映司の良く知る人物だった。艶のある亜麻色の髪に端正な顔立ち、体のラインがくっきりと見えるライダースーツを身に纏った美女。鴻上こうがみファウンデーシヨンの秘書・里中エリカだ。

「旅の途中、お呼び立てして申し訳ありません」里中が言う。「ですが、事態は一刻を争います。どうか、私と一緒に日本まで来ていただけないでしょうか、火野さん。それと……門矢土さん」

「日本に……ですか？」顔に疑問符を浮かべて映司が言う。「一体何があつたんです」

「いや、ちよつと待て」二人の会話に土が割って入った。「アンタ一体何者だ？ 何故俺のことを知っている。答えるよ」

何故だと詰め寄る土に対し、里中は眉ひとつ動かさず、淡々と答える。

「それは機内で説明します。さあ、お早く、世界の破壊者・デイケイドさん」

「破壊者……か」土は里中のことを訝しげに見つつ言葉を返す。「オーケイ、そこまで知っててそう言うんなら、大人しく話を聞いてやるうじゃねえか。乗せてくれ」

「了解しました。足下にお気をつけ下さい」

土が里中に手を引かれ、ヘリに乗り込む中、映司はパドル少年の

手を握って言った。

「ごめんな、パドル。俺、行ってこなくちゃいけないみたいだ」

「オーズとして、なんでしょ？ でもさ、でもさ。ちゃんと帰って来てくれるよね？」

「勿論さ。まだ話してないことも一杯あるしね。約束するよ」

「うん。約束だよ」

指切りで約束を交わし、ヘリに乗り込む映司。パドル少年は残された馬と共に、だんだん離れて行くヘリを見送った。

「おおい、パドルやあい、大丈夫かあ？」

「サヴァンじいちゃん。そっちこそ、みんな大丈夫？」

そんな中、オーロラから離れていた遊牧民の団が戻ってきたパドルと映司が団から外れ、見慣れないヘリコプターが出てきたことで、不安に思っただけでやってきたのだ。

「うん？ パドルや、エジーはどこに行ったんだあ」

「行っちゃったよ」パドル少年は小さくなっていくヘリを指差して言う。「あの飛行機に乗ってね。行かなきゃいけないところがあるんだって」

「行かなきゃいけないって……、壁はまだ消えてないし、あんな奴らがまだ一杯いるかもしれないんだぞ。大丈夫なのか」

「大丈夫だよ、じいちゃん」パドルは晴れやかな顔で言った。「だってエイジは”オーズ”だもん。どんな奴にも負けないって」

パドルは消え行くヘリに向かい、行ってらっしゃいを見送った。

### 第三話：「青色メダルと輝く勇氣と心に剣」（後書き）

オーズに変身すると思った？ 残念、生身でした。

「オーズ」としての出番についてはもう少々お待ち下さい。

一話がピンクで二話が黄色、三話で緑。以後、背景はタトバローテーションで行こうかと思ってます。

タトバなら赤で行けよ、と言われそうですが、赤に設定すると文章が読みづらくなるので薄めの色でごまかしを……。

筋肉モリモリマッチョマンが好きです。アギト・バーニングフォームは全ライダーの中でも三本の指に入る程好きです。

扱的には中間フォームのようなものだけど、最強形態に匹敵するキャラをフォームライドで出しているのか？ と悩みましたが、そこは暖かい目で見てください。

#### 第四話：「アポロショックカーとライダーメダルとコウモリ襲来」

「 現在、鹿児島上空を通過。機体、天候、共に良好。敵機影無し。順調に航行しております」

「了解。引き続き宜しくお願いします」

火野映司と門矢土が、鴻上ファウンデーション所有の輸送ヘリに乗り込んでから、約半日が経過した。ヘリは三度の給油と休憩を取って順調に航行し、日本の領海に到達した所である。

操縦士に現状を聞いて、里中が映司たちの所へと戻ってきた。映司は先の休憩時に街で購入した肉まんを頬張っており、土は眉間に皺を寄せ、貧乏揺すりを行っていた。

「航行は順調です。後三時間程で財団に到着するかと思われます」

「日本かあ。比奈ちゃんたちとも長いこと会ってないし、楽しみだなあ」

「楽しみってお前、そんなこと言ってる場合かよ」浮わつく気持ちの映司に、土が言う。「あの平原を発つてもう半日だ、それなのに何故呼ばれたのかすら聞けていないんだぞ」

土はとうとう痺れを切らし、映司の制止も聞かず、里中に掴み掛かった。

「いい加減に話したらどうだ。こちららもう、黙りにゃあうんざりなんだよ」

「落ち着いて下さい門矢さん」里中は表情を変えずに言葉を返す。

「こちらで何も話さなかったことは謝ります。ですが、説明は自分の方で行うと言うのが鴻上の指示でしたので」

「その口ぶりからすると、鴻上ってのはお前の上司か何かか？」

「はい。丁度通信の準備が整いましたので、説明は彼の方から……」  
里中は土の手を引き剥がすと、鞆の中から一抱えもある液晶モニタを取り出して、土たちの方へと向ける。白黒の砂嵐の後液晶モニタに現れたのは、画面全てを埋め尽くす、色黒に壮年の暑苦しい男の顔だった。

「やあ！ 久しぶりだね火野君！ 元気そうで私も嬉しいよ！」

「あ……：鴻上さん。そちらこそ、お元気そうで何よりです」

鴻上こうがみと呼ばれた男は、映司と簡単に挨拶を交わした後、土の方に目を向けた。

「そして君が……」意味深に間を取って鴻上が叫ぶ。「世界の破壊者・デイケイド！ 門矢土君だね！ 君に出会えて、私はヒジョウに嬉しいよ！ 共にこの出会いを祝おうではないか！ ハッピーバースデー！」

付き合いの長い映司はあっさりと言ったが、初対面の土はそうはいかない。鴻上が喋り続けている間、彼は辟易とした顔で耳を塞ぎ続けていた。

「会長」このままでは話し合いにならないと危惧した里中が動く。

「そこまで叫んで頂かなくても声は届きます。それと、もう少しカメラから顔を離していただけませんか？」

「おお、失礼、失礼」彼女に言われ、カメラから顔を離す。液晶モニタには、目が痛くなりそうな程派手な緑色のスーツを纏った男が映った。

「君たちが私の所に通信してきたと言う事は、もう日本のどこかに到着したということかな、里中君」

「現在鹿児島県上空を通過。後数分程で熊本の県境に入ります」

「熊本、か」鴻上は顎に指を乗せ思索する。「ならば私が説明するよりも、」見せて”しまった方が早いね。里中君、パイロットに高度を下げ、『熊本城』上空を通過するよう伝えてもらえるかね」

「了解しました」里中はモニタを置いて即座に立ち上がり、操縦士に鴻上の指示を与えに行く。

説明する、と言っていたのに何だこれは。鴻上の態度に苛立ちを覚えた士は、モニタにかじりつかん勢いで言う。

「待てよ。遊覧飛行なんか後でもいいだろう、さっさと状況を説明しろ」

「そうカリカリしないでくれ門矢君。この方が説明するには手っ取り早いのだよ。見たまえ、これが今の……この国の”惨状”だ」

「惨状って何だ、惨状って……」

鴻上に言われ、へりの窓越しに熊本市街の様相を目の当たりにした士は、驚きのあまり声を失ってしまう。どうかしたのかと遅れて窓の外を見た映司は、想像を絶する惨状に息を呑んだ。

「何だよ……これ」

「一体、どういうこと何ですか！ どうして、どうして……。熊本城がセルメダルセルメダルの山になってるんですか！」

二人は自分で自分の目が信じられなくなった。そこは確かに熊本県の観光名所・熊本城の筈だ。ならば今目に映っているものは何だ。城の形をしてはいるが、銀色のメダルが城の形に積み上げられただけではないか。

驚いてそれ以上声が出ない二人に対し、鴻上は「驚くのも無理はない」と言葉を紡ぐ。

「こんなもの、人間業じゃあないからね。それに、ここだけじゃない。三日……、たったの三日でこの国の主要都市、軍隊、在日駐屯米軍の基地は全て、セルメダルの塊に変えられてしまったんだ。『アポロシヨツカー』の手によつて」

「アポロ……シヨツカー？」映司がオウム返しに言葉を返す。「そいつらが熊本城を、この国をこんなにしたって言うんですか」

「そうだ。信じられないかもしれないが、それが事実なのだよ、火野君」

「そんな……無茶苦茶な」

パニック映画と見紛う程の熊本の惨状を目にし、映司は茫然自失となつて膝を付く。逆に士は、「やはりやって来たか」と眼をぎら

ぎらと輝かせ、割れんばかりの勢いで眼前の窓硝子に力を込めた。  
「アンタ、鴻上だとか言ったな。教えてくれ。『ヤツ』はこの世界で何をしたんだ」

「彼のやったことは至ってシンプルだよ」鴻上が言葉を返した。「突然光のオーロラから現れて、」全世界の人間たちに次ぐ。この世界は私のものだ。命が惜しくば速やかに降伏せよ」と我々に迫ったのさ。当然、誰も受け入れることなく交渉は決裂。彼は腹いせと力の誇示のために、この国の軍隊を全て無力化させたと言う訳だ」  
「相変わらずやるのがえげつねえな。他の国はどうしているんだ？」

「彼らの力に恐れを成して降伏するものと、最後まで戦い抜くと息巻く国で真つ二つさ。現状では降伏した方が利口だと思うがね」

「違えねえ」

「ちよ、ちよつと待ってください二人とも」映司は何の話をしているんだと二人の間に割って入る。土と鴻上の間で話がどんどん進んでいるが、彼には理解できず、置いてきぼりにされたのが我慢ならなかったのだ。

「もつとこう……分かるように説明してくださいよ。アポロシヨッカーってのは何なんです。それに、何で俺たちを日本まで呼び寄せたんですか」

「ああ、お前にはまだ話していなかったな」土は面倒臭そうに後ろ手で後頭部を掻きつつ言う。「今から少しばかり前の話だ。俺たち『仮面ライダー』が、『シヨッカー』と言う大組織と戦い、勝利を納めてからすぐの、な」

「俺”たち”って……仮面ライダーって、土さん以外にもいるんですか？」

「ああ、いるぜ。それこそうじゃうじゃとな。だがその話は後にしろ。続けるぜ」長くなるからと椅子に腰掛け、土が再び口を開く。

「仮面ライダーとシヨッカーの戦いは、山のようにドでかい大首領を倒し、幹部たちの殆どがマグマの底に落ちて行ったことで決着し



た筈だった。少なくとも、あの時戦った奴らは、仮面ライダーオーズだってそう思っていた筈だ」

「仮面ライダー”オーズ”って……、さっき士さんが言ってた、あの」

「その通りだ。面倒臭いから掻い摘んで話すが、俺はこの世界の間じゃない。お前がさっき見たあのオーロラ、あれを通過して様々な世界を巡るのが俺の本業なんだよ」

「本業って……、士さんも旅人だったんですか？」

「ああそうだよ、いちいち話の腰を折るな。話を戻すぞ。……だが、戦いは終わっちゃいなかったんだ。幹部連中が落ちて行った火口から、赤く輝く、禍々しい六枚の翼を羽ばたかせ、そいつは俺たちの前に現れた。赤に朱色にオレンジ、”三色が混ざり合った”メダルを使って戦うあいつに、俺たち仮面ライダーはなすすべなく倒されちまった。ヤツの名は”アポロガイスト”。例の軍団の頭目だ」

映司は信じられないと言いたげな顔で土を見る。彼の強さは間近で見ていると知っている。そんな彼が、仲間たちと徒党を組んでも負けたと言うのか。彼の言うアポロガイストとは、どれ程の力を持っているのだろうか。

しかし、それら以上に疑問な点が一つ。三色が混ざり合ったメダルとは何か。今までの話から察するに、アポロガイストという怪人がコアメダルを用いて戦っていたことは理解できた。しかし、コアメダルの色はどれも単色で、色が混ざったものなど存在しない筈だ。これは一体どういうことか。

「待つてください、士さん。色の混ざったメダルって何ですか。そんなもの、存在するわけが……」

「そう言われてもな、俺は実際にこの目で見たんだ。三色に分割されて、それぞれに鳥の紋章が刻まれたやつを」

嘘を言っている様子はない。信じられない話だが、門矢士は三つのメダルが混ざり合ったものとやらを、本当に目撃したのだ。

しかし、そんなものあり得るのか？ 世界が違えばそんなメダル

も存在するのだろうか。映司が一人思案を巡らせる中、今まで聞き手に回っていた鴻上が口を開く。

「成る程、そういうこと……か」

「鴻上さん、何が」そういうこと”なんですか？」

「火野君。君はドクター真木と戦った時のことを覚えているかね？」

「何です藪から棒に。コアメダルとオーズドライバーがブラックホールに飲み込まれたあれ、ですか？」

ドクター真木との最後の戦い。鳥系グリード・アंकと協力して挑み、恐竜メダルの無の欲望を光弾として放ったことで、ブラックホールに全てを飲み込んで決着したあの戦いのことだ。

しかし、それがこの話と何の関係があるというのか。顔に疑問符を浮かべる映司に、鴻上は「その通りだ」と言葉を返した。

「時に火野君、君は『ホワイトホール』と言うものをご存知かな」

「ええと、ブラックホールと繋がっていて、そこで飲み込んだものを放出する天体がホワイトホール……なんでしたっけ。でも、何で今そんな話を」

「関係があるからさ」鴻上は自信ありげに答えた。「君の話じゃあドクター真木と恐竜メダルは粉々に砕け、他のメダルと一緒にブラックホールに吸い込まれていったんだっけ。そこでさっきのホワイトホールだ。ブラックホールとホワイトホールは表裏一体の代物。この世界で発生したブラックホールが次元を越えて、門矢君たちの世界と繋がったのだよ。」

門矢君が見た異質なコアメダル。あれは恐らく、ブラックホールを抜ける中で砕けたメダルたちに”消えたくない”という欲望が生じ、互いに引き合っただけのものではないかな。コアメダルの三枚揃いの力がどのようなものか、君はよく知っているだろう？ 成る程、それを使用した怪人がライダーを圧倒できたのも頷ける」

「アंकの体みたいなのが、あの中で起こったって言うんですか」映司は訝しげな目で鴻上を見る。「でも、行く先が別世界だとか、意思の消えたメダルに欲望が芽生えるだなんて、突飛過ぎて現実味

がありませんよ」

「現実味があるうがなかるうが、実際に起こったのだからしょうがないだろう。それに、今気にすべきことはそこじゃない。そうだね、門矢君」

鴻上に唐突に話を振られ、土はやや戸惑いながらも言葉を返す。

「俺たちの世界にいたアポロガイストが、なんでこの世界に攻めて来たのか……ってことだろ？ ヤツは俺たちライダーを倒した後、ろくでもないことをしてかしたんだよ。」

シヨツカーと言う組織は、古今東西の優秀な技術に目を付け、次々に吸収して発展した組織。コアメダルの事も研究を行っていたらしい。ヤツはあの戦いの後、アジト跡地に残された技術を応用し、とんでもねえものを作りやがったのさ」

「とんでもないもの……とは？」

「人を直接メダルに変える装置さ。詳しい仕組みは知らないが、人間ってのは頭のとっぺんから足の先まで欲望の塊だからな、変換されちまえば同じになるって訳だ。それは仮面ライダーも例外じゃねえ。」

俺以外のライダーはみんなやられた。やられただけならまだよかったんだが、ヤツはライダーのメダルに宿る力を利用して、”全平行世界”を繋ぎ、自分の支配下に置こうとしやがったんだ。

ヤツの元にはほぼ全てのメダルが集まり、辛うじて一人生き延びた俺にも止めようがなかった。しかし……」

「しかし？」

「奴らは失敗したんだよ。ライダーメダルの力を甘く見すぎてたんだな。全ての世界を繋ぐ所か悪戯にいじくり回したせいで、制御が効かず、奴らのアジトと大多数の怪人を巻き込んで消えやがったのさ。俺はその隙に二枚のライダーメダルを奪って、無差別に発生したオーロラの一つに飛び込んだ。後は奴らの放つ刺客たちと戦いながら、ヤツの居場所を探し回ってたって訳さ」

土はそこまで話し終わると、ゆっくりと深呼吸をして言葉を継い

だ。

「俺から話せることは以上だ。さて鴻上会長とやら、俺たちをそんな物騒な戦場に呼んだ訳、そろそろ聞かせてもらえるか？」

「いいだろう」鴻上は真剣な顔付きで言う。「では、本題に入ろうか。里中君」

鴻上の一言に、今まで黙っていた里中が口を開いた。

「お二人にやっていたいただきたいのは、アポロシヨッカーの撃退及び、現在敵の捕虜となっている鴻上の救出です。会長なしではライドベ  
ンダーもカンドロイドも自由に使用出来ませんので……」

「ちょ、ちよつと待ってください里中さん」彼女の口を突いて出た一言に、映司は目を見開いて聞き返す。「捕まってるんですか!？」

鴻上さんが

「はい。会長、カメラをもう少し引いてもらえますか？」

「うむ、少し待ちたまえ」

里中の求めに応じ、鴻上はカメラを引いて、周囲の様子を映司たちに見せる。

彼が立っていた場所はいつもの応接間ではなく、薄暗くて何もなく、微かな明かりだけが灯った硝子張りの部屋であった。

鴻上が上の方へとカメラを向ける。部屋の天井に供えられた小箱の中で何かが動いた。長くうねうねとした何かが、火花を散らしながら箱の中で這いずり回っているようだ。

「鴻上さん、これは一体……」

「コアやセルの使い道を知っているのは、この世界じゃ我が財団だけだからね、真っ先に奴らに狙われたのさ。勿論ライドベンダー隊や仮面ライダーバースを出勤させて応戦させたのだが……結果は惨敗。私も捕らえられ、ライドベンダーやカンドロイドの使用権も彼らに奪われてしまったんだよ。捕まる際に上着の中にこっそりと、テレビカメラ内臓型のバッタカンドロイドを忍ばせておいたから、こうして君たちと話が出るのだけだね。

この牢獄には上の電気ウナギカンドロイドから供給された5万ボ

ルトの電流が流されていてね、自分の力じゃ脱け出せないんだ」

「脱け出せないって……、バースも倒されて、鴻上さんも捕まって、全く勝ち目がないじゃないですか！ これじゃ俺が来たって何にも……」

「落ち着きたまえ火野君」狼狽える映司を鴻上が宥める。なだ。「確かに絶望的な状況だ。しかしね、君がいて、仮面ライダーデイケイドがアポロシヨッカーからライダーメダルを奪ってきた、という情報が手に入った今、逆転のチャンスは大いにあるのだ」

「逆転のチャンスって……、俺はもうオーズじゃないんですよ、何をしようって言うんです」

「そうだね、その通りだ。しかアし、里中君！ 火野君に例のものを」

「かしこまりました」

里中は鴻上の求めに応じ、モニタの入っていた鞆に手を伸ばし、虹色のリボンが巻かれた白いプレゼントボックスを取り出した。

「……これは？」

「開けてみたまえ。そうすれば分かるさ」

「はあ……」

訳が分からず、疑問は拭えないが、映司は里中が差し出したプレゼントボックスを掴むべく手を伸ばす。しかしそんな疑問も、ヘリの操縦席から聞こえてきた悲鳴で掻き消えた。

「な、なんだ今の声」

「操縦席からだぜ。何かあったんじゃないかねえのか……わわっ、と！」

驚いたのは悲鳴のことだけでは無い。それと同時にヘリの高度が下がり始めたのだ。どう考えても普通じゃない。

「私が見てきます。二人はそこで待機していて下さい」

まずは私ごと操縦席に向かう里中。そこで彼女が見たものは、首と体が皮一枚で繋がって事切れた操縦士と、血に塗れたまみ右手の爪を舐めて拭う、筋骨隆々としたコウモリの怪人の姿だった。

「……」らくなる「リント」ザボゾグ。はこぼすリンバボゾグ！みんなこぼすゴゼ、ゴオマ。ゴゼ、おれゲおれ、おれゲえ



第四話：「アポロシヨツカーとライダーメダルとコウモリ襲来」（後書き）

鴻上会長のあのキャラクターを再現できません。つくづく小林脚本は変なテンションのオッサンを描くのが巧いなあと実感させられます。

説明回！ 絶対に説明回！

全体的にごちゃごちゃしてすみません。次回は多分バトル一本です。

里中さんは無理に喋らせるより、常に冷静で、会長や後藤さん及び伊達さんの異常行動にしれっとした顔で突っ込みを入れる時が一番輝いていると思います。主観ですが。

**第五話：「蠍の置き土産と800年前の遺産と復活のオーズ」（前書き）**

カウント・ザ・メダルズ！ 現在、火野映司の使えるメダルは

ヘッド・コア：クウガ・コア

アーム・コア：ブレイド・コア



第五話：「蠍の置き土産と800年前の遺産と復活のオーズ」

「リント、ボソグ。ダブガンボソグ。ゴゼ、シュゲゲグス」  
「うぐ、くう……」

何も知らずに操縦席に入ってきた里中は、コウモリ怪人・ゴオマの格好の標的だった。ゴオマは彼女があつと声を上げるよりも早く、その細くしなやかな首を掴み、力を込めて絞め上げる。

息が出来ない。気がだんだん遠くなつて行く。助けを呼ぼうにも声が出ない。抵抗しようのない里中を目にし、ゴオマの勝ち誇った笑い声が機内に響く。

K A M E N R I D E 「 D E C A D E 」

だが、その笑い声が仇となった。里中とも操縦士とも違う不気味な声を聞き付けた土が、デイケイドに変身して向かって来たのだ。  
「へりに乗り込んで来るとはいい度胸じゃねえか。相手になつてやるぜ」

ゴオマを床に押し付けて馬乗りになり、顔に何度も拳を見舞うデイケイド。ゴオマの首絞めから解放され咳払いをする里中を、映司は優しく抱き止めた。

「里中さん、大丈夫ですか？」

「ええ……なんとか」

「こいつらは俺たちで何とかします。里中さん、へりの操縦は」

「問題ありません。行けます」

「すみません、お願いします」

映司に促され、里中は事切れた操縦士をどかして操縦桿を握る。著しく高度を落としていた輸送へりはあつと言つ間に持ち直し、再び空へと舞い上がった。

機体は持ち直したが、へりの急上昇で体勢を崩したデイケイドは、

四五度転げ回ってヘリ後方のタラップに叩きつけられてしまう。顔を殴打されて怒り心頭のゴオマが頬を擦りながらゆっくりと立ち上がる。

「ちきしょう、面倒臭えな。なら一気に……」

「あわわ、待ってください」ライドブツカー・ガンモードを構え、遠方よりゴオマを撃ち抜かんとするデイケイドを、映司は彼の前に立ちただかつて制止する。「ここはヘリの中、地上数千メートル上空なんですよ！ 銃なんか使ったら燃料に引火して、俺たち全員海の藻屑ですって」

映司の言葉を聞き入れたデイケイドは、舌打ちをしつつライドブツカーをブツクモードに切り替え、発砲の代わりに一枚のカードを取り出した。

「わあったよ。なら、コウモリにはコウモリだ。接近戦でカタつけてやる」

FORM RIDE「KIVA DO-GA-BA-KI」  
カードを装填すると同時に、青に緑に紫の三つの彫像がデイケイドの体に取り込まれ、三体のアームズモンスターの力を同時に扱える形態『キバ・ドガバキフォーム』へと姿を変えた。

「土さん、だから暴れちゃまずいんですって」

「安心しろ。ヘリを壊さなきゃあ、いいんだろ？」

デイケイドはそう言うと、胸の前で両手を十字に組んで力を溜め、充実した所で解き放った。

瞬間、彼とゴオマの周りの足元が”水溜り”へと変貌し、ゴウマの足を封じた。

「覚悟しろよコウモリ野郎。速攻でケリつけてやる」

動きを封じられたゴオマの顔を、胸を、腹を、デイケイドの重く鋭い拳が貫く。身体中を稲妻が走ったかのような痛みがゴオマを襲うが、それだけでは終わらなかつた。いつの間にか彼の足下は凍り付いており、いくら拳を喰おうが攻撃の反動で起き上がって来るのだから、喰らう方はたまったものではない。

拳の連撃にゴオマが弱った所を、右腕から呼び出したガルルセイバーで袈裟に真一文字に唐竹に、斬って斬って斬り捲る。ゴオマの体はあつと言う間に刀傷で埋め尽くされた。

「さあてと、一気に決めちまうか」

ガルルセイバーを右腕の中に戻し、胸部から巨大な槌つち・ドツガハンマーを呼び出して構えるデイケイド。雷の力を宿したこの槌で、一気に叩き潰すのだろう。

「冗談じゃない、こんなところで死んでたまるものか。ゴオマは懐から赤い”コウモリ”の紋章が刻まれたメダルを取り出して、デイケイドが槌を降り下ろすよりも先に飲み込んだ。

「これで終わり……じゃあ、ないのか!？」

ゴオマは、自身の胴体ほどの大きさの槌を片手で受け止め、その上で指先に力を込めて槌を砕き、床の水の拘束も気合いで弾き返す。メダルの力の影響か、両腕に生えていた翼が消えて、代わりに背中から赤いマントのような布が生えた。上半身の筋肉が異様に盛り上がり、金色の外殻に包まれる。

『キバ』のメダルを飲み込んだゴオマの強さは圧倒的だ。よろけるデイケイドの胸部に、纏っている装甲が凹む程の蹴りを叩き込み、仰向けに倒れたデイケイドの首根を掴んで持ち上げ、狼の牙のように鋭く尖った爪で肉を裂く。

デイケイドはやられてたまるかと、再びガルルセイバーを手に反撃を試みるが、ゴオマの金色の鎧の前に歯が立たず、逆に奪われ、ゴオマに似合いの禍々しい造形の剣となって、デイケイドの体を斬りつけた。

「土さんツ」デイケイドの窮地に映司が動く。彼から預かっていた『ブレイド』のメダルを握り締めてあの剣を呼び出し、『クウガ』のメダルを嵌め込んで雷の力を刀身に宿らせ、ゴオマに斬り掛かった。

彼が襲い来ることを察知していたゴオマは、振り向き様に映司の剣を受け止めると、指先に力を込めて剣の刃先を叩き折る。まさか、

そんなことはと呆然自失の映司に、ゴオマの後ろ足蹴りが炸裂した。「嘘だろ……、そんな！ 叩き、折られるなんて……」

横隔膜を刺激され、一時的に呼吸困難に陥る映司。しかし、仮面ライダーの力で精製された剣が、いとも容易く折られたという事実が、これから自分たちが戦うべき相手の恐ろしさが、息苦しさをも掻き消したのだ。

ゴオマに対抗出来る手段を失ってしまった映司だが、同時に彼は、刃先を折られるその瞬間、どこか奇妙な感覚におそわれた。言葉にするならば、互いに『引き合う』とでも言うべき不可思議なもの。

これは一体何なのか。気のせいや勘違いでないのなら、これには何か意味があるはずだ。映司は刃先の折れた剣を見つつ思案する。

あのコウモリは仮面ライダーのメダルを一枚飲み込んでいる。奴が飲み込んだあのメダルと、剣に変わったこのメダルが引き合ってるって言うのか？

だったら何の為に。仲間同士だから？ コウモリから離れたがっているからか？ それとも……『俺に』何かを伝えようとしていたのか？

反響は奴の”喉笛”から響いて来た筈だ。それで俺に伝えたいことがあるとすれば……。もしまし！

この不可思議な現象に隠れた意味を見出だした映司は、何を閃いたのか、揺れる機内を壁伝いに進み、操縦席に座り、必死に操縦桿を握る里中に声をかけた。

「お忙しい中すみません。お願いがあるんです、里中さん」

「お願いですか？」珍しく、落ち着きのない声で里中が答える。「申し訳ありませんが、揺れが酷くて、機体を安定させるだけで手一杯なのですが」

「機体を安定させるのが大変なんですか？」映司が念押しするように聞き返す。「なら行けません。里中さん、俺が合図するほんの一瞬、一瞬だけで良いので、機体を大きく右側に傾けて貰えませんか？」  
「そんなこと言われても……、その状態から立て直すのは困難です

し」

「ほんの一瞬でいいんです。それで揺れは収まりますから」

「コンキヨは……有るんですか？」

「俺を信じてください、お願いします！」

一歩も退かない上に根拠はないと来た。彼らだけでなく自身の命も預かって操縦桿を握っている以上、滅多な真似は出来ないのだが、映司の必死な顔と言葉に里中もとうとう折れた。

「……分かりました。一瞬だけ、ですよ」

「ありがとうございます」言って、映司は再び壁伝いに土たちの所に戻る。

彼の目に映ったのは、纏った装甲の殆どを剥がされ、身体中に怪我を負い、虫の息で横たわるデイケイドと、そんな彼を無慈悲かつ嬉々として蹴り付けるゴオマの姿だった。

時間の余裕はあまりない。改めてそう確信した映司は、ゴオマに気取られぬように彼の背後、折れた剣の放られたあの場所へと向かい、折られた刃先を握り締めた。

「里中さん、今ですッ」

折れた刃先を握り締めて映司が叫ぶ。里中は映司の求めに応じ、今まで水平に保っていた操縦桿を思い切り右側に傾けた。

デイケイドを思い切り蹴飛ばしてやろうと、右足を大きく振りかぶっていたことが仇となり、ゴオマは揺れに足を取られて、重力に従い体をくねらせながら落下して行く。

そこに待っていたのは、鋭く尖った剣の刃先を手にした映司だ。映司はゴオマが自分の方に顔を向けたその瞬間、手にした刃先を彼の鳩尾に刺し入れる。

鳩尾を刺激されたゴオマは、そのショックで猛烈な咳に襲われ、喉笛に填まっていたキバのメダルを吐き出した。同時にメダルの力で強化されていた外見が、元の姿に戻って行く。

「土さん、後はお願ひします！」

「言われなくとも……ッ、おお、おおっ!?!」

後はこっちのものだ。映司はキバのメダルを拾い上げて距離を取り、デイケイドに止めを刺すよう促す。デイケイドは彼の求めに応じ、ふらつく体に鞭を打って立ち上がった。

しかしどうしたとか、彼が身に纏う仮面ライダーの鎧は、彼の意思と関係なく、何の前触れもなく消えてしまったのだ。

全く持って予想外の出来事に戸惑う土に対し、ゴオマはその隙を逃さなかった。変身せず棒立ちの土の頭を鷲掴みにし、ヘリが横揺れする程の衝撃を伴って壁に叩き付けたのだ。

「くそオ、やめろ、やめろよ！」映司は我慢出来ず、武器も何も持たずゴオマに掴みかかるも、赤子の手を捻るように容易く引き剥がされ、爪による一撃を喰って三度床に突っ伏した。

「ゴボゼラデソ。ゴラゲザ、ガドゼボゾギデジャス」

メダルを奪って有利になったと言っのに、それでもなお手も足も出ない現実には歯噛みする映司。

非力な自分を呪い、何も出来ないことに悔しさを募らせる中、映司は足元のモニタから、自分の名前を呼ぶ声がすることに気付く。

ゴオマがヘリを襲うまで話をしていた鴻上だ。

「火野君、火野君。無事かね」

「俺は平気ですけど……土さんが」

自身の不甲斐なさに意気消沈する映司とは裏腹に、鴻上は彼が手にした『三枚のメダル』を見て、「素晴らしい」と声を上げた。

「おわっ、一体何なんですか」

「遂に、遂に三枚のライダーメダルが揃ったんだね。ならばもう何も言うまい。さあ、私のプレゼントボックスを開けるんだ、火野君」

「ええっ！ こんな時に何を悠長な」

「さっきも言った筈だ、こんな時、だからこそだと！ さあ、開けたまえ火野君」

何を馬鹿な。こちらは死人が出るかどうかの瀬戸際なんだぞ。映司はそんな文句を喉元で引っ込め、足元に転がっていたプレゼントボックスを取り、リボンを解いて箱を開く。

映司は驚きのあまり目を見開いて息を呑む。箱の中に納められていたのは、メダルを入れる三つの窪みが付いたバツクルと、それを読み込む円形のスクヤナー。アंकともう一つの相棒、変身ベルト『オーズドライバー』だったのだ。

「驚いているね。まあ、無理もないか」息を呑んだまま声の出ない映司に鴻上が言う。「それはコアメダルを作った錬金術師、マスター・ガラが作った、オーズドライバーの『プロトタイプ』。ドイツのとある遺跡で封印されていたものを発掘し、我が財団で保管していたのだよ」

鴻上はそこまで言うと、驚き戸惑う映司に対し、大きく息を吸い込んでこう言った。

「さあ、オーズドライバーを手に取りたまえ火野君！ 世界中の人々を救いたいと願う君の欲望に、仮面ライダーのメダルは必ずや応えてくれるだろうツ、さあ！ 変身するんだツ！」

耳をつんざくような大声に、映司は漸く我に返った。改めて周囲を見回すと、身体中傷だらけの土がゴオマに成すがままにされている。力は今、自分の手の中にあるんだ。何を躊躇ためらう必要がある。映司はドライバーを腰に巻いてクウガ・ブレイド・キバの三枚をセツトし、『オースクヤナー』を握り締めた。

「仮面ライダークウガ、ブレイド、キバ……。皆さんの力、お借りします。変身！」

クウガ！ ブレイド！ キバ！

バツクルに嵌ったメダルを横一文字にスキャン。メダルの名前が発音されると同時に円形のエネルギーが現れ、映司の体に取り込まれて行く。

一瞬の光の後、彼は金色の角に赤き瞳、中世の騎士のような青色の鎧に、両足に銀色の拘束具の付いた足の、異形の戦士にその姿を変えていた。胸には赤・青・赤で縁取られたプレートが発生し、それぞれにクウガ・ブレイド・キバの紋章が浮かび上がっている。

映司の変身をモニタ越しに目にした鴻上は、惜しみない拍手を送

つて感嘆の声を上げた。

「素晴らしい、実に素晴らしいッ！ 仮面ライダーの力で変身したオーズ！ これぞまさしく、仮面ライダー・オーズ！ 新たなオーズの誕生だよ！ ハッピーバースデイ！」

うおおおおおッ！

オーズは変身と同時に駆け出して、土の息の根を止めんと腕を振り上げるゴオマを蹴り飛ばす。事態を把握出来ずにふらつくゴオマの首を鷲掴みにし、腹部を何度も殴り付け、前蹴りでへり最後部の機材搬入口に叩き付けた。

「土さん、大丈夫ですか？」土を壁にもたれ掛けさせつつオーズが言う。「後は俺に任せてください」

「お前……火野、か？」

その言葉にオーズは何も答えず、首を縦に振った。

壁に叩きつけられたゴオマが血走った目を見開き、牙を剥き出しにして立ってきた。オーズは来るなら来いと拳を握り、襲い掛かって来たゴオマを掴んで、彼を壁ごと外に放りだした。

同時に彼もへりから飛び降り、落下して行くゴオマを追う。胸のプレート『オーラングサークル』の脚部分が光り輝き、足全体に灯る。瞬間、彼の両足に付いていた銀色の拘束具が弾け飛び、その中から真っ赤なコウモリの翼が現れた。

赤き翼は風を受けて気流を掴み、オーズは水の中を泳いでいるかのように自由に空を舞う。対するゴオマも、腕の翼を展開させて風を掴んだ。熊本上空千メートルでライダーと怪人が睨み合う。

鋭い爪と牙を武器に、先んじてゴオマが飛び掛かって来た。空中での戦いにはゴオマに一日の長があり、変身したてで動きがぎこちないオーズは、相手の動きに翻弄されるばかり。

しかしオーズも手を拱こまねいているばかりではない。オーラングサークルの光が頭部に灯り、クウガの複眼が光り輝く。同時に頭部の角から強烈な雷が放たれ、ゴオマの体を撃ち抜いた。



「バセザ……バセゴセグボンバレビ……」

黒焦げになつて落下して行くゴオマを見、オーズは右腰のオースキヤナーを取り外し、バツクルに嵌った三枚のメダルを再スキヤン。『スキヤニングチャージ』の音声と共に、オーズの両腕の手首の先から剣が飛び出し、脚部から供給される深紅のエネルギーによつて更に長く伸び始めた。

そこにクウガの雷の力が加わり、自身の背丈の数倍近くまで伸びた剣を、ゴオマにかわす手立てはなかった。ゴオマは巨大な雷の剣を袈裟に一撃、逆袈裟にもう一撃喰らい、セルメダルの山と化した熊本城の天守閣に吹き飛ばされた。

「ゴンバ……ギジャザ、ギジャザ！ シュゲゲザ、ゴゼボシュゲゲザ……ゾグバスンザアア！」

必殺の一撃を受けて肉体の限界を超えたからか、ゴオマの体は『セルメダルの塊』となつて崩れ去り、天守閣の中に埋もれて行った。ゴオマの消滅を肉眼で確認したオーズは、ふらつきながらもなんとか航行を続ける輸送ヘリ操縦席の窓際に回り、額に汗して操縦桿を握る里中に外から声を掛けた。

「里中さん、後は俺が運びます。道だけ教えてもらえませんか？」

「その声……火野さんですか？ 運ぶつて、一体どういふことですか？」

「いいからいいから。後は俺に任せてくださいーい」

訳は分からないが、機体が安定しているのは確かであり、聞こえてくる声も映司のもの。そもそも自分の任務は映司にオーズドライバーを渡して、日本まで到着まで護衛することであり、輸送ヘリの操縦は業務に含まれていない。操縦を肩代わりしてくれるのなら任せるのが一番だろう。里中はオーズの提案を受け入れ、彼に通信用のバツタカンドロイドを渡してヘリの底に向かわせた。

なんとか危機を脱し、東京に向けて突き進む映司一行。

歴代仮面ライダーのメダルを用いて、再び『オーズ』への変身能力を獲得した火野映司。彼と彼を取り巻く者たちの戦いは、まだ始まったばかりに過ぎない。

「くそう……なんだっただ、さっきのは……。<sup>コイ</sup>デイケイドライブ  
ッに変身を『拒まれた』？ いや、変身するだけの『力』が、な  
なりかけているのか……？」  
そして、彼も

第五話：「蠍の置き土産と800年前の遺産と復活のオーズ」（後書き）

お待たせ致しました。” 仮面ライダー” オーズの登場です。初顔  
見せなのでコンボ（に準ずる形態）を先出しすべきかどうか悩み、  
そうでない” 亜種” を最初に持つてくることに。

今後他の亜種やコンボに準ずる形態も登場しますが、面白いコン  
ボメロディその他を思い付かなかったので、例の” 歌” や形態の名  
称等は設定しておりません。皆様各自でお好きなようにお付けくだ  
さいませ。

ズ・ゴオマ・グ

「仮面ライダークウガ」に登場したグロンギ怪人。最下層グロンギ  
で、正式なゲゲル開始前に人を殺したことで、ゲゲルへの参加資格  
を失い、以降上級集団にパシられ、虐げられ続けることとなった悲  
しいお人。

終盤、頭目であるダグバのベルトを横領して超パワーアップを遂  
げるも、ダグバの強さを見せつける噛ませ犬として処刑されてしま  
う可哀そうなお人。

出世に固執するあたり、アポロシヨッカーでも下層の怪人だった  
のでしょうか。

オーズが熊本城ごとゴオマをぶった切るといふ展開も構想してい  
たのですが、国の重要文化財をヒーローがぶっ壊すのはまずいよね、  
と言うことであまりました。

第六話：「クスクシエと腕相撲と龍のメダル」 （前書き）

オーズ・デイケイド・平成ライダー 火を噴け！ 栄光の十二人ライダー！ 前回までの三つの出来事！

一つ！ 旅を続ける火野映司の前に、ドクトルGと仮面ライダーデイケイドが現れる！

二つ！ 世界の壁を越えて、謎の怪人集団『アポロシヨッカー』が襲来。日本の殆どを手中に収めてしまう！

三つ！ 鴻上からもたらされたプロトタイプ・オーズドライバーと、クウガ・ブレイド・キバのライダーコアメダルを使って、映司は仮面ライダーオーズに変身した！

前回書き忘れていたのでここで補足。

クウガ・コア

昆虫系に属するヘッド・コア。使用者に雷の力を与え、自在に雷を発生させることができる。

ブレイド・コア

昆虫系に属するアーム・コア。変身時にはスライド式で迫り出す剣「ブレイドソード」が出現し、斬り合いが可能となる。クウガ・コアと同じく雷の力を宿しており、クウガ・コアを組み合わせることとで刃に雷を纏わせることも可能。

ブレイドソードは変身前でも使用出来るが、変身後には遠く及ばない。

キバ・コア

パワー系に属するレッグ・コア。拘束具で封印された「ブラッディ・ウイング」を解放することにより、空中を自在に飛ぶことが可能となる。

また、他のコアメダルの潜在的な力を覚醒させる効力を持つ。

## 第六話：「クスクシエと腕相撲と龍のメダル」

アポロシヨツカーからの刺客・コウモリ怪人のゴオマを倒した火野映司一行は、その後何の問題もなく東京に到着し、変わり果てた街の様相に愕然としていた。

高いビルが殆どがセルメダルの山と化し、街の人々は皆誰しも元気がなく、黒タイトの怪しい集団が肩で風を切つて歩いている。戦争映画か何かと見紛い兼ねない、嘘のような光景だが、頬をつねって痛みを感じる以上、この馬鹿みたいな惨状は現実なのだと思えざるを得ない。

映司たちはアポロシヨツカーの雑兵たちに気取られぬよう身を隠しつつ、里中の後に続いて、鴻上が捕まっているという『監獄』を目指し、先を急いでいた。

「しっかし、物騒な街だな」物陰から様子を伺いつつ、土がぼやく。「そこらかしこに戦闘員がうじゃうじゃと……。大丈夫なのかよ」「それを言うなら土さんだって」彼のぼやきに映司が言葉を返す。「さつきから少し顔色が悪いですし、俺がキバのメダルを奴から奪ったあの時だって、土さんの変身が解かれなければ、俺がオーズにならなくても勝てた筈です。そんなに具合が悪いんですか？」

土は「よく観察しているな」と目を伏せる。確かにここ数時間の土はどこか妙だ。鴻上や里中との会話でも変に苛立っていたし、変身を持続させられないでいる。

彼は誤魔化しても無駄かと溜め息をつき、後ろ手で頭を掻いて言った。

「お前らには話しておくべきかもな。察しの通り、今の俺は不調も不調、絶不調さ。あのサソリ野郎に喰らった毒のせいだろうな。休んでもイマイチ疲れが抜けねえし、変身も長く続かねえ。正直なと

ころ、一人で戦い続けるのは厳しいかもな」

やや青ざめた顔でそう語る土に対し、映司は辛そうな顔をして頂垂れる。自分を庇って、カニレーザーの攻撃を受けさえしなければ、土がこうなることはなかったというのに。

苦し気な表情で「すみません」と頭を下げる映司に対し、土は「謝るなよ」と言って彼の頭を小突いた。

「お前らを助けたからこそ、お前はオーズになれたんだし、奴らを倒す突破口が見えたんだ。後悔なんかしてねえよ」

「でも、このまま治らなかつたら……」

「そんなときはそんなときだ。それに、俺に対して申し訳ないって思うんならよ、俺があまり変身出来ない分、しっかり働いて貰うぜ。分かつたな」

「は……はいッ」

映司の顔から暗さが消え、再び明るさが戻って来た。問題は何も解決してはいないが、土が自分を恨んでいないことが分かって、少しだけ安心出来たのだろう。

その最中、二人を先導する里中の足が止まった。土と映司は「いよいよか」とバツクルを手にして身構える。しかし、彼女が示した”監獄”を目にした映司は、そんな馬鹿なと声を上げた。

「ちよつと待つてくださいいよ里中さん、ここがその監獄だって言うんですか!?!」

「間違いありません」

「いや、でも、おかしいですよ。だってここ……『クスクシエ』じやあないですか!」

多国籍料理店”クスクシエ”。かつて火野映司が住み込みで働いていた場所だ。仲間たちの多くがここに訪れ、たくさんの思い出が詰まったこの場所が、監獄なんてものにされていようとは。

里中の言葉や態度に嘘や誤魔化しはない。となれば比奈や店長の知世子はどうなってしまったのか。

まさかの事態に狼狽える映司に対し、土は彼の頬を思い切り叩き、

彼の胸ぐらを掴んで言った。

「落ち着けよ。俺たちはそいつらを助けるためにここに来たんだぜ。焦って慌てて狼狽えてちゃあ守れるものも護れねえ」

「ご安心ください火野さん」そこに里中が口を挟む。「会長からの情報によれば、泉さんも店長も無事とのこと。ここを攻め落とせば大丈夫です」

二人の言葉を聞いて、映司は漸く我に返った。痛む右頬を擦りつつ、彼らに礼をして平静を取り戻す。

「あそこが監獄になったのは理解しました。でも外から見て特に変わった所はありませんよ。」囚人”をどこに収容しているんです？」

「それも分かっています。会長たち、アポロシヨツカーに齒向かった者たちは『地下』の牢屋に捕まっています」

「地下、ですって？ あの店に地下室なんてなかった筈じゃあ」

「特別に穴を掘って作ったそうです。地下への通路は厨房の中にあるとか……」

「おい、ちよつと待てよ」あまりに詳しすぎる情報に、土が待ったと声を上げた。「いくらなんでも情報が筒抜け過ぎるぞ。俺たちを捕らえる為の罠なんじゃねえのか、そいつは」

「その心配はありません」里中は即座に言葉を返す。「このことは街の間人全てが周知の事実です。それに、正面口以外の窓や裏口には特殊なセンサーが仕込まれていて、侵入しようとするれば瞬く間に発見されてしまいますからね」

「防犯対策は万全って訳か。だが一つだけ分からねえ。あそこが監獄になっていると、お前らだけならまだしも、どうして街のやつらまで知ってるんだ」

「理由は簡単です。火野さん、門矢さん。お店の看板をよよく見て下さい」

言われて、クスクシエの看板に目をやる二人。よく見ると、看板の前にホワイトボードを持ち上げた、不気味な瞳に、レスリングウエアを身に纏った小さな人形が立っている。



ホワイトボードには蛍光ペンをふんだんに使い、女性らしい可愛い丸文字で『囚人救出！ 秋の行楽アームレスリング大会会場』と描かれている。

訳が分らないと渋い顔をする二人に対し、里中は坦々とその理由を語った。

「ここには『最強の番人』と 渾名あだなされる、小細工を考える必要がない程強力な怪人が縄張りを張っているんです。

これは彼が作った所謂余興。中で待つ彼に『腕相撲』で勝利すれば、全ての人質を解放すると言う、たちの悪い余興なんです」

ここを根城にしている怪人が、悪趣味で意地の悪い奴だと言うことは理解出来た。しかし、人質の開放条件が腕相撲とは、随分子ども染みて拍子抜けしてしまう。

土は上等だと腕を捲り、クスクシエに乗り込もうと一歩踏み出すが、店から出てきた一人の男の姿を目にし、踏み出した足を引つ込めた。

「そんな……おれが、あんな“ガキ”に……。うっ、うっ……」

土たちは自分の目を疑った。男の頭だけが灰に変わり、風に舞ってさらさらと散ってしまったのだ。

「馬鹿な、一体何が！」

「オルフェノク、か……」男性の奇妙な死に方を目にし、土が目を伏せて呟く。「しかし頭だけ灰にするとは、成る程、監獄の番人を務めるだけのことはある」

「厄介ですね」男の無残な死に様に恐怖を覚えた里中が、怯えた様子で土に言う。「正面突破を避け、張り巡らされたセンサーをどうにかした方が……」

里中の策に土は無言で頷くが、映司は強張った顔で「それじゃあ駄目だ」と首を横に振った。

「クスクシエの厨房……、地下の牢屋に行くためには、どうやって店の中に入らなきゃいけない。敵が一階フロアを陣取っているとすれば、見つからないように侵入するなんて不可能だ。だったら

正面から乗り込んで敵の親玉の目を引き付け、そこから助けに言った方がよっぽど簡単です」

「しかしですね火野さん」すぐさま里中が言い返す。「貴方も見たでしょう、今の男性の死に様を。腕相撲勝負を受けて負ければ、貴方だってああなってしまうのですよ？」

「そんなことは分かっています。そもそも、里中さんこそちゃんと見たんですか？ あの人の死に様を！ あんなことが平気で出来る奴を放っておけません。俺が勝負を受けて困になります。その隙に二人は厨房から牢獄に行ってください」

「しかし……」

無鉄砲で向こう見ずな映司の考えに、里中は困惑して言葉に詰まってしまう。士はそんな彼女の肩に優しく触れて、「もういいだろう」と声をかけた。

「安全策を取るのも一手だが、それが回り道になるのなら、俺は迷わず危険な道を行くぜ。考えてみりゃあ、こんなもんだの通過点に過ぎねえんだ。最初っから尻込みしていて、この先でふんぞり返ってる総大将に勝てるもんか。安心しろよ里中。俺もあいつも仮面ライダーだ、負けやしねえさ」

二人の男の決意を込めた眼差しと熱い言葉に、里中もとうとう折れた。彼女は映司に向かって軽く頷き、長く伸びた後ろ髪を髪止めで括った。

「お二人に従います。けど、ちゃんと生きて帰って来てくださいよ」「勿論」

「誰に物言っただ、誰に。俺は、俺たちは、通りすがりの仮面ライダーだけ」

「……俺もですか？」

たのもーう！

威勢の良い掛け声と共に、出入り口のドアを開け放し、クスクシ工に入店する映司。

里中と士の二人は店の前で待機。彼が中の怪人の隙を作るのを待って、店に飛び込む算段だ。

「はああ、また挑戦者の方ですか？ 言いくいんですけれど、止めた方が……あ！」

歳不相応な程露出度の高い、派手なレースクイーン衣装を纏った女性は、映司の顔を見て声を上げた。彼女こそクスクシエの店長・白石知世子。コスプレ好きの気のいいお姉さんだ。

映司の姿を見込んだ知世子は、目に一杯の涙を溜めて彼に抱き付く。

「あああ、映司君！ 今まで何処に行ってたのよう、もう！ 帰って来てくれたのね、ねっ！？」

「ろくに連絡も出来ないですみませんでした。それより、知世子さんはここで、何を？」

「見て分かるでしょ？ 腕相撲のレフェリーよレフェリー。あたしだけ牢屋じゃなくて、ここで審判をやらされてるのよ、“あのコ”の命令だね」

「あの……コ？」

映司は知世子の指差す方向に目を向ける。店内中央、豪勢な五人掛けソファの上にふんぞり返って眠っていたのは、襟元がだらしなく垂れ下がった灰色のTEEシャツを身に纏った、映司よりもずつと若い、強い癖っ毛の少年であった。

少年は映司と知世子の声に目を覚まし、気だるそうに欠伸をして、彼らの方に顔を向けた。

「あああ、また挑戦者？ さっき一戦やったばかりで眠いんだ。後にしてくれないかな」

映司は少年の風貌に戸惑いつつも、拳を堅く握り締め、ふざけるなど声を荒げた。

「どんな奴の挑戦でも受けるんだろ。俺と勝負しろ、逃げるつもり

か？」

「逃げる気はないよ」少年は軽く首を鳴らして起き上がる。「でもさ、みんな張り合いがないんだよね。せつかく“人質を全て解放”するって条件付けてやってるんだからさ、もつと真面目にやってみなと」

起き上がってきた少年の顔を、映司はまじまじと見つめた。人を殺すことに何の躊躇いも感じさせない、何処までも暗く、薄気味の悪い目をしている。話し合いでなんとかなる相手ではない、勝つて精神的に屈服させなくては。映司は負けるものかと彼を睨み付けた。「怖いなあ、そんな顔しないでよ。腕相撲がしたいんでしょ？ いよいよ、受けてあげる。キミで丁度“五十人目”、だしね」

「五十人？ 何が五十人目なんだ」

「僕の勝ち数さ。いや、僕に倒された数、って言った方が分かり易いかな？」

少年はそう言うと、碌に歯磨きをしていないであろう、形の歪んだ永久歯と、ぼろぼろの歯茎を見せてにやりと笑った。映司はその笑いに嫌なものを感じて背筋が震えたが、ここで気圧される訳にはいかない。

映司は少年に先んじて台の上に肘を乗せ、先程よりも鋭い目付きで彼を睨んだ。

「やる気満々だね。ずいぶんと細い筋肉だけど、キミ、そんなもので僕に勝てるの？」

「御託を並べるのは勝つてからにしろ。とつとと始めるんだ」

「ははは、つまらないなあ」少年は映司を鼻で笑った。「そういう台詞を吐いた奴、君でもう二十人目だよ。他の奴らはみんな、死んじゃったけどね」

「いいから早くしろ。お前だけには絶対、負けない」

「うるさいなあ。分かった、分かった。おねーさーん、審判、おねがいねー」

少年は知世子に審判を任せると、台の上に肘を乗せ、映司の右手

を強く握り締めた。子どもものとは思えない程の力が、彼の掌に重く押し掛かる。

「ルールの説明をするわよ。そのままがっちり握って引つ張り合いい、台に自分の手の甲が付いた方が負け。肘を浮かせたり、台の外に出したら反則負けになるから気をつけて」

「分かってるよそんなこと。早く吹いてよ、ホイッスル」

「俺も問題ありません。合図をお願いします」

知世子は苦しそうな顔をする映司に不安を覚えるも、少年に促されて試合開始のホイッスルを吹き鳴らした。

その華奢な体からは想像もつかないが、少年の力は圧倒的だ。映司の手は瞬く間に台の方へと押し込まれて行く。

「ぐっ、ぐっ……」

「だから言ったじゃない。そんな細い筋肉で、僕に勝てると、本気で思ってたの？ もういいや、さっさと勝負、決めさせてもらうね」

少年は止めだと言わんばかりに右腕に力を込める。映司の手の甲が台に付くまで、もう三センチもない。少年が勝ち誇った顔で笑い、知世子がもう駄目だと目を伏せたその時、その場にいた誰もが予想しえない、不思議なことが起こった。

「な……なにッ」

「う、うそ。どうしたのよ……一体！」

彼らが驚くのも無理はない。少年は映司を追い詰めていた筈だった。事実映司はぎりぎりまで追い詰められていた。しかし今はどうだ。逞しく膨れ上がった映司の右腕は瞬く間に少年を押し返し、逆に台ぎりぎりまで追い詰めているではないか。

「言ったはずだぞ」目を血走らせ、額から血管が浮き出るほど踏ん張りつつ映司が叫ぶ。「お前だけには、絶対負けないって！」

映司のズボンのポケット、その中に収まった『キバ』のメダルが、彼の感情に呼応するかのようには熱を発して輝いている。『キバ』の“使用者の力を解放させる”能力が、映司の体の中のリミッターを外し、常人以上の力を彼に与えているのだろう。

少年は訳が分からなくなった。追い詰めていたのは自分のはずなのに、気が付けば追い詰められる側になっている。こんな馬鹿な話があるか。人間如きに負けてなるものか。少年は薄ら寒い笑みを見せ、肘から腕へ、腕から手へと灰色の不気味なオーラを生じさせた。灰色のオーラは少年の腕を通り抜け、映司の腕へと取り憑いた。映司の右腕が徐々に灰色に染まって行く。あの男が殺された時と同じだ。彼の腕を灰に変えようと言う算段か。

映司は自身の手に起こる異変に気付いたが、今更どうすることも出来ない。オーラは映司の右腕の肘まで浸食し、彼の腕を灰へと変える、筈だった。

映司の右腕は灰色のまま、今尚形を保っている。どういいうわけか、オーラと腕との間に何か挟まって、浸食出来ないでいるのだ。少年は何故なのかと彼の腕をじっと見つめる。少年は自身が発したオーラと腕との間に、火花を散らして巻き付く“雷”が生じているのに気が付いた。

気付いた時には最早遅し。映司の腕から生じた雷は灰色のオーラを掻き消した上で、手を組み合う少年の体に伝わり、彼の体を数万ボルトの電流が襲った。

電流を受けて、少年の腕に掛かる力が緩んだ。映司はこれを勝機と見て、頭の血管がはち切れんばかりの力を込める。少年の手の甲は台の上に激突し、それでも勢いを殺し切れず、台をも砕いて床に叩き付けられた。

「どうだ、勝ったぞ！ さあ、捕まえた人たちを解放するんだ！」  
右肩を脱臼し、目に涙を溜めて歯を食い縛る少年を見下ろし、捕まえた人々を解放するよう要求する映司。少年は外れた肩を自力で入れ直すと、大粒の涙を流して、鼻声で思い切り叫んだ。

「ふざけるな！ ふざけるなよ、痛かった……、とつても痛かったんだぞ！ ふざけるなよ！ お前なんか……、死んじまえ！」

瞬間、少年の体は“龍”を模した怪物へと変貌し、両手の重く巨

大な爪で映司に襲い掛かる。

映司は側転で攻撃をかわすと、上着のポケットからバックルとメダルを取り出して、素早く腰に巻き付ける。

「やっぱりそう来るか。だったらもう、容赦しないぞ！」

変身！

クウガ！ ブレイド！ キバ！

同時に映司もオーズに変身。入口の前で身を潜めていた士たちに「お願いします」と叫んだ。

彼の叫びに応じて、土と里中がドアを蹴破ってクスクシエに突入。彼らの侵入を察知した少年は、士たちを狙って襲い来るが、オーズに取り付かれて動きを止められた。

「お前の相手は俺だろ。あの二人を追いたかったら、俺を倒してからにするんだな」

「そうかい、そうかいそうかい。そこまで僕と決着を付けたいか。いいよ、やってやろうじゃないか。“消し炭”になっちまいなッ」

少年 龍のオルフェノクはオーズに対抗すべく、『赤き龍』のメダルを飲み込んだ。

瞬間、彼の周囲で炎が舞い、オルフェノクの体に吸い込まれて行く。

炎を全てを体内に取り込んだ龍のオルフェノクは、銀色の外装に身を包んだ、四足歩行の怪物へと姿を変えていた。

第六話：「クスクシエと腕相撲と龍のメダル」 （後書き）

バトルの合間の小休止として書いた筈なのに、前回よりも文面が長くなってた件。雀の涙ほどですけれども。

執筆中にオーズ本編を見返してみました。映司ってそれほど不測の事態に動揺しませんね。これだと平和ボケしてしまったからか、大分焦ってたりするのですが。

例えば、前回のサブタイトルの『蠍の置き土産』はこちらで使うべきだったんじゃないかと今更思いました。もうどうにもなりません。



第七話：「再会と脱出と火を噴く赤のコンボ」（前書き）

カウント・ザ・メダルズ！ 現在、オーズの使えるメダルは

ヘッド：クウガ・コア

アーム：ブレイド・コア

レッグ：キバ・コア

第七話：「再会と脱出と火を噴く赤のコンボ」

オーズの協力を得てクスクシエの地下に潜入した土と里中は、形ばかりの門番である黒タイツたちを片付け、牢獄の前へ辿り着いた。土をくり貫いて鉄格子を差し込んだだけの粗末な牢だが、小さな箱に押し込められた電気ウナギカンドロイドが、格子に四六時中電流を放出し続けており、無理に出ようものなら焼け焦げてしまう。

二人は数多く作られた檻のなかから、硝子張りにされた独房を探し出し、中で窮屈そうにしている鴻上に声をかけた。

「よお、オツサン。助けに来てやったぜ。バイト代弾めよな」

「会長、御無事ですか」

「おお、門矢君に里中君！ よく来てくれたねえ」

「よおし、そこを動くなよ」

土は近づく鴻上を御しつつ、懐からライドブッカーを取り出し、ガンモードにして構え、箱の中を這いずり回るウナギたちを撃ち抜いた。ウナギたちは一瞬で鉄屑へと変わり、硝子張りの牢獄を流れる電流はあつという間に掻き消えた。

「ま、ざつとこんなもんだ。もう出てきていいぜ」

「いやあ、助かったよ門矢君。その調子で私の部下たちも助けてはくれないかね」

「分かったよ、そう焦るなつての」

鴻上に請われ、土は牢屋に巢食うウナギを次々に撃ち抜いて行く。捕まっていた人々は皆開放され、歓喜の大声を上げた。

「にしても、とんでもねえ数だな」土は捕虜の多さに溜め息を一つつく。「これ全部、アンタの部下か？」

「私の部下が殆どだが、自衛隊や在日米軍、民間でアポロショック

「に反抗し、投獄されたものもいる。理由は皆それぞれだがね」

「そうかい。しっかし、狭い場所で密集されると暑くてしょうがねえな。今外に出たって捕まるだけだぞ。お前ら、もう少し牢屋の中で待ってる！ 散った、散った！」

息苦しくて敵わないと、牢屋から出た人々を再び押し込める土。その殆どが大人しく戻って行ったのだが、一人だけ土の前に立ったままの女性がいた。彼女はさすがのような目で土を見つめて言った。

「あの……門矢士さん、ですよ？ そうなんですよ？！」

「何だよ騒々しい。いかにも俺が門矢士だが、それが何か？」

目の前の男が門矢士だと知った女性は、「あなたを探していたんです」と言つて、彼の手を握つた。

「私、泉比奈つて言います。ある方からあなた宛に預かっているものがあるんです。受け取ってください」

比奈は有無を言わず、土の手のひらに『それ』を掴ませる。何なんだとそれを見た瞬間、土の目の色が一気に変わり、彼女の肩を掴み激しく振つた。

「お前……この“メダル”、一体どこで手に入れたんだ！ 答える、答えるんだ」

「おお、落ち着いてください」比奈はその手を払いつつ答える。「一緒に独房に入れられていた人から託されたんです。『いつか君の前に”門矢士”という男が現れる。そのメダルの使い道が分かるのは彼だけだ。助かりたいければ、間違いなく彼に渡してくれたまえ』」

「たまえ、つて……」独特の言い回しに覚えがあつたのか、土はふんと鼻を鳴らし、歯を見せてニヤリと笑つた。「そうか、あいつも無事だつたんだな。それで、野郎はどこに行ったんだ？ ここにはいないようだが……」

「分かりません」比奈は目を伏せて首を横に振る。「何だかよく分からない光の壁の中に消えてしまつて……」

「光の壁、ね。まったく、いつも唐突な奴だよ、ホントに……」

「あの。お知り合いですか？ その人と」

「そんなことはどうでもいい。何はともあれ、助かったぜ泉比奈。一緒に来い、上で火野映司が戦っている」

「映司くんが!?」比奈は驚いて声を上げた。「ここにいる……と  
いうか、戦っているんですか？ あの怪人と」

「仮面ライダー」オーズとしてな。再会がてら助けに行つてやる  
うぜ。来いよ」

「……は、はい！」

比奈は土の差し出した手を強く握り返す。手を差し出した当人は、  
彼女の馬鹿力に手を痛め悲鳴を上げたのだが、それはまた別のお話

「仮面ライダーのくせに弱いなあ、お兄さん。ああ、そうか。僕が  
強すぎるだけかあ。こりゃあ失礼」

「く……そオ……」

仮面ライダーオーズと龍のオルフェノクとなった少年との死闘は、  
クスクシエを半壊させた上で戦いの場を近くの道路上に移していた。  
”龍騎”のメダルを取り込み、四つ足の怪物となった少年の力は  
凄まじく、丸太のように太い四肢から繰り出される一撃は、腕を十  
字に組んで踏ん張っても御し切れず、堅牢な白銀の鎧でより強固と  
なった外装に、オーズは傷一つ付けられず、アスファルトの上にな  
つ伏せになっていた。

「これ以上苛めるのも可哀想だし、とつとと止め、刺しちゃおうか  
な」

オルフェノクの口元にエネルギーが集まり、火球の形を成してい  
く。オーズは感付いてかわそうとするが、今から体を起こしてい  
はとても間に合わない。

そう判断したオーズは、両腕のトレイ型の手甲から、備え付けら  
れているトランプのカードを扇状に広げ、盾として展開。両腕を顔

の前で組んで向かい来る火球弾を受け止めた。

「避けられないなら……、受け切るまでッ」

「小癩な、でも……どこまで耐えられる……かな!？」

オルフェノクの放った火球弾は、カードの盾に防がれはしたものの、その勢いまで殺すことは出来ず、オーズは着弾の瞬間よろけて体を反らせてしまった。

効き目があるのなら使わない手はない。龍のオルフェノクは防がれた事など意に介さず、次々と火球弾を放って行く。オーズの体力が消耗し、防ぐことすら出来なくなるのを待っているのだ。

対するオーズは、彼がそう考えているだろうと見越し、弾かれてよろけるのを承知の上で、腕を顔の前で組み、ただただ前に進み続ける。火球弾を放っている間は、前足や尻尾などでの小細工を使ってこない。いくら堅牢な鎧を纏っていようとも、鎧に守られていない弱い部分はきつとある。楽に懐に近付かせてくれるのなら、利用しない手はない。オーズはよろけながらも一步一步、確実にオルフェノクに近付いて行った。

「くそっ、いい加減に諦めろよ！ 疲れただろう」

「たとえ疲れ果てたとしても、お前相手じゃ一歩だつて退けないね」  
疲労も恐れも省みず進み続け、遂にオルフェノクに潜り込んだオーズ。狙うは鎧で守られていない口の中。ブレイドの剣で舌を引き抜き、メダルを無理矢理抜き取ろうという算段だ。

クウガ・コアの雷の力が刃に込められ、光輝く。オーズは右腕を大きく振り被り、龍の口目掛けて剣を叩き込んだ。

「決まった！ ……と、思った？ 残念、それじゃあ僕には勝てないよ」

「な……にッ！」

オーズの一撃は、確かに奴の口内を貫いた筈だった。火球弾を撃とうにも、前足で叩こうにも近すぎて、彼には何も出来ない筈なのだ。

ならばこれはどういうことだ。オーズ渾身の一撃は、彼の両肩口から生えてきた一对の腕に阻まれて、オルフェノクの口内に届かないでいるではないか。

見立ては良かった。上手く行きさえすれば、龍騎のメダルを取り戻せていただろう。だが”力”が足りないのだ。何に阻まれようと押し通すパワーさえあれば、肩口の腕に防がれても、押し通せたことだろうに。

攻撃が通用せず戸惑うオーズに、龍のオルフェノクは剣を掴んだままで一歩距離を取り、残った前足で彼の体を思い切り蹴り付けた。あまりの力にオーズの変身は解け、散らしたメダルのうち一つ、腕のブレイメダルがオルフェノクに奪われてしまう。

「はは、残念だったね。頼みの綱のメダルはここに一枚。仮面ライダーにすらなれないキミは、この先どうやって僕と戦うつもりなのか。よかつたら教えてくれよ」

「そんなの決まってる」映司は唇を噛み締め、二枚のメダルを握って立ち上がった。「仮面ライダーになろうとなれまいと、一歩も退かず戦うだけだ！」

メダルを失い、仮面ライダーになれない映司に策はない。人々を守るため、自分の身を犠牲にして戦うだけだ。勝ち目などまるで無いのに、それでも尚自分の前に立ちはだかる映司を見て、龍のオルフェノクは侮蔑を込めて大いに笑った。

「キミって本気で馬鹿なんだね。そんなことしたって報われるわけないのにさ」

「見返りなんて求めちゃいない。俺はただ、この世界に生きる皆が幸せでいて欲しいだけだ。それを壊す奴らは誰であろうと、どんなに強大だろうと、絶対に許さない！」

「ああ、そう」オルフェノクは映司に興味を無くし、つまらなそうな顔で彼を見た。「んじゃあさ、とつとと消えちまいなよ」

龍のオルフェノクは、これまで以上に深く息を吸い込み、火球のエネルギーを増幅させていく。変身し、盾で防いでなおよる程

の一撃を、生身の彼が喰らってしまったえば　消し炭になるのは避けられない。避けようにも疲労で足は動かず、防ごうにも身を守るものは何もない。

今まで以上に強力な火球弾が龍の口から放たれた。映司は気持ちで負けてなるものかと、目を見開いて真正面から立ち向かう。接触まで後数十センチ。今から避けても間に合う訳がない。

だが、火球弾が映司の目と鼻の先まで近づいたその時、横から放たれた一発の光弾によって火球は細かく碎け、アスファルト上に散ってしまう。オルフェノクが光弾の放たれた方向に顔を向けると、そこにはライドブツカー・ガンモードを構えて不適に佇む土と、彼に助けられてやって来た泉比奈が立っていた。

「土さん、それに……比奈ちゃん！　無事だったんだね！」

「映司くん、捕まっている人たちは皆助かりました。思う存分やりゃちやっってください！」

「ちよつと見ねえうちに、ずいぶんとやられちまって……」ふらつく映司を見て土が言った。「力が欲しいならくれてやる。真ん中をこいつに変える。一気に叩き潰してやりな」

土はそう言つて、映司に”三珠”が象られた紫のメダルを投げて寄越す。「力」、「紫のメダル」という言葉に戸惑いを覚えつつも、映司は奪われたブレイド・コアの代わりに紫のメダルをバックルに挿入し、オースキャナーを真一文字に滑らせた。

クウガ！　ヒビキ！　キバ！

バックルから流れるメロディに乗せ、映司は再びオースに変身。騎士の鎧と飛び出す剣に代わり、盛り上がった紫色の筋肉と、背面には一対の撥バチが備え付けられた。

これならやれると確信し、背中バチの撥を抜いてオルフェノクに向かうオース。龍の化物はそうはさせまいと火球弾を放つて彼を牽制するが、彼の放つた炎は撥の先に吸い込まれて行き、一発もオースに当たらない。オースが地を跳ね、オルフェノクの頭上に回った。龍の化物はやむ無く肩口の腕を十字に組んで防ぐが、火球弾を吸つて

強化された撥を防ぐことは出来ず突破され、オルフェノクの額を炎を纏った強烈な一撃が襲う。

額を割られて朦朧とする龍のオルフェノク。オーズは彼が纏う堅牢な鎧を、撥で太鼓を叩くようにリズムカルに突いて行く。炎の力が綴じられた攻撃に、龍の白銀の鎧は耐え切れず、そこらかしこに亀裂が走っていった。

オーズの猛攻に形状を維持出来なくなった鎧は、ひとりでに崩れ去って赤色のメダルを吐き出した。彼が飲み込んでいた龍騎のメダルだ、オーズは砕けた鎧の中からそれを拾い上げ、まじまじと見つめる。

「こ……のオ、よくも、よくも僕に土を付けてくれたな！　ちきしよう、ちきしよう！」

メダルを奪われて怪物から人間の姿に戻った少年は、「殺してやる」と“金色のメダル”を取り出した。一枚だけでも苦戦したというのに、これ以上使われては勝ち目がない。

「野郎ッ、まだメダルを持ってやがったか。返しやがれ！」少年がメダルを飲みこむ前に、土はライドブツカーの引き金を引き、彼の手を撃ち抜いた。少年の手から零れたメダルは道路脇へと転がって行く。

土の行動に怒り狂った少年は、我を忘れ再び龍のオルフェノクに変身。土に向かい飛び掛かるが、彼はそれを難なくかわした上で、オーズに向かいこう言った。

「今のうちだ映司、頭をそのメダルに変えろ！　ヤツにトドメを刺してやれ！」

「このメダルに、ですか？」

「そうだ。響鬼とキバ、そして龍騎のメダルが揃えば、さらに強力な力を発揮する！」

「分かりました……やってみます！」

土に言われるまでもなく、オーズにはそのことが解っていた。先程龍騎のメダルを手にした時に感じていたのだ。キバと響鬼と龍騎



のメダル。特別強い結び付きを感じる三枚のメダルを組み合わせれば、今まで以上に凄まじい力を発揮出来るだろうと。

オーズはクウガのメダルの代わりに龍騎のメダルを嵌め込み、オースキヤナーで読み込んだ。

リュウキ！ ヒビキ！ キバ！

クウガの頭に代わり、銀色の甲冑に赤い複眼の顔が現れる。同時にキバの足の拘束具が弾け飛び、キバ・メダルの力で腕部及び胸部の筋肉が膨れ上がった。

それまでばらばらだったオーラングサークルの色も真っ赤に染まり、アスファルトが溶け出す程の熱を放出し始める。数あるライダーメダルの中でパワーを最も引き出せる組み合わせ。それがこの三枚、『赤のコンボ』なのだ。

オーズが新たな姿に変わった事など意に介さず、龍のオルフェノクは彼に向かい、巨大な右腕を振り下ろす。しかしオーズはその腕を容易く受け止め、自分の胸の前まで引き寄せると、左手の付け根から鋭利な鉤爪を引き出して龍の右肩に引っ掛け、そのまま思い切り力を込めて、オルフェノクの肩から舌を引き千切った。

オルフェノクの悲鳴が街中に響き渡る中、オーズは拳を固く握り締め、全身に力を込める。オーラングサークルの上部が光輝き、龍の手を模した肩当てが展開し、独立した一对の腕となった。

オーズは傷口を押さえて震えるオルフェノクに向け、四本の手で猛烈な拳の雨を見舞う。機銃掃射のごとき勢いで放たれたそれは、倒れることすら許さず、花瓶を槌つちで叩いて割ったような音が辺りに響く。

止めの一発がオルフェノクの頬を貫いた。彼の顔はひしゃけて斜めにひん曲がり、アスファルトの上を四五度跳ねて、電柱に叩き付けられた。

「よし、決めちまえ映司」

「分かってますって」

スキャニングチャージ！

再びオースキャナーでバツクルを読み込み、メダルの力を最大限開放させるオーズ。彼の足の下に真っ赤に燃える『キバの紋章』が現れ、折れた電柱の下で突っ伏すオルフェノクに向かっていく。

紋章はオルフェノクの背面に回って、火花を散らして彼の背中を焼き、オーズの方へと撥ね飛ばす。同時に赤き龍の形に変わった龍騎の顔から、強力な火球弾が放たれる。放たれた火球は『龍騎の紋章』に形を変えると、接触したオルフェノクの体を焼き焦がして後ろに撥ね飛ばす。その先にあるのはキバの紋章だ。この哀れな少年は最早どうすることも出来ず、パンとパンの間に挟まれたチーズのように、紋章と紋章に挟まれ、全身をくまなく焼かれてしまった。

しかし、それだけでは終わらない。炎燃ゆる背中の撥を引き抜いて構えたオーズは、紋章に挟まれ満身創痍のオルフェノクに向かって駆け、彼を紋章ごと撥で思い切り叩いたのだ。

強烈な音撃を喰らったことで少年の体は内側から崩壊し、膨大なセルメダルの塊となって街中に降り注いだ。

第七話：「再会と脱出と火を噴く赤のコンボ」（後書き）

コンボに相当する形態の登場です。コンボですが、良さそうなコンボメロディと名称を思い付かないので名前は決めておりません。何でも好きなものをどうぞ。

やっぱりほぼ日更新だけで終わらせようなんて虫が良すぎたんや……。

## 第八話：「追いかけること後藤の帰還と準特急地獄行き戦車」

「アポロガイスト様、アポロガイスト様ーッ」

仮面ライダーオーズが龍のオルフェノクを倒したのと時を同じくし、都内某所のある場所では、ツタンカーメンのマスクにライオンの顔をくっ付けた不気味な怪人が、「アポロガイスト」の名を呼んで建物の中を走り回っていた。

やがて彼は窓のない暗がり、大型のマッサージチェアが置かれた部屋を見付け、そこにアポロガイストの姿を見込む。怪人は失礼しますと一声掛けて、マッサージチェアの部屋に足を踏み入れた。

「何なのだ『デッドライオン』、そんなに慌てて」アポロガイストと呼ばれた壮年の男は、マッサージの邪魔をされたのが気に入らないうらしく、明らかにうっとおしそうな顔で怪人・デッドライオンの顔を見る。

「お休み中大変申し訳ございません。しかし、早急にご報告したいことがあります」

「ふむ……」アポロガイストはチェアのモードを『揉み』から『叩き』に変えつつ言った。「宜しい、申してみよ」

「大変申し訳難いのですが……我らが同志、ドラゴンオルフェノクの小僧が、『仮面ライダー』を名乗る男たちに敗北し、多数の囚人共が脱走した、と……」

「ほお、ライダー……。デイケイドの事だな。他にそんなことが出来るライダーは残っていない」アポロガイストはマッサージの強度を二段階上げ、その心地に満足しつつ言葉を継ぐ。「して、他には？」

「他には……と、言いますと？」アポロガイストの余りに淡泊な答えに、デッドライオンは言葉に詰まり、オウム返しをしてしまう。

「馬鹿者。他に報告すべきことはあるか、と聞いているのだ。デイケイドが他に何か、我らアポロシヨッカーの不利益になることをし

たのか？」

「い、いいえ。それだけ……にございます」

「それだけ、ねえ……」

アポロガイストはマッサージチェアを回転させてデッドライオンの方を向き、何とも言えない表情で彼と向かい合う。デッドライオンは下手を打って彼の機嫌を損ねたのではないかと狼狽え、額に汗を溜めて、瞬きせずにアポロガイストの顔を見つめた。

その様子が面白かったからか、アポロガイストは満足した様子で再びチェアを壁の方に向け、彼にところでと問い掛けた。

「”ガンガンライナー”は今、どこにいるのだ？ 北の方を攻めさせていた筈だが……」

「ガンガンライナー……、ですか？ 奴なら北海道の函館に上陸し、現在札幌の街をセルメダルに変えている最中かと」

「札幌、か」アポロガイストは顎の下に指を乗せて考え、決めたぞと声を上げた。「ガンガンライナーに伝えるのだ。北海道は後回しで良い。東京に戻り、ディケイドたち邪魔者共を排除しろとな」

「ははッ。今からですと、約三十分程で東京に到着するかと」

「遅いな……」アポロガイストは不満げな声を漏らした。「二十五分で到着するよう通達するのだ。さあ、行けイデッドライオン」

「は……ははあッ！」

デッドライオンは慌てた様子で敬礼をした後、そそくさと部屋を出ていく。アポロガイストはそれを横目に見つつ、マッサージチェアの強度を一つ下げつつ、一人呟く。

「やはりこの世界にやって来たかディケイド。しかしこちらとしても都合よ。我が野望成就の為にもな……ふふ、ふはははは」

「さて、と……あった、あった」

オーズは龍のオルフェノクの死骸、大量のセルメダルの山から奪

われたブレイドメダルを探し出して変身を解き、士たちの方へと戻って行った。

「ヒヤヒヤさせやがって。ライダーの力を借りてんだ、もつとスマートに勝てないのか」

「す、すみません。かなり手強かったですし、それは……」

「まあ、勝ったんだから文句は言わねえよ。やったな、映司」

「はい、ありがとうございます！」

士の嫌味な言葉など気にも留めず、誉め言葉だけ素直に受け取って頭を下げる映司。そんな彼の元に、クスクシエの前で戦いを見守っていた泉比奈が駆け寄って来た。

「あ、比奈ちゃん。無事で良かった！ どうしてあんなところに捕まってたの」

「そんなことよりも」比奈は映司の話を遮って言った。「映司くん、いいんですか？ 確かもう一枚、道路脇に墜ちたメダルがあつたんじゃない……」

「メダルって……あつ、ああ！」

安堵してすっかり忘れていたと、驚いて呆けた顔をする映司。少年は赤い龍騎のメダルの他に、金色のメダルを使おうとしていたのだが、士によって撃ち抜かれ、道路脇に転がって行ったのだ。

映司は急いで探さなくてはと必死に辺りを見回すが、士はそんな映司に落ち着けよと声を掛ける。

「そう焦るな。落ちている場所は分かっているんだ、ゆっくり拾えば……あッ」

メダルが落ちていると思しき場所に顔を向けた士は、予想外の展開に目を見開いた。少年が落とした金色のメダルは、偶然通りかかったアポロシヨッカーの戦闘員によって拾われていたのだ。

組織の下っぱである彼らに、メダルの価値は分からない。しかし、士たちの視線に気付いたその戦闘員は、まずいと思って駆け出した。「野郎待て、待ちやがれッ！」その様子を見た士は、目を血走らせて戦闘員を追う。

「焦らなくても良かったんじゃないんですか？ 待って下さいよ土さん」映司は呆れた顔をして土の後に続いた。

「む、火野君たちはどこかな。姿が見えないようだが……」

「六枚目のメダルを追って走り去って行きましたよ、会長」

土たちが去ってから暫くし、半壊したクスクシエの中から鴻上と里中が現れた。鴻上は二人がもういないことを知ると、里中に向かい「これはまずい」と声を上げた。

「いきなり何ですか会長」唐突な叫びに驚き、里中が言った。「何か……火野さんたちに伝えていないことでも？」

「そうじゃない。そうじゃないんだよ里中君。彼らはライダーメダルを使う怪物を下し、順調にメダルを取り戻している。しかし、しかしだ里中君。幹部が一人倒され、デイケイドがこの世界に現れた事を知ったなら、必ずやアポロシヨッカーは本腰を入れてライダー掃討に乗り出すだろう。門矢君が満足に戦えず、ライダーメダルが十分に集まっていない今、

”あれ”を呼ばれでもしたら、二人に勝ち目はないのだよ」

「”あれ”……ですか」里中は不安そうな口調で言葉を返す。「しかし、あれをこんな都心で暴れさせてしまえば、彼らにとっても痛手の筈。そう簡単に呼ぶとは思えませんが」

「いいや、それでも彼ならやるだろう。彼らにとつての障害は仮面ライダーだけだ。街一つ潰したとしてもお釣りが来る」

鴻上は暫く思案を巡らせた後、「やはり」と言葉を継ぐ。

「呼び戻しておくべきか……『彼』を」

「ああ、その件に関しましてはご安心下さい」里中が言う。「帰国の折に『彼』に連絡しておきました。もうまもなくこちらに到着するかと」

「ほお、流石は里中君。その抜かりの無さ……実に素晴らしいッ！」  
「ですが会長」里中が口を挟む「今回の業務の範囲外ですので、後で特別手当をお願いします。輸送ヘリの操縦代行の分も含めて頂き

ますので、そのつもりで」

「どこまでも抜かりが無いね里中君！ 素晴らしい……実に素晴らしいッ！」

門矢士と火野映司が、金色のメダルを奪った戦闘員を追い掛けて三十分程が過ぎた。

追いかけ始めた時点では、俺が戦闘員ごときに負けるか。速攻で捕まえてやると息巻いていた士だったが、パスにフエイント、数にものを言わせた妨害に苦戦を強いられ、未だに追い付くことすら出来ないでいた。

「ちきしょう……雑魚のくせに、雑魚のくせに！ 俺がここまでコケにされるとは……。許さねえ、絶対に許さねえぞこの野郎！」

「落ち着いてください士さん。焦ってちや捕まえられるものも捕まえられませんって」

「これが落ち着いていられるか！ ああもう、これ以上我満出来ん！」

変身！！！！

KAMEN RIDER「DECADE」

KAMEN RIDER「FAIZ」

FORM RIDER「FAIZ ACCEL」

戦闘員たちのおちよりに堪えられなくなった士は、デイケイドに変身し、ファイズへのカメンライドを経て、超加速形態「ファイズ・アクセルフォーム」へと三段変身。通常の千倍の速さで地を駆け、周囲の戦闘員たちを散らして金色のメダルを掠め取った。

「はっは、どうだこの野郎。俺が本気を出しゃあこんなもんよ」

「大人げないですよ、その台詞」メダルを奪い返して高笑う士に、映司は冷静に突っ込みを入れる。

丁度その頃だっただろうか。二人の耳に、電車の警笛のような妙



な音が届く。電車のものにしては音が荒々しすぎるし、そもそもここに線路はない。

何の音だと首を傾げる二人の遙か頭上に、正面に二つの砲門を備えた、巨大な重武装『電車』が現れた。

「なッ！ なんなんだありやあ！」

「分かりません、分かりませんが……逃げましょう！」

故意かどうか定かではないが、『電車』はこちらに照準を合わせて砲弾を撃ってきた。狙いが粗いお陰で事無きを得たものの、砲弾を受けた家屋や商店などが、一瞬にしてセルメダルの山へと姿を変えている。

二人はこの電車が敵のものであると即座に認識し、とても敵わないと物陰に身を潜めた。

「土さん、何なんですかあの電車……っていうか、電車なんですかあれ！ 電車というか”戦車”ですよ、あれじゃあ」

「そんなこと、俺が知るか！ アポロシヨツカーの侵略用兵器であることは確かみたいだが……」

あれは何だと思案してみるが、妙案も対抗策も浮かびはしない。ならば行動あるのみだと結論付け、動き出そうとしたその瞬間、彼ら二人の頭上から、ビルの上部が瓦礫となって降って来た。重武装砲門付き車両の攻撃を受けて“中程”だけがセルメダル化し、支えを無くして落ちて来たのだろう。

映司はメダルをバツクルに嵌め、土はカードをドライバーに挿入するが、変身までに間に合いそうもない。ビルの瓦礫は二人の男を押し潰さんと、重力に従い無慈悲に堕ちて行く。

セル・バースト

ブレストキャノン・シユート！

しかし、そこで彼らの命の灯が消されることはなかった。何処からともなく放たれた緑の閃光が、落ち行く瓦礫を消し去ったからだ。

「あ、あれ……？ 俺たち、生きてる？」

「なんなんだ、一体……」

「火野、それに門矢士。大丈夫か？」

二人が驚き戸惑う中、空から一人の戦士が降り立った。カプセルを模した球型のパンツが全身に施され、顔にはU字の赤いライン。コアメダルの力で戦うオーズとは逆に、セルメダルの力だけで稼働する戦士、仮面ライダー『バース』だ。

涼やかでよく通ったその声に聞き覚えがあったのか、映司は驚いて声をかける。

「その声……“後藤さん”、ですよね？」

「ああ、日本の危機に居ても立ってもいられなくな。暫くの間は鴻上フアウンデーシヨンのライドベンダー隊長さ」

映司と士を救ったこの男。名を「後藤慎太郎しんたろう」と言い、かつてのグリードとの戦いでバースとして活躍した元・警察官だ。

「あ、紹介します土さん。彼は後藤さんと言つて、以前……」映司は後藤のことを土に紹介しようとするが、当人は「そんなことは後でいい」と突っぱね、土もそれに頷いた。

「俺は会長の指令でここに来た。お前たちの助けになれとな。言うことは差し詰め……」

後藤は空を見上げ、青空を自由自在に飛びまわり、砲弾を滅茶苦茶に撃ち捲る電車を指差して言った。

「あれをぶつ壊す手伝い……、つてところか」

「そうなるな」土が言う。「奴は“電王”のメダルを持つてる。俺たちが乗り込んでぶつ壊すさ」

「乗り込むつて……、土さん、あんな暴走特急に、どうやって乗り込もうつて言うんです？ 戦闘員から乗車券を奪つてこいとでも？」

映司の言うことは尤もだ。デイケイドもオーズも空は飛べるが、ああも攻撃の激しい電車にどうやって乗り込めと言うのか。映司が腕組みをして悩んでいると、後藤が彼に話しかけて来た。「そのために俺がいる。あの電車の動きと攻撃を封じればいいんだらう？ そいつは俺に任せろ、火野」

「そんな簡単に言っちゃって……出来るんですか？」

「一瞬で良ければな。異論はないか？ 門矢士」

「問題ない」士は首を縦に振った。「後は俺たちで勝手に乗り込む  
ああ、それと……足になる車、バイクが欲しいな。そいつはどうだ  
？」

「そいつも大丈夫だ。ほら」後藤はバツタ型のメカを士に手渡した。  
「通信機だ。そいつで会長と話が出来る」

後藤から手渡されたバツタのメカは、士の手に移った瞬間、鴻上  
の声でひとりでに喋り始めた。

「やあ、元気かね諸君。君たちに嬉しいお知らせだ。先程アポ  
ロシヨッカーに掛けられたロックを解除しておいた。これで君たち  
もカンドロイドと『ライドベンダー』を自由に使うことが出来る。  
戦況は未だ敵側に傾いているが、これらを駆使して頑張ってくれた  
まえ。では、失礼するよ」

鴻上は言いたいことだけ言い切ると、こちらの言葉も聞かぬまま  
通信を切ってしまう。彼のマイペースな態度に士はただただ茫然と  
していた。

「何なんだ一体。カンドロイド、つてのは分かるが……らいどべん  
だあ、つてのは何だ？」

「あ。それはですね……あれです、あれ」

映司はそう言っつて、街中に無造作に置かれた自販機を指差す。士  
にはその意味が全く分からない。

「いや……だから何なんだよ。レッドなんかを飲んで翼を授かれ  
とでも言うのか？」

「そうじゃないんです。ほら、こうして」

映司は持っていたセルメダルのうち一枚を自販機に投入し、中央  
の一番大きなボタンを押し込む。瞬間自販機は大型の二輪車に形を  
変えた。

「うおっ、自販機がバイクになりやがった！ どういう仕組みして  
んだコイツ」

「まあ、仕組は置いて……、あとは後藤さんに任せて、俺たちも動きましようよ」

気にはなるが仕方がない。仕組みのことはとりあえず放ってライドベンダーに跨り、後藤が電車を引きずり降ろし、動きを止めるのを待つ。

「ずいぶんと物騒な電車だが、駅で利用客が待ってるんだ。少し停車してもらおうか」

クレーン・アーム

ドリル・アーム

後藤はバツクルに二枚のセルメダルを挿入し、ハンドルレバーを回す。同時に右腕全体にワイヤー付きのクレーンが、その先端にドリルがセットされた。後藤は先端にドリルの付いたクレーンを電車の二両目に叩き込んだ。空に架かる線路が徐々に逸れて行くが、勢いは止まらない。仮面ライダーに十両編成の重武装列車を止めることなど、出来はしないのだろうか。

「そうさ、俺には止められない。けどな、これなら……どうだッ！」  
後藤は電車を止めようとしてアームを放ったのではない。彼が行く手を変えた先には、セルメダルの山と化したビルがそびえ立っていたのだ。電車はそれ以上進路を変えることが出来ず、メダルの山に激突して強引に『停車』した。

電車はすぐさま体勢を立て直し、再び動き出そうとするが、そうは問屋が卸さない。車輪と車輪の間にセルメダルが挟まって、エンジンが空回っているのだ。

「今のうちだ、二人とも、行けーッ」動けないでいる電車を見て後藤が言う。

「おつよ、そうさせてもらっせ」

「ありがとうございます、後藤さん！」

変身

変身！

KAMEN RIDE 「DECADE」

リュウキ！ ブレイド！ キバ！

二人は仮面ライダーに変身し、停まったままの電車に乗車券もなしに乗りこんで行った。

第八話：「追いかけること後藤の帰還と準特急地獄行き戦車」 (後書き)

戦車なのか電車なのか。『電車をけん引する戦車』という言葉の響きが気に入ってあんなものが出来ました。

書く方の負担が多くなってきたのでペースを落とした筈……だってたのですが、いつもと同じ分量書いているという不思議。

大ボスって最後の戦いまで基本的に動かないじゃないですか。と言うわけで、脇で変なことしている奴にしようとしてマツサージチエアに座らせてみたら、演者の方のイメージも相まって妙にマツチして一人で勝手に笑ってました。

## 第九話：「暴走特急戦車と自称最強の戦士と重量系メダル」

「来たぜ映司、団体さんがウジャウジャと」

「ですね。避けて通る訳にも……行かないみたいですし」

重武装電車に乗り込んだ二人のライダーを待っていたのは、二人掛けの椅子が向かい合う車両の中を埋め尽くすアポロシヨツカーの戦闘員たちだった。デイケイドはその多さに辟易し、変身を解除して溜め息を着いた。

「これって、さっきのメダルですよ。それになんて変身を……」

「この先に大ボスが控えてんだ、変身出来る時間を無駄遣いしたくねえ。こいつを使って奴らを蹴散らせ」

士はそう言うと、ポケットからさっき取り返した「アギト」のメダルを取り出し、オーズに投げて寄越した。

「構いませんけど、なんだか使い道を分かっているような口振りです。さっき奪い返したばかりだというのに」

「ああ、『だいたい』な。頼むぞ」

リュウキ！ ブレイド！ アギト！

含みのある士の言葉に疑問を覚えつつ、『キバ』のメダルの代わりに『アギト』のメダルを嵌めて、オースキヤナーを読み込ませるオーズ。彼の足がキバのものから、アギトの金色のものに変化した。「ええと……何だかよく分からないけど、行くぞ！」

襲い来る戦闘員たちに対し、拳を構えて立ち向かうオーズ。第一陣を右ストレートに左アッパー、右回し蹴りに左後ろ蹴りで蹴散らす。戦闘員たちは『イー』と掛け声を上げて何事もなかったかのように立ち上がり、再びオーズに飛び掛かってくる。

「何なんですかこいつら！ 俺の攻撃が効いてないみたいなんですけど」

「そんなこと俺が知るか！」溢れた戦闘員たちを殴りつつ、土が答える。「殴る蹴るで駄目ならメダルの力だ。ケチってねえでガンガン使え！」

「は、はは……はいっ」

オーズは土に促され、胸のオーリングサークルに力を込める。脚の部分が光輝き、オーズの右足の爪先と左足の踵から、三本角の鋭利な暗器が飛び出した。

「おおっ、何か出て来た！ よおし」

足先と踵から飛び出した暗器を武器に、襲い掛かる戦闘員たちに再び立ち向かうオーズ。金色に輝く鋭利な刃物は、戦闘員の胸を腕を首までも、容易く裂いて地に伏せさせて行く。

戦闘不能となった戦闘員の体は泡となり、一枚のセルメダルを残して消え去っていく。彼らはアポロシヨッカーに作られた『屑ヤミ』の一種だったのだ。

彼らがその事に驚いたのも束の間。騒ぎを聞き付け、前の車両に乗っていた戦闘員がこちらに移って来たのだ。二人は「まだやるのか」と、敵の数の多さに溜め息を着く。

「困ったなあ、まだあんなに居るなんて……。一人一人倒してちゃ日が暮れちゃいますよ」

「だな。面倒だ、全部焼いちまえ映司。『龍騎』のメダルだ！」

「は、はい」

土に言われ、再びオーリングサークルに力を込めるオーズ。胸に灯った赤色の光が顔まで昇ると、鎧で覆われた龍騎の口が開き、その周囲に灼熱の炎が集まり始めた。

「はああーっ……、セイヤーツ！」

集束された炎を円形に纏め、戦闘員たちに放つ。彼らは瞬く間に消し炭へと変わり、目の前の扉に大穴を開けた。

「凄いですね。ライダーメダルの力つてのは」

「当たり前だ。それよりも映司。お前も何か……感じないか？」

「”何か”……そうですね。確かに」



彼らを感じていた”何か”。それは背後の車両から伝わってくる他のライダーメダルの気配であった。恐らくこの電車のような戦車は、アポロシヨツカーの攻撃の要であり、物資を運搬する輸送列車でもあるのだろう。

「電王”のメダルだけじゃなく、他にもたくさん載せてるぜこいつは。不用心というか、俺たちを舐め切ってるというか……」

「メダルを載せてるということは、敵がそれを俺たちとの戦いに使う可能性だってあります。どうしますか？」

「んなもん決まってる。先に奪い返してこっちの力にするまでだ。後に続け映司」

”そこに山があるなら”とでも言うような勢いでオーズを先導し、後方の車両に向かわんとする士。しかしそんな彼らを阻むかのように、後部車両への入口は厚い扉で封鎖され、野太くけたたましい警笛が鳴った。”ガンガンライナー”が体勢を立て直し、街を破壊すべく再び動き出したのだ。

「くそつ、もう動きだしやがったか。後藤の奴、もつと長く留めておけなかったのか」

「最初つから一瞬、つて言ってたじゃないですか。あまり多くを求めるのは酷ですよ。それに……」

オーズは憤慨する士に対し、外を見てくださいと促す。電車を牽引する重武装戦車は再び宙を舞い、辺り構わず砲弾を街に打ち込み始めていた。メダルのことは気がかりだが、蹂躪こみつぶされる人々をこのまま放つておく訳には行かない。オーズは士をなだめすかして納得させ、操縦者がいると思しき先頭車両へと歩を進めて行った。

「……ですね」

「嫌な雰囲気は漂って居やがる。間違いないな」

一両一両が1km程もある長い車内を進み、漸く先頭車両に辿り

着いた二人。途中残りの戦闘員が何度か襲い掛かって来たものの、今の彼らの敵ではなかった。

二人してドアを蹴破り、揺れる車内に戦車の操縦士を探す。辺り一面白黒の市松模様で、異様に奥行きのある不気味な空間であった。部屋の奥にこの戦車を制御していると思しきコンピュータがあるが、肝心の操縦士は何処にも見当たらない。無人の自動操縦なのかと首を傾げる士たちの前に、市松模様の床下から一台のロボットがせり上がって来た。赤き四つの目をし、上半身には豊富な重火器を装備。下半身は重量感のあるキャタピラになっており、『戦車』と言うのに相応しい姿をしている。

「よくぞここまで来たな、仮面ライダーディケイドにオーズ。俺はアポロシヨッカー最強の戦士、怪魔ロボット・ガンガディン。この”ガンガンライナー”はアポロシヨッカー発地獄行き急行だ、貴様たちのな！」

「お前がこの電車の運転手か」ライダーカードを胸の前で構えて土が言う。「悪いが俺たちは途中下車させてもらうぜ、地獄にはこいつと一緒にてめえが行って来い」

「これ以上、街の人々や建物をセルメダルなんかにさせない！」

変身

KAMEN RIDER「DECADE」

土がディケイドに変身すると同時に、コンピュータを守るようにして立つガンガディンに向かい駆ける二人のライダー。周囲の市松模様のせいで分かりにくいのが、その距離は目算にして約二百メートル。仮面ライダーである二人にとって大した距離ではない。

あっという間に端まで辿り着き、ガンガディンを殴らんとするディケイドだったが、何の前触れもなく彼の右側から伸びた、『市松模様の壁』に跳ね飛ばされた。

「な、なんだこいつは……はっ!?」それは隣を駆けていたオーズも同じだ。彼も左側から迫り出した壁に跳ね飛ばされて宙を舞う。どうということだと困惑する二人に、ガンガディンは笑いながら言っ

た。

「貴様らライダーを相手に、何の対策もしていない訳がなかるう。この空間は俺の思いのまま、如何様にも動かすことが出来るのだよ！ 喰らえイ」

説明と同時に、ガンガディン自身の砲門から銃撃が飛ぶ。二人は飛び退き、側転でそれをかわそうとするが、迫り出す市松模様の壁に押されてそれを喰い、元の位置まで戻されてしまった。

「ちきしょう、厄介な壁だな」デイケイドはライドブツカーの刃を支えにして立ち上がる。「協力して突っ込むぞ、手伝え、映司」

「分かってます」そう言つて頷くオーズに、デイケイドは『響鬼』のメダルを投げて寄越した。

「力押しで一気に行くぞ。辛いだろぅが『赤のコンボ』で頼むぜ」

「大丈夫です。俺が道を開きますから、土さんは奴を」

「おう。背中では預けたぜ」

KAMEN RIDE 「RYU-KI」

リュウキ！ ヒビキ！ キバ！

デイケイドは『龍騎』のカメンライドカードをドライバーに装填し、オーズはアギトとブレイドのメダルの代わりに、龍騎とキバのメダルをバツクルに嵌めこむ。姿を変えて仕切り直した二人のライダーは、オーズが前衛に立つて壁の妨害を挫きつつ、後衛のデイケイドがガンガディンに向かって駆ける。

「役割分担したところで俺には届かぬわ、それ、それッ！」

だが、そう易々と通す程ガンガディンも無能ではない。自身の持ち得る重火器をデイケイドに集中させて、一斉掃射を行つて来たのだ。

「同じ手を二度も喰うかよ。こいつでどうだ！」

ATTACK RIDE 「GUARD-VENT」

デイケイドは『赤き龍の腹部』らしきものが描かれたカードをバツクルに装填。同時に彼の手にそれを模した盾が装備され、ガンガ

デインの銃撃を防ぎ切った。

オーズが迫り来る壁を破壊し、デイケイドが敵の攻撃を防いで近付く。このままではまずいと感じたガンガデインは、彼らを押し潰さんと左右の壁を迫らせた。

「こんなものツ！ 土さん、これは俺がなんとかします、行つてく  
ださい！」

しかし彼らの足は止まらない。オーズは壁と壁の間に自分の体を  
潜り込ませ、自慢の腕力で突っ張り棒代わりに留まった。

「よくやった、映司！ 後は俺に任せな」

ATTACK RIDE 「STRIKE - VENT」

オーズと壁との間をすり抜け、直接ガンガデインを攻撃できる距  
離まで迫ったデイケイドは、『ストライクベント』のカードを装填  
し、『ドラグクロー』を右手に構えて、強力な火炎弾を放った。

「ぬお……おっ！ 熱い、熱いが……こんなもの、アポロシヨツカ  
ー最強の戦士・ガンガデインには通用せんわ！」

しかし相手はライダーメダルを持ち、この戦車の操縦を任される  
ほどの実力者。火炎弾を浴び、外装こそ解かせたものの、完全に破  
壊することは出来なかった。

攻撃は不発に終わり、隙を見せたデイケイドをガンガデインの砲  
撃が襲う。彼は火炎弾の放たれた真正面に、ありつたけの爆弾や光  
線を叩き込むが、デイケイドは何の反応も示さない。今の一撃で跡  
形もなく消え去ったかと笑うガンガデインの頭上に、無双龍・ドラ  
グレッダーを引き連れたデイケイドが現れた。

「んなことは分かってるよ。だからとっておきで決めてやらあ」

FINAL ATTACK RIDE 「RYU - RYU - R  
YU - RYU - KI」

その瞬間、ガンガデインは唐突に理解する。先の火炎弾は、自分  
の目を正面に釘付けにする為の目くらましだったのだ。デイケイド  
は自分の目と攻撃を正面に集中させ、頭上から放たれるこのキック  
を決める隙を作ろうとしていたのだと。

気付いた所で時遅し。ドラグレッダーの勢いを借りて放たれた『ドラゴンライダーキック』は、ガンガデインの胸を穿ち、体内のネジ一本も残さず吹き飛ばした。

同時に迫り出す壁の動きも止まり、オーズも壁と壁のサンドイッチから漸く解放された。

「俺たちが本気を出せばこんなもんよ」疲労に息を弾ませながらデイクイドが言う。「思い知ったか鉄屑野郎」

「ずいぶんと息が上がってますよ。もう休んだ方が……」

「馬鹿言え」デイクイドがぶっきらぼうに言葉を返す。「この電車を止めてからだ。ええと、どうすりゃいいんだ」

口は悪いが、デイクイドの言うことは尤もだ。操縦者であるガンガデインが破壊された今も、ガンガンライナーは空を駆け、街の中を攻撃し続けている。彼らの戦力ではこの頑強な戦車を破壊することは難しい。となれば、内部から運転を停止させ、破壊活動を止めさせるしかない。

デイクイドが何か仕掛けはないかと、操縦席のコンピュータに触れようとしたり、まさにその時だった。彼とオーズに目に見えない不可思議な力が掛かり、抵抗する間も無く床に押し付けたのだ。

「な、何だ、何なんだッ！」

「この感じ……まさかッ」虚を突かれて驚くデイクイドと対照的に覚えがあるのか殆ど動じないオーズ。デイクイドは「これは何だ」と彼に問うた。

「はつきりとしたことは分かりません。ただ……」

「ただ？　ただ、何だ」

「戦いは多分……終わっていないな」

そうだ、その通り！

オーズが「戦いは終わっていない」と言い掛けた瞬間、コンピュータに備え付けられたスピーカーから、酷く鼻の詰まった男の音が響き渡る。何故なんだと困惑する二人の頭上に、人の手を模した八

本のアームが現れた。

アームは各々機械の部品のようなものを手にしており、積み木を組み立てるかのようによくそれらを繋ぎ合わせ、部品がなくなれば屋根の上から取り出して組み立ててを繰り返す。暫くしてそこに立っていたのは、たった今倒した筈の怪魔ロボット・ガンガディンであった。先程スピーカーから聞こえて来た声は、彼のものだったのだ。「お前、どうして！」デイケイドが声を荒げる。「今さっき倒された筈だろう！」

「さっき言っただろう、仮面ライダーデイケイド。俺は怪魔“ロボット”のガンガディン。俺は改造人間や怪物たちとは違い、頭脳さえ無事なら、外装など何度だって作り直せるのだよ！」

ガンガディンは押し潰されて動けないでいる二人のライダーを、手に備えられた光線銃で撃ち抜くと、先程以上に嫌味な高笑いをしてこう言った。

「貴様らライダーに俺は倒せない。“電王”のメダルでガンガンライナーを操縦し、“サゴーズ”のメダルで周囲の“重力”を操作する、このガンガディンにはな！」

## 第九話：「暴走特急戦車と自称最強の戦士と重量系メダル」（後書き）

ここのとこのところのライダーメダル攻勢が凄まじくて、作者ですら存在を忘れかけていた『合成コアメダル』の復活です。そろそろ話にがつつり絡んでくる予定なので、今のうちに思い出ししてもらえればな、と。

ここ数日かなり無理をしていたので、当分はやや緩やかペースでやってきます。ほぼ日更新は出来ればやる、ってな具合で。

### 最強の戦士

「仮面ライダーBLACK RX」作中に於いて、敵組織“クライシス帝国”の四大幹部が、自身の使役する怪人に対して与える称号言葉通りに解釈すれば恐ろしいことになるが、作中ではRXの強さが異常な上に（しかもかなり序盤から既に使われている）、そいつが倒された後、何事もなく次の怪人にその称号を与えるため、本当に最強なのかどうかは不明。

たまーに自分でそう名乗ることもあるが、最強の戦士と名乗らなかつた怪人の方がRXを苦しめたりするので油断ならない。

### 怪魔ロボット・ガンガディン

「RX」第四話：「光の車ライドロ」に登場した、怪魔ロボット大隊隊長・ガゼゾン配下のロボット。“改造人間”が敵の主流となっていた昭和ライダー作品としては珍しい“ロボット怪人”であり、しかもこいつは下半身が“四輪”になっているという変わり種RXと彼の常用マシン・ライドロン破壊を目的とし、街を破壊し尽くした。

怪魔ロボット、というカテゴリで言うとコイツよりも「デスガロン」や「トリプロン」の方が好きなのですが、上記で書いたとおり珍しい形状をしているのと、電車をけん引する戦車というしょうも

ないギャグを成立させるためにこいつを登板させました。撮影開始  
序盤のキャラだけあって、ぬいぐるみの出来が丁寧です。



第十話：「無重力と綱引きとあの男リターンズ」(前書き)

カウント・ザ・メダルズ！ 現在、オーズの使えるメダルは

ヘッド・コア：クウガ・コア、リュウキ・コア

アーム・コア：ブレイド・コア、ヒビキ・コア

レッグ・コア：キバ・コア、アギト・コア

## 第十話：「無重力と綱引きとあの男リターンズ」

「重量系コア……、こいつが持っていたのか、くそ……ッ！」

「不意打ちにも程があるぞためえ、ちきしょう……」

「ははは、潰れる潰れる、ペしゃんこになってしまえーッ」

重力操作能力を持つ”サイ・ゴリラ・ゾウ”の三枚の融合メダル・『サゴーズ』の力に、二人のライダーは成す術なく床に押し付けられ、再生ガンガデインの砲撃を喰って再び車両の奥まで追いやられてしまう。

「くろう……、動けない、ならッ！」

動けないが、それならそれで手の打ちようはある。オーズは『響鬼』と『龍騎』のメダルを抜いて、『剣』と『クウガ』のメダルを嵌め込んだ。

クウガ！ ブレイド！ キバ！

「これでどうだ……喰らえ！」

オーズは頭のクウガの雷の力をブレイドの剣に集め、それを床伝いに放つ。雷はガンガンライナーの中枢コンピュータを直撃し、軽く火花を散らしたが、破壊するとまでは行かなかった。

「ぐぬ……ぬ！ 下らん小細工を……。だが、その程度でやられる俺様ではないわ！」

彼の行動は悪戯にガンガデインの怒りを買うだけだった。逆上したガンガデインは市松模様の床を操作して横穴を作り、オーズを放り出さんと壁を押し。重力に押し潰され手も足も出ないオーズは、抵抗すら出来ずガンガンライナーの操縦席から叩き出されてしまった。

「うおわっ！？ く、くそお……落ちて、たまるかア」

クウガ！ ブレイド！ アギト！

オーズは叩き出された瞬間、足のメダルを『アギト』に変え、腕のブレイドソードを引き出し、足の『クロスホーンクロウ』を車両

の底に突き刺し、間一髪踏み留まった。揺れと吹き荒ぶ風に注意を払い、ゆっくりと出入口に近付いていく。

しかし、それにガンガインが気付かない筈がない。彼はオーズがまだ健在なことを知ると、電車の行き先をセルメダルの山と化したビルに変え、出入口に手を掛けたオーズを無理矢理振り落としたのだ。

「映司、映司ーッ！」デイケイドの叫びも虚しく、オーズは降り注ぐセルメダルの雨と共に落ちていく。

俺の手を掴め、火野ーッ！

そんな彼の手を掴み、欲望の雨の中から救い出した者がいた。ガンガンライナーの動きを一時的に止め、オーズたちの侵入に一役買った後藤だ。

後藤はオーズを抱きかかえて体勢を立て直すと、『クレーン・アーム』と『ドリル・アーム』を組み合わせ、ライナーの一両目に突き刺した。

「大丈夫か、火野」後藤が声を掛ける。「……まあ、お前が叩き出されるぐらいだ、かなりまずい状況なんだろうな」

「ええ。あいつ、『サゴーズ』のメダルを持っていました。部屋の中の重力と壁を操作して、操縦席に近付けなくされてしまった……」

「重力……か」後藤は顎に指を乗せ、暫しの間思案を巡らせる。「火野、それなら俺の力で何とかなるかも知れない」

「何とかって、どうするつもりなんですか。相手は重力なんですよ」「重力が相手なら、こっちは『無重力』を作ってやればいい。このワイヤーを伝って操縦席に戻れ。後は俺に任せろ。必ずなんとかする」

重力に対抗すべく、無重力を人の手で作る。オーズにはどうということなのか、如何にして作るのか全く分からなかったが、後藤の自信満々な態度と言葉を信じ、彼の体から離れ、クレーン・アームのワイヤーを握った。

「土さんの体力もそろそろ限界ですし、お願いします」

「ああ、任せろ」

オーズは後藤の言葉に頷き返すと、ワイヤーを伝って重力負荷の強い操縦席に舞い戻った。

「よお、戻ったか」床に突っ伏し、息も絶え絶えのデイケイドが言う。「どこで油売ってたんだ、ええ？ こちとら振り落とされねえよう踏ん張るので精一杯だったつてのによ」

「すみません。ならついでに、もう少しだけ踏ん張って貰えませんか？ この重力、外の後藤さんがなんとかしてくれるらしいので」

「何、あの後藤がか」信じられないと言いたげな顔でデイケイドが聞き返す。「重力をどうやって無くすつてんだよ」

「それは耐えてみてからのお楽しみですよ。もうひと踏ん張り、頑張りましょう」

「病人に無茶言っぜ。分かったよ」

後藤のことを信用しているわけではないが、一切攻め手がない今、可能性があるならそれに賭ける他無い。デイケイドは重力負荷に苦しめられながらもゆっくりと立ち上がり、ライドブッカーからカードを抜いてドライバーに差し込む。

K A M E N R I D E 「 H I - B I - K I 」

A T T A C K R I D E 「 O N G E K I B O U - R E K K A 」

彼が装填したのは『響鬼』のカード。青白い炎に包まれ、紫の鬼の姿となったデイケイドは、一對の撥を構えて市松模様の床を思い切り叩いた。

音撃の波動は床を伝って操縦席のコンピュータに届き、機能を歪みを生じさせた。

「今だ映司、やれ！」

「はい！」

クウガ！ ヒビキ！ アギト！

生じた隙を逃さず、オーズはデイケイドの声に合わせ腕に『響鬼』

のメダルを嵌め込んでスキャン。彼と同じ一対の撥を手にしたオーズは、音撃で敵の行動を狂わせつつ、不安定な重力に逆らって壁に沿い、一歩一歩確実にコンピュータの元へと進んで行く。

「おの、おの、おのね。まだ抵抗するのか、しつこいぞ！」

重力負荷をものともせず進むオーズと、弱つても尚齒向かうデイケイドに業を煮やしたガンガデインは、彼に向けて市松模様の壁を放った。

壁は、接近に気付いて顔を上げたデイケイドの左こめかみに直撃し、彼を入口まで引きずって叩き付けた。

「どうだ仮面ライダー、最早立つてはいられまい！」

「……面白エ、こつからは俺とお前の根比べだ。せいぜい楽しもうぜ、なあ！」

「アポロシヨッカー最強の戦士をここまで愚弄するとは……、貴様だけは絶対に許せん！」

デイケイドの一言で完全に逆上したガンガデインは、彼のこめかみだけを狙って壁を伸ばして叩き付ける。普通なら卒倒しかねない一撃を何度喰いながらも、デイケイドは床を叩くことを止めなかった。

そうこうしているうちにオーズが操縦席の目と鼻の先まで近付いてきた。撥がコンピュータに触れんとしたまさにその時。ガンガデインは重力ではなく床を操作して坂を作り、彼の行く手を遮った。

只でさえ無理をして前に進んでいたオーズに傾斜の付いた坂を越せる訳もなく、重力に従って入口まで転げ落ちてしまう。

「くそお、後少しだったのに……！」

「そう簡単に通す訳が無いだろう。ぶつ潰れる、ライダー共オ！」  
ライダーたちが入口に戻されたのを見、ガンガデインは今まで以上に密度の高い壁を放って、二人を再び押し潰す。高密度の壁に押され、二人の骨が音を立てて軋み始めた。

「まだまだ……まだ、やれる！」

辛うじて壁から右腕だけ脱け出したオーズは、両足をつっ張り棒

代わりにして押し留め、メダルを取り出して手に取る。しかし、オーズが『剣』のメダルを手にした瞬間、電車は方向転換の為に大きく揺れ、彼の持っていたメダルを弾き飛ばしてしまった。

オーズの手を離れ、床の上を転がる剣のメダルは、密度の高い壁を作るために生じた隙間に入り込み、そのまま街の中に落下してしまう。

「そんな……、メダルが、メダルがッ」

「ふはははは、残念だったなオーズ！ 最早何をしても無駄だ！ 潰れてしまえーッ！」

二人を確実に仕留めるべく、今以上に壁に圧を掛けるガンガディン。足を突っ張り棒にしても耐え切れなくなり、彼らに絶体絶命の危機が迫る。

無重力を作ると豪語していた後藤は、一体外で何をしているのだろうか。

「くそ、くそお！ 駄目なのか、一人だけでは、駄目……なのかッ」  
オーズとデイケイドが壁に押し潰されて窮地に立たされているのと時を同じくし、仮面ライダーバース 後藤慎太郎は、クレーン・アームで電車の引き上げるべく尽力していた。一旦空まで持ち上げた上で地表に向けて全力で加速し、人工的に無重力を作ろうと言うのだ。

しかし方向を反らすならまだしも、車両の一つ一つが1km近くある、十両編成の電車を持ち上げるのに、後藤一人では無理があり過ぎた。『セル・バースト』で『カッター・ウイング』の推進力を全開まで高めても、上まで押し上げるのは無理があった。

悪いことはもう一つある。推進力強化に注ぎ込んで来たセルメダルが底を尽いてしまったのだ。中の様子は一両目の隙間から見て取れる。今からセルを補給している時間はない。

カッター・ウイングの推力が落ち、バースの高度が徐々に下がって行く。セルを消費し尽くし、電車を引っ張るだけの力がなくなってしまったのだ。

どうにかする、と言っておきながらこれは何だ。後藤は自身の不甲斐なさに歯噛みして頭を垂れるが、同時に彼は、電車がまだ“下がりきっていない”ことに気付く。どういうことだと辺りを見回す彼の目に、大型のメダルタンクを背負い、自分と異なる“目に緑色のライン”の入ったバースが映った。

「おいおい、何弱気になっちゃってんの後藤ちゃん。らしくないぜ」向かいで後藤と同じく電車を引くバースが話しかけて来た。その勇ましく、どこか軽い声に聴きおぼえがあったのか、後藤は目を見開いて声を上げた。

「その声……伊達さんですか？ どうしてここに！」

「ぴんぽん。帰ってきた伊達明<sup>だてあきひ</sup>、リターンズ、ってところか」

『伊達明』。仮面ライダーバースの初代装着者にして、後藤にとつては師のような男だ。嘗ての戦いの後、医療チームに戻って世界を回っていた筈の彼が、何故こんな所にいるのか。伊達はふふんと鼻を鳴らしてその問いに答える。

「いやね、会長からまた“お仕事”を頼まれちゃってさあ。まあ、日本だつてこんな状態になつてるんだし、ほつとけないでしょ」

「お仕事……って」後藤は彼の変わらなさに苦笑した。「それよりその機体、バースの『プロトタイプ』ですよ。何故ドリル・アームとカッター・ウイングを装備しているんです」

「古いねえ後藤ちゃん、古い古い」伊達は人差し指を振って答える。「ずうっとプロトタイプのままにしておく訳ないでしょうよ。今のこいつは“伊達明・専用機”。武器は全部使えるし、出力は通常の三倍だぜ三倍」

自分たちがいなくなった間に、そんなことまでしていたのか。後藤は鴻上の準備の良さに驚くが、今自分がすべきことを思い出し、伊達に指示を飛ばす。

「説明は後でします。こいつをなるべく高く空まで引いて、その上で勢い良く急降下してください。……出来ますか？」

「誰に物言ってるの後藤ちゃん」伊達は自信ありげに鼻を鳴らした。「そんなじゃ、頼むぜ。ゴリラちゃん」

伊達の声に従い、メダルタンクの中から『ゴリラ』のカンドロイドが飛び出した。カンドロイドは素早く回転する腕でタンク内のメダルを投てきし、後藤の持つボックスをセルメダルで満たして行く。「伊達さん、ありがとうございます」

「説明もお礼も後、後。さっ、とつととやっちまおうぜ」  
「はい！」

後藤は再びセルメダルをバーストライバーに補給し、ウイングの推力を高めて上昇する。

二人のバースの力が加わったからか、電車は徐々にレールから浮き上がり、空に向かって昇って行く。

「おう、おお……！ベルトが熱いぜ後藤ちゃん！ これヤバいんじゃないのぉ！？」

「我慢してください伊達さん、辛いのは火野たちだっで一緒なんですから！」

「ああ、もう。そう言われると弱音吐きにくくなるじゃないの、しやあねえなあ！」

口ではそう言うが、彼の仕事は確かなものだ。本人曰く“通常の三倍の出力”は伊達ではなく、後藤一人では角度を変えるのが一杯だった車体が、ぐんぐんと上がって行く。

「よおし、昇って来たぜえ後藤ちゃん。そろそろ落とすか？」

「待ってください、後少し、もう少し高くまで……」

誰だ貴様ら！ この戦車を何処に連れて行くこととしている！？

もう良いだろうと言う伊達に対し、後藤は出来る限り高く昇ると答えるが、自分の意志とは関係のない不自然な上昇にガンガディンが気付いたらしく、彼らにライナーの砲口が向いた。あれを受けて



しまえば、いくらバースと言えどひとたまりもない。後藤は後のことをオーズ達に任せる決意を固めた。

「伊達さん、今ですッ」

「おうッ、待つてたげえ、その言葉！」

後藤の掛け声に合わせ、車体に突き刺したドリルを引き抜き、クレーンを巻き取る。レールを離れ、雲の上にまで行き掛けていた電車は推進力を無くし、地球の重力に従って真つ逆さまに落ちて行った。

「なな、な！ これはどうしたことだ！？ 何故だ、何故重力がはたらかない!？」

電車が自由落下を始めたことで、車内の物体は重力のくびきから解放され、無重力状態に突入する。“この場の重力を操作する”ガングダインの能力は無力化され、同時にオーズたちを押し潰さんとしていた高密度の壁が、ゆっくりと操縦席の方へと戻って行く。

「これは……後藤の奴が、やったのか？」

「ですね。さあ、土さん、早く！」

「お、おお……やってやる！」

二人は纏わり付く壁を蹴り飛ばすと、デイケイドは『ファイナルアタックライド』のカードをドライバーに装填しつつ、思い切りしやがんで力を溜め、オーズは彼の腰を両手で掴んで勢いを付ける。

「行くぞ映司！」

「お願いします！ 行きますよ！」

FINAL ATTACK RIDE 「De - De - De -  
DECADE」

オーズはデイケイドが床を跳ねて飛ぶ瞬間に合わせ、彼を操縦席のコンピュータまで投げ付ける。

投げられて勢い付き、数枚のカードを潜り抜けたデイケイドは、

行く手を阻む壁ごと操縦席のコンピュータを蹴り砕いた。

「よおし、よしよし、よっし！ 取ったぜ灰色のと……『電王』のメダルだ！」

体力の限界を迎え、自身の意思と関係なく変身を解除してしまうが、中に埋まっていたメダルは奪い返した。ガンガディンが重力を操るのに使っていたサゴーズのメダルと、この電車を構成するのに用いていた「電王」のメダルだ。

「やりましたね土さん、さあ、急いでここを出しましょう」

「出ろつてお前、この電車の中にあ他のライダーメダルが積みまわてるんだぞ、探さないでどうするんだ！」

「周りを見てくださいよ、早くここから脱け出さなきゃ、二人共ペしゃんこですつて！」

二人が話している間にも、電車の落下速度はぐんぐんと早まっている。メダルは惜しいが、命には代えられない。土は今デイケイドに変身出来ないのだ。オーズは弾みを付けて操縦席に跳ぶと、嫌がる土を羽交い締めにした。

「ほらっ、早く行きますよ。暴れないでください」

「何をする、離せ映司、離せーッ！」

「命あつての物種でしょう、落ち着いて！」

「おい馬鹿やめろ、変な所触るなって、あ、ああっ！」

だが、それがいけなかった。暴れる土を無理矢理抑え付けようとした結果、土は手にしていたメダルのうち一枚を車両の下に落とすってしまったのだ。

「馬鹿野郎、何やってんだよ！ 拾え、拾えよ阿呆」

「もう無理ですつて。逃げましょう、さあ、早く！」

クウガ！ ヒビキ！ キバ！

オーズは土に頭突きを喰らわせて気を失わせると、『アギト』のメダルを『キバ』に変え、市松模様の壁を突き破って飛び去った。

あ、アポロシヨッカーに栄光お……おああ、ああ！

落下したガンガンライナーが地表に激突する。十両編成の輸送車両は粉々に砕け、貨物として積まれていたライダーメダルを巻き込んで、街にセルメダルの雨を降らせた。

「アポロガイスト様、アポロガイスト様ーッ」

オーズたちがガンガンライナーを撃破したのと時を同じくし、都内某所のある場所では、ツタンカーメンのマスクにライオンの顔を付けた不気味な怪人が『アポロガイスト』の名を呼んで建物の中を走り回っていた。

彼は『大浴場』と書かれた看板の掛かった部屋にアポロガイストの気配を感じ、失礼しますと一声掛けて、浴場に足を踏み入れた。

「何なのだデッドライオン」アポロガイストは白い小魚がたつぷりと浮いた浴槽の中から出ることなく、彼の方へと向き直る。「入浴の邪魔をする程の事か」

「はっ、大変申し上げ難いのですが……」デッドライオンは一拍置いて答える「ガンガンライナーが……、デイケイドたちに撃墜されました」

「何だと!？」アポロガイストは驚きのあまり、小魚たちを派手に散らして浴槽から上がった。「馬鹿な、デイケイドの奴が、あれを墮としたと言うのか、あれはライダー一人に破壊出来るような代物ではない。一体どういうことなのだ」

「恐れながら申し上げます、アポロガイスト様」デッドライオンが遠慮がちな態度で言う。「ライナー撃墜に参加したのはデイケイドだけではありません。奴にしぶとくもまだ生き残っていた“バース”とか言う鉄屑二機、それに『オーズ』だとか言う名前の、得体の知れないライダーが一人……。ああ、しかし、ご安心くださいませ！ 残りの幹部が、許しさえ頂ければこのデッドライオンめが、奴

らを抹殺致しますゆえ」

アポロガイストは浴槽の中を泳ぐ白い小魚たちが、熱さで湯で上がる程の怒りを露わにし、片膝を立てて座るデッドライオンに風呂桶を投げ付けた。

「オーズ、オーズだと!? 何故“奴”がこの世界に居ると私に伝えなかったのだ、デッドライオン!」

「もも、申し訳ございません。デイケイドの協力者がオーズなるライダーだと知ったのは、つい先ほどのことでしたので……」

「ええい、言い訳なぞ聞きたくないわ。となれば、奴らの元にライダーメダルを残しておくのは危険だな。ガンガンライナーを墮とす程となれば、かなり多くのメダルを所有しているに違いない……」

顔に焦りの色を浮かべ、一人でぶつぶつと思案するアポロガイスト。デッドライオンは全裸のアポロガイストにバスタオルを手渡しつつ、「どうなさるおつもりですか」と彼に問う。

「そんなもの決まっておるわ」バスタオルを受け取って腰に巻きつつ、アポロガイストが答える。「奴らのメダルを総取りするのだ。

これ以上奴らの好きにさせておく訳にはいかん。所でデッドライオン。ガンガンライナーには『電王』のメダル以外にも、“二枚”のメダルを積んでいた……筈だな?」

「は、ははッ。アポロガイスト様に献上すべく、光のオーロラを超えて……」

「そうか、なら良い。それがこのたびの撃墜で街の何処かに散った……と」

アポロガイストはそう言って、不機嫌そうな顔をしてデッドライオンの方を見る。彼はまた叱りを喰うのではと身構えるが、彼の思惑は外れ、アポロガイストはいきなり大声で笑い始めた。

「面白い、実に面白いぞデッドライオン。作戦は決まった、奴らを罠に嵌めるのだ。その上で奴らの協力者と、ライダーを信じる奴らに“現実”を見せつけてやるのだ。さあ行けイデッドライオン。“あのメダル”を使うことを許可する。デイケイドと仮面ライダーオ

「ズを完膚なきまでに叩きのめすのだ！」

「はっ、ははア！」

デッドライオンはそう言うと、風呂桶をアポロガイストに手渡し、足早に浴場を去って行く。アポロガイストは腰に巻いたタオルをタオル掛けに戻して、再び湯の中に体を埋めた。

「予想外だった……が、“計画”の成就の為にはむしる良かったかも知れぬ。せいぜい今のうちに勝利の美酒に酔っているがいい、仮面ライダー共。最後に笑うのはこの私、アポロガイストだと言うことを思い知らせてやるのだ」

アポロガイストは手にした“緑と黒の”メダルを握り締めて、浴場の外にも聞こえそうな声で笑った。

第十話：「無重力と綱引きとあの男リターンズ」（後書き）

電車をけん引する戦車戦完結です。本当は二話分くらいで完結させたかったのですが、少しゆったりやって行きたかったので三回に分けました。ってか途中で遅延しちゃってすみません。

伊達さん登場です。現時点で一番書きにくいキャラクタはぶつちぎりで映司なのですが、伊達さんは伊達さんで、どこまで砕けたキヤラクタにしているのか悩んで迷って書いてます。若者ではないし、かといってオッサンオッサンしているわけでもないし。

本当は途中で“泉信吾”が装着した量産型バースが登場する予定だったのですが、色々な都合でカットしました。彼は途中で出せるのか否か。

順調に行けば今回か次回で全体の半分まで行くんじゃないかな…と。

第十一話：「反撃の狼煙とメダル搜索とアポロの畏」 (前書き)

オーズ・デイケイド・平成ライダー 火を噴け！ 栄光の十二人ライダー！ 前回までの三つの出来事！

一つ！ アポロシヨツカーの幹部怪人・ドラゴンオルフェノクから『龍騎』のメダルを奪い、比奈から『響鬼』のメダルを受け取ったオーズは、『赤のコンボ』に変身し、ドラゴンオルフェノクを撃破！

二つ！ アポロガイストはそんな彼らを始末すべく、巨大な戦車兼電車・『ガンガンライナー』をオーズたちに差し向ける！

三つ！ 後藤と伊達の協力を得たオーズとデイケイドはガンガンライナーを破壊し、“サゴーズ”のメダルを奪い返した！

## 第十一話：「反撃の狼煙とメダル搜索とアポロの罠」

仮面ライダーたちがアポロシヨツカーの輸送列車・ガンガンライナーを破壊してから数時間後。体勢を立て直しの為クスクシエに戻った映司たちは、次の戦いに備えて休息を取りつつ、敵から奪取した『サゴーズ』のメダルの力を確かめていた。

「うわ……あぁッ！ また駄目、かぁ……」

ライダーメダルと共にドライバーに嵌め込んで読み込ませてみるが、スキャンしようとするのとひとりでにドライバーから飛び出して変身に使うことは出来なかった。

「映司くん、大丈夫ですか！？」比奈が不安気な顔で言う。「敵がいつ攻めて来るか分からないんですし、今くらいゆっくり休まなくちゃ」

「ありがとう。でも、じつとしていられないんだ。もう一回、別の組み合わせを……」

「もういい。やめたまえ火野君」手を大仰に叩いて鴻上が言う。「形は変わっても、コアメダル三枚分であることに変わりはない。無理に使役すればドライバー自体が使い物にならなくなってしまっぞ」

「鴻上さん。ですけど……」

「はやる気持ちは分かる。先の戦いでメダルを奪取出来ず、その上一枚落としてしまったのだからね。しかし、君も門矢君も連戦で疲れている。こんな状態で敵と交戦でもしたら、一枚どころか根こそぎ奪われるかもしれないよ。悪いことは言わない、休息を取りたまえ、火野君」

「……はい」

映司は彼の言葉に頷くと、ドライバーを机に置いて腰を下ろす。



優雅にティータイムを楽しむ、黒スーツに眼鏡をかけた人形が、嘲笑うような目付きで、棚の上から映司を見ていた。

「やっぱり、使えるのはライダーメダルだけ、か」

映司はドライバーからメダルを外し、ポケットの中に入れたものを合わせて手のひらの上に集めた。

クウガ、響鬼、龍騎、キバ、アギト。あの戦いで落とした『電王』と『剣』のメダルに、ライナーの中に積まれていたとされる二枚のメダル。敵の幹部二人を下し、メダルにされたとされる九枚のライダーメダルのうち半分近くを所有しているが、甲殻類メダルとサゴーズ以外の合成コアメダルは見付からず、自分たちが休んでいる間にも、日本の主要都市は着々とセルメダルの山に変えられ続けている。戦況は未だアポロシヨッカー陣営に傾いているのだ。

こんな相手に勝つことなんて出来るのか。映司の心を焦燥と恐怖が駆け巡る。重苦しい表情で床を見つめる映司に、鴻上は「先刻面白い情報が入ったんだ」と彼に話し掛けた。

「君たちが落としたガンガンライナーの残骸を、我が財団で回収・調査していたのだが、その中にこんなものが積まれていてね。……現在も調査中なので、写真しか見せられないのだが」

鴻上は一枚の写真を取り出し、映司たちに見せる。車のボンネットの中に詰まった機械類のような物が彼の目に映った。乗用車一台分程の大きさだが、墜落のシヨックで酷く歪んでおり、そのまま使うには適さないだろう。

「これが……どうしたんですか？」写真だけではこの機械の価値は見出せず、首を傾げて問い掛ける映司。鴻上は当然だろうとねと言つて、そこにもう一言付け加えた。

「これはね火野君、“人や物をセルメダルに変える”装置だ。アポロシヨッカーが日本を瞬く間にセルメダルに出来た理由がこれだよ。圧倒的な力と機動力を併せ持ったガンガンライナーに、この装置を組み込んで、手間暇を掛けずに侵略を進めたのだろう。恐ろしい事だが」

「人や物を、セルメダルに変換する装置……」映司は少し考えた後、何かに気付いて声を上げる。「ちよつと待ってください、それが俺たちの手にあるということは」

「そう、良いところに気が付いたね！ 仮面ライダーをメダルにするような代物だ。上手く使えば逆に奴らをメダルにすることだって出来るかも知れないのだよ、火野君！」

鴻上の言う通り、敵全てをメダルにしてしまえば、奴らにだってどうすることも出来はしない。終わりの見えない闘いに、微かな希望の光が見えてきた。

「解析は時間の問題さ。もう少し待ちたまえ」

「はい、ありがとうございます！」

そう都合良く行くもんかね。にわかには信じられねーなあ。

対策を得て気持ちが悪わつく映司に対し、二階から降りてきた土が声を掛けてきた。

「ああ、土さん。体の方は大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ、大したことはねえ。休みさえ取りゃあどおつてことは……」

得意気にそう語る土だが、そんな彼の頭を掴んで押さえ付ける者がいた。同じく二階で土の治療を行っていた伊達だ。

「何が大丈夫だ、痩せ我慢しやがって。火野の目は誤魔化せても医者の方は誤魔化せねえぞ、もやしちゃんよ」

「誰がもやしだ誰が！ 俺は土だ、門矢土！」

「何が間違つてんだ、”もん”に”や”ーに、しーだろ、しー」

「”し”じゃねえ、”つかさ”だ、土！ 何度言えば分かるんだよ！」

「それだけ騒げれば、もう大丈夫ですね」端から見れば漫才のようなやり取りに、映司の顔から笑みが溢れる。「それで、何が信じられないんです？」

「考えてもみるよ」両手を振って土が答える。「まずそこがおかし

い。そんなとんでもねえもんを、これだけ時間が経って、取り戻しに來ないってのはどういうことだ。裏があるに決まってる」

「そりゃあそうですけど……、俺たちが居ることが奴らに知れた訳ですし、メダルを取り返すので必死なんじゃないですか？」

「なら、いいがな。だったらとつとメダルを探しに行こうぜ、映司」

「いやな、お前こそ何を言ってるんだ」伊達が口を挟む。「戦ってなきゃそうやって軽口が叩けるかも知れないがよ、お前は明らかに弱ってる。これ以上奴らとやり合うのはやめる。死にたいのか」

「大丈夫だつて言ってるだろ、何度も何度も言わせんな」

「しょうがねえな……もう。勝手にしやがれ、勝手に」

「ああ、勝手にさせてもらうぜ。行こうぜ、映司」

土は映司の手を引いてクスクスエを出ようとしますが、入口の前で里中に止められた。

「火野さん。動くにはまだ早いですよ」

「早いつて何だ。動き出すのに早いも遅いもねえだろう」

「そうじゃありません。街に大量のカンドロイドを飛ばしました。

メダルをお探しなら、タカがこちらに戻ってくるまでお待ちください」

「んな悠長なこと言ってるかよ」土が苛立った様子で言い返す。

「メダルを狙ってるのは俺たちだけじゃねえんだぜ」

「ですが。敵が行き交う街の中で、探す当てもないのに、どうやって見付けるおつもりですか？ まず、無理だと思えますけれど」

「ああ言えばこう言う。こう言えばああ言う……って、映司の時にも言っただなこいつは。この世界の人間はやりにくくてしょうがねえ！」

何を言っても一歩も退かない里中に対し、思い切り頭を掻いて苛立ちを露わにする土。彼が窓の外に不可思議な赤い鳥を見込んだのはその時だ。あれは何だと目を丸くする土に対し、隣に立つ映司は『タカだ』と口にする。ばらばらのものが土の中で一つにまとまっ

た。

「成程、あれが”タカ”か。あいつを追ってけばいいんだな。行くぞ映司、残りのメダルを全部見付けだしてやるんだ」

「ああっ、ちよっと待ってくださいよ、土さん！」

伊達のあの話を聞いておいて、土を一人にしておける訳がない。

映司は里中たちに一礼をして、そそくさとクスクシエを出て行った。

タカ・カンドロイドに連れられて、映司と土がやって来たのは、市街地を抜けた先にある、潮風香る波止場。アポロシヨツカーに撃ち落とされたと思しき船を、海鳥たちが止まり木代わりに使っている。

「おいおい、どこまで連れて行くこつてんだ。街抜けて港まで出ちまったぞ」

「こんなところに、メダルが落ちてるんでしょうか……」

電車が墜落した場所から、遠く離れた場所にある波止場。メダルの雨はかなり広い範囲に降り注いだか、こんな場所まで落ちるものだろうか。首を傾げて辺りを見回す二人の前に、彼らを先導したカンドロイドが再び現れた。

タカ・カンドロイドは嘴で海を差し、その場でくるくると回る。探し物はこの先にあるようだ。

「おいおい、空の次は海の底かよ。どうしろってんだ、こりゃあ」  
「潜って探す……と言うよりも、あれを借りるしか、なさそうですね」

映司はそう言って、波止場に止まった小さな船を指差す。

「船か。投網でメダルを採れってか。採れる位置に浮かんでりゃあいいが」

「導線を繋げば動かせそうですけど……、土さん、操縦出来ます？」  
「俺に苦手なものはない。写真を撮ること以外は、な」

「そうですね。じゃあお願いを……」

「こりゃこりゃ。誰もおらんからって、船を盗んじやいかんぞ、若人よ」

導線を繋いで強引にエンジンを掛け、いざ出発しようとしたその時。隣に停まっていた船から白い顎髭をたくわえた老人が顔を出して、二人の男を呼び止める。

映司は申し訳なさそうに船の計器類から手を離し、土は「文句があるか」と老人に詰め寄った。

「この国がどうなるかって瀬戸際だせ。船の一艘や二艘、大目に見るよ」

「あかんあかん。……と、言いたいところじゃが、ええじゃろ。お主たち、こつちに来い。わしの船に乗せてやる」

「ええつ、いいんですか？」映司が驚いて声を上げる。「でも、漁が出来なくなったら困るんじや」

「アポロなんたらちゆう奴らが蔓延はびこってちゃ商売上がったりじやからな。構わんて」

「そう、ですか。助かります」

映司は丁寧にお辞儀をし、土はそれに便乗して老人の船に飛び乗る。

船は何事もなく波止場を出たが、彼らは老人の足下が水に入ってもいないのに、異様に濡れているのと、彼が士たちから見えない角度でにやりと笑っていることに気付かなかった。

「こちら、伊達。夢盛地区にてアルファベットの”T”みたいな絵柄のメダルを発見しました、どうぞー？」

「了解。こちらも青色のメダルを取得しました。どうぞ」

映司たちが船に乗って沖に出たのと時を同じくし、伊達と比奈が

街の北に、里中と後藤が南へ、ライダーメダルを探してタカ・カンドロイドを追っていた。

どちらの組もメダルを見付け、バツタ・カンドロイドで連絡を取り合っている。

「思ったより簡単でしたね」伊達の隣で比奈が言う。「映司くんたちもさくつと見付けているといいんですけど」

「火野たち……ね」伊達は訝しげに答える。「あのタカちゃん、どうもウソ臭エんだよなあ。俺たちは大勢タカを飛ばしたんだぜ。ここにも沢山タカちゃんが飛んでる。なのに、奴らの所には一羽しか来なかった。こりゃあ何かあるぜ」

「何か……って、畏だつて言うんですか？　しかし、何のために……さあね。火野たちが何処に行ったか、皆目見当が付かない以上は……」伊達は後ろ手で後頭部を掻きつつ、手のひらのカンドロイドに声を掛ける。「つうわけだ。取り敢えず一旦合流しようぜ、後藤ちゃん」

「分かりました。夢盛地区、でしたね……あ、ああっ！」  
「おい、どうした後藤ちゃん。返事をしろ、後藤ちゃん！」

電話口の後藤の声が何の前触れもなく突然消えた。伊達は何度も後藤の名を呼ぶが、返ってくるのは電話の発信音ばかり。何がどうなってるんだと焦る二人だが、ややあつてカンドロイドに着信が入る。

伊達は後藤のものかと思ひ声を荒げるが、そこから聴こえてきたのは、彼のものとは程遠い不気味な声だった。

「夢盛地区だな。教えてくれてどうもありがとう」  
「何、誰だお前は！？　後藤ちゃんと里中ちゃんに何をしたんだ、答える、答える！」

伊達の問いに、電話口の人物は何も答えない。二人の間にも緊張が走る。

「だ、伊達さん……今のって、どういうこと、なんででしょうか……」  
「俺にも分からん。奴ら、後藤ちゃんたちに一体何を……」

敵は何をしたいのかと腕を組んで思案を巡らせる伊達。彼と向かい合う比奈の表情が変わったのはその時だ。伊達の背後を指差してただただ震えている。

「おい、比奈ちゃん。一体全体どうした……って」伊達はどうしたのかと振り向いて、彼女の指差す方に目を向ける。

彼が覚えていたのはそこまでだった。飛び掛かって来たツタンカーメンマスクのライオンに腹を叩かれ、意識を失ってしまったからだ。

「我々がメダルを必死に探す必要などない。こうして貴様らから奪えば良いのだから！」

ライオンは嬉々とした表情で比奈の意識を奪うと、二人を担いで何処へと去って行った。

波止場から船を出して二十分程が経過した。船は波止場を遠く離れ、青い海以外何も見えない沖合いに出たが、彼らを先導するタカ・カンドロイドは止まらない。陸から離れれば離れる程、土たちの心に苛立ちが生じ、ある種の懸念を抱かせる。

「なあ、映司」落ち着かない様子で土が言う。「自分の非を認めちまうようで癪だから、今まで言わなかったんだが……、ひよつとして俺たちや、あのタカに八メられたんじゃないか？」

「そんな馬鹿な、里中さんが飛ばしたタカですよ。カンドロイドは持ち主の命令に従って動くんですよ、俺たちを裏切る筈がありませんって」

「だと、いいがな」訝しげに水平線を見つめ、土はぼそりと呟いた。映司にしても、懸念がないわけではなかった。ガンガンライナーの爆発で、メダルはかなり広範囲に吹き飛んだ。それは分かっている。しかし、こんな海の真ただ中にまで飛んで行くだろうか。土

の言う通り、自分たちは何かしらの”罠”に掛けられているのではないか。不安は疑念を呼び、彼も徐々に気が気ではなくなっていく。そしてその疑惑は確信へと変わる。映司たちを乗せた船が、タカの進路とは関係なく突然停止してしまったのだ。

「おい、おやじ。何故止めた！ タカの野郎はまだ進んでいるぞ。見失っちゃまうじゃねえか」

「へへへ、すいやせん。へへへ……」

老人は土の言葉に頷いて笑うばかりで、何も答えようとしなない。老人の態度に腹を立てた土は、怒りに任せ彼の頬を殴り付けた。

「どうだ、これで話す気に……にッ!？」

その拳は確かに老人の頬を殴り付けた筈だった。しかし、土の手に人を殴った感触はない。あるとすればそれは、水の中に手を突っ込んだ感覚だけだ。

改めて老人の顔を見る。彼の顔の皮は剥がれ、床に落ちていた。どういふことだと驚き戸惑う土に対し、老人だった者は、彼の右拳を取り込んで、先程までとは違う、若々しい声で笑った。

「まんまと、まんまと罠に嵌ったな、仮面ライダー・ディケイド！ それにオーズ！ 貴様たちの命は今尽きた！ アポロシヨツカー幹部が一人”ギリザメス”。もとい……今は”ギリザメ・シャウタス”様の手によつてな！」



第十一話：「反撃の狼煙とメダル搜索とアポロの罖」 （後書き）

順調にいけば次回か今回で折り返しでしょうか。もうちょい色々  
ごちゃごちゃするかと思いますが、もうしばらくお付き合いくださ  
いませ。

第十二話：「怪奇液体ノコギリザメと起死回生の一発と黄色のメダル」

(前書

カウント・ザ・メダルズ！ 現在、オーズの使えるメダルは

ヘッド：クウガ・コア、リュウキ・コア

アーム：ヒビキ・コア

レッグ：キバ・コア、アギト・コア

## 第十二話：「怪奇液体ノコギリザメと起死回生の一発と黄色のメダル」

鋭く尖った鼻先の錐に両腕で鈍い輝きを放つ鋸。眼前に広がる海原のように青く透き通った体表。それがかの老人の皮を被り、土たちを罫に嵌めた怪人・ギリザメシャウタスの正体だった。

「罫……だと？」怪人に腕を捻られつつ土が言う。「俺たちを海に連れ込んで何がしたいんだ」

「ガアブ、ガブ、ガブ……」怪人・ギリザメシャウタスが不気味に笑う。「冥土の土産に教えてやるう。お前たちを先導したあの夕力、あれは俺がそうするよう言っただけで離れたものだ。自分たちも使えるようになったって失念していたようだが、カンドロイドの使用権は依然として我々にある。お前たち仮面ライダーを誘き出して街から遠ざけるのが俺の任務。今ごろ貴様たちの仲間も我々の別動隊が押さええていることだろう。諦めるのだな！」

「長々と話しておいてそれがオチか？ 拍子抜けだな！」土が声を荒げて言い返す。「海に閉じ込めて得意気らしいが、当てが外れたな。俺たちや空も飛べるんだぜ。こっから逃げることもなんか造作もねえんだよ」

「馬鹿が、そうさせないために俺がいることを忘れたか！ お前たちを自慢の鋸で切り刻んで、魚の餌にしてやるわ！」

「そうは行くかよ、やれ！ 映司」

「はい！」

リュウキ！ ヒビキ！ アギト！

スキヤニングチャージ！

映司は土の掛け声に応じてオーズに変身。同時に三枚のメダルをスキヤンしつつ飛び上がった。

彼の背から炎が噴き出し、その勢いを借りてギリザメシャウタスに跳び蹴りを見舞う。勢いは十分、外しようのない距離での一発だ。喰って無事で済むわけがない。

「セイ……ヤー、ああ、ああっ!？」

オーズの蹴りは確かに怪人を貫いた筈だった。しかし、機械の体を蹴り碎いたと感触がない。ギリザメシャウタスの体は寒天やゼリーのように柔らかいのだ。オーズは怪人を仕留めることができないばかりか、彼のゼリー状の体に取り込まれ、勢いを殺され放り出されてしまった。

「無駄だ無駄だ。このギリザメシャウタス様にライダーキックなど無駄、無駄!」

「ギリザメ……シャウタス?」彼の名前に何かを思い出したオーズは、はつと目を見開く。「お前、まさか!」

「ガアブ、ガブガブ。その通り。俺は”シャウタ”というメダルをこの身に取り込んでいる。メダルの力で流体多結晶合金<sup>りゅうたいたけっしょうごうきん</sup>”液体金属”となった俺の体には、ライダーキックは元より、一切の拳も蹴りも効きはしないのだ! くたばれイ!」

ギリザメシャウタスは鋭利な鋸が付いた頭だけ残して液状化し、船の上を跳ねながらオーズに襲い掛かる。オーズは反撃しようと手を出す。液体金属の体の前には何の意味もなく、敵の鼻に付いた鋸で体に穴を開けられてばかりであった。

「く……そお、だつたら、これはどうだ!」

クウガ! ヒビキ! アギト!

オーズは頭のコアを『クウガ』に変えて背中のお撥を抜き、襲い来るギリザメシャウタスに対し、敢えて無防備のまま立ちはだかる。オーズの狙いは、攻撃の際奴が唯一液状化させていない”頭部”。誘いに乗ったギリザメシャウタスがオーズの腹を貫かんとするその瞬間、オーズは半身を退いて、手にした撥で、奴の鼻を挟んで受け止めた。

「ぐぬ……ぬぬッ!？」

「効かないっていうんなら、これはどうだ!」

オーリングサークルから赤い光が灯り、オーズの顔、クウガの角へと集まって行く。物理的な攻撃が通用しないのなら、雷で直接焼

いてやるうというのだ。

怪人の顔に向け、収束された雷を放つオーズ。決まり手かと思われたこの一撃も、改造人間から液状生命体と進化を遂げたギリザメシャウタスには無意味だった。彼は顔すらも液体に変えて雷をかわし、実体化させた両腕の鋸でオーズを切り裂くと、彼の体に巻き付いた上で、首先に鋸を突き立てた。

「ガアブ、ガブガブ。誰が『顔は液状化できない』と言った。俺の体は全身液体、どこを溶かしてどこを戻そうが俺の自由なんだよ！ 真っ二つになってしまえ！」

オーズの首に掛かる圧が徐々に強まって行く。ライダーメダルの力で強化された体と言えど、首筋を真っ二つにされてしまつてはどつしようもない。

「映司！ 待つてる、今助けて……！」

土は彼を助けようとデイケイドライバーを腰に巻き、ライドブツカーからカードを抜き出すが、そこで突然手が止まる。あの時はうやむやにしてはぐらかしたが、毒のせいで疲労が溜まっているのは本当だ。伊達たちも捕まっている今、むやみやたらに変身して、大事な局面で何も出来なくなる訳には行かない。

土はライドブツカーから抜いた『デイケイド』のカードを戻すと、代わりにライドブツカー自体をベルトから外し、ガンモードにして構えた。怪人が自分の方に注意を払っていない今がチャンスだ。オーズの首筋に掛かる鋸さえ撃てば彼は逃げられる。失敗は許されない。汗が額から滝のように流れ、引き金に触れた指に緊張が走る。海鳥たちのわめき声がうざつたい。

ギリザメシャウタスの注意が完全に明後日の方向に向いた。撃つなら今しかない。土は引き金を引いて銃弾を撃ち込んだ。

だがそれが奴に着弾することはなかった。土が撃つことを察知した怪人は一歩引いて銃弾をかわした後、もう一方の腕を伸ばし、土の右肩に鋸を放ったのだ。ライドブツカーから放たれた弾丸は怪人にもオーズにも当たらず、海鳥たちの群れの中へと消えてしまう。

「ふはは、ははははは」ギリザメシャウタスが土のことを嘲笑う。  
「舐められたものだ。俺が気付いてないと、本気で思っていたのか？ そんな筈ないだろう。くたばり損ないの仮面ライダーめ、貴様の始末は後でたっぷりとしてやる。そこで大人しく待っている」  
援護の一撃を外した。肩の傷も相当深い。これ以上生身で怪人とやり合うのは無理だろう。しかし土は、そんなことなど関係ないとしても言うように、奴よりも大きな声で笑い始めた。

「不愉快だ。何がそんなに可笑的い」

「こんなことで俺を出し抜いた、なんて、お前が思っているのが面白くつてよ。浅はかにも程があるぜ。俺が狙っていたのはお前たちじゃねえのさ」

笑いを止め、そのことを言い終えた瞬間、土は肩の痛みを推してギリザメシャウタスたちの足元に、ライドブツカーの銃弾を何発も撃ち込んだ。

彼らの足元に亀裂が走り、撃たれた部分だけが切り離されて海に没する。ギリザメシャウタスが自慢の錐鼻で船体を荒らし回ったその結果、土の放った銃弾程度の衝撃で崩れる程脆くなってしまったのだ。

海に沈んだオーズたちにも変化が生じる。海水に沈めば沈む程、ギリザメシャウタスの拘束が緩くなっていくのだ。

確かに彼は”シャウタ”のメダルで液化化する力を得た。しかし、彼は人間ではなく『改造人間』。彼の体は『液体金属』であって、液体そのものになったのではないのだ。

海水と同化出来ないギリザメシャウタスの体と、彼に絞め付けられているオーズとの隙間に海水が入り込み、水の膜が出来上がる。水の膜は次第に膨れ上がって行き、怪人がどれだけ力を強めても、それ以上絞め付けることは出来なくなっていた。

そうなってしまえばこっちのもの。オーズは全身に力を込め、体に巻き付くギリザメシャウタスを振り払った。

「た、助かったア」水面から船上に上がり、深呼吸をしつつオーズが言う。「それに、こんなものも拾えやし、結果オーライ、ですね」

「ああ、あのタカたちに謝らなきゃな。きちんと仕事をこなしてたわけだ」

土はオーズが手にした”それ”を見つめ、歯を見せてにやりと笑う。門矢士が狙っていたのは怪人の手などではなく、最初から海鳥たちの群れだったのだ。

喧しく泣き喚く海鳥たちの群れに隠れ、一匹のタカ・カンドロイドが飛んでいるのを見つけ、そいつが『何か』を啜えているのに気付いた土は、ギリザメシヤウタスに感付かれる前にタカを撃ち、啜えているものを海へと落とし、オーズに拾わせようとしていたのだ。彼らに少し遅れ、両手の鋸で船に穴を開けながら、ギリザメシヤウタスが船上に登って来た。

「おのれ……この俺をあんな形で出し抜くとは、完全無敵である筈の、この俺を！」

「無敵……？ はっは、笑わせてくれるぜ」土は怪人を嘲るように鼻で笑う。「お前は確かに強いよ。今までの俺たちじゃ勝てなかつたかもしれん。だがな、海鳥たちに紛れてやって来た”タカ”が、俺たちの元まで運んでくれたこいつの前じゃあ、お前の無敵もたかが知れてるんだよ。見せてやれ、映司！」

「……はい！」

オーズは『クウガ』のメダルを土に渡し、ギリシヤ文字の”ファイ”が刻み込まれた黄色のメダルをドライバーに嵌め込む。

ファイズ！ ヒビキ！ アギト！

それを嵌め込んでスキャンしたオーズの頭部は、顔一面を覆い尽くす黄色い複眼に黒い頭に変化していた。タカが拾ってきたのは『仮面ライダーファイズ』の力を宿したヘッド・コア、『ファイズ・メダル』だったのだ。

「ふん、頭が変わった所で何が違うというのだ、今度こそばらばら

に斬り刻んでくれるわ！」

ギリザメシャウタスは容姿の変わったオーズに対し、全く臆することなく襲い掛かる。物理的な攻撃を一切受け付けない液体金属の体を持った自分が、仮面ライダーなどに負ける筈がない。彼は自身の矜持に従って動いたのだ。

だがそれも、ファイズのメダルの前では無意味だった。オーラングサークルを通り、顔じゅうを覆う黄色の複眼から放たれた朱色の光線は、液体化したギリザメシャウタスの体を拘束し、無理矢理地に這い蹲らせたのだ。

「な、なんでだ、なんで溶けない！ 液体にならないッ」

「残念だったな鮫野郎」土が横から答える。「ファイズの『フォトンブラッド』には粒子レベルでの”拘束”能力があるんだよ。お前がいくら体を液体に変えようとも、こいつの光線を浴びちまえばどうにもならないって訳さ」

「そんな馬鹿な話があるか、俺は液体だぞ。液体を捉えられるものなどありはしないのだぞ！」

自分が仮面ライダーに遅れを取ったと信じられず、なおもオーズに挑み来るギリザメシャウタス。土は馬鹿な奴めと溜め息をつき、オーズに対し「仕留めろ」と叫んだ。

スキャンニングチャージ！

オーズは襲い掛かる怪人を蹴り飛ばして距離を取らせると、土の求めに応じて三枚のコアをオースキャンナーでスキャン。ファイズの目から放たれた朱色の光線が の形となってギリザメシャウタスの体に貼り付き、彼の一切の動きを封じてしまう。

同時に手にした撥を構え、勢いを付けて跳び上がるオーズ。彼は空中で二三度体を捻らせ、その勢いを借りて のマークを撥で何度も何度も叩き付けた。

ギリザメシャウタスの体に亀裂が走る。フォトンブラッドの効力で体組織構造を固定され、響鬼の音撃をまともに浴びたことで、形



状が維持できなくなったのだ。

「バカ、馬鹿な……。俺は無敵の筈だ。その筈なのに、なんで、なんで……こんな、こんなアあッ」

一瞬の絶叫の後、ギリザメシャウタスは大量のセルとシャウタのメダルを残し、無敵である筈の自分が何故倒されたのか分からぬまま、形状崩壊によって最期を迎えた。

土はセルメダルの山からシャウタのメダルを拾い上げ、オーズに手渡す。

「戦利品だ。お前のもんだぜ」

「ありがとうございます。でも……」

「ああ、ああ。みなまで言うな。伊達たちのことだろう。こんなところで突っ立っててもしょうがないし、とりあえず街まで連れて行ってくれるか」

「分かりました。俺に乗ってください」

やはり貴様たちが勝ったか、仮面ライダー。

オーズはアギトのメダルの代わりにキバのメダルを詰め、いつでも飛べるようにと『ブラッディウイング』を展開させるが、突然聞こえてきた不可思議な声に驚き、周囲を見回した。

見ると、自分たちの頭上にタカとは違う、紫色の鳥型カンドロイドが、バツタのカンドロイドを掴んで飛んでいる。『プテラノドンカンドロイド』だ。里中が飛ばしたのはタカだけだ。プテラノドンのカンドロイドは数が少なく、鴻上ファウンデーションにしか置かれていない筈。だが今、鴻上ファウンデーションはアポロシヨッカに占領されている。答えは明らかだった。

「お前、アポロシヨッカーの奴か」目元に皺を寄せ、土が問い質す。「伊達やら後藤やらをどこにやった。何をしやがったんだ」

怒気の籠った土の言葉に、電話口の相手はどこか楽しげな口調で答える。

「街の中心、夢見スクエアだよ。君たちのお仲間はこちらで預

かっている。返してほしくば、君たちの持っているライダー及び合成コアメダル。その全てを我々に”返して”貰いたい”

「馬鹿言え。元々お前たちのものじゃないだろう。ふざけたこと言ってるどぶっ潰すぞ」

「それはこっちの台詞だ。君たちに拒否権などない。街に仲間たちの墓標を作りたくなかったら、とつとと夢見スクエアまで来ればいい。私の名はデッドライオン。アポロシヨッカーの”最高幹部”だ」

電話口の怪人はそこまで言うと、士たちの返答を待たぬまま電話を切った。敵のふてぶてしさと横暴さに二人は拳を震わせるが、今はそんな場合ではない。

オーズは土を背中に乗せ、夢見スクエアへ向けて全速力で飛んで行った。

## 第十二話：「怪奇液体ノコギリザメと起死回生の一発と黄色のメダル」

(後書

ギリザメス

「仮面ライダー」第67話・『ショッカー首領出現！！ ライダー危うし』に登場したショッカー怪人。

ライダーキックすら返すつわもので、制作当初はかの「死神博士」の正体と設定されていたのですが、諸事情によりその設定は見送られ、『ライダーきりもみシユート』で倒される普通の怪人に。

(続く68話で初めて遭遇した筈のイカデビルをライダーが『何度戦ったら気が済むんだ』と言ってたり、タイトルクレジットにいない筈のないギリザメスが載っていたりと、かなりギリギリになって変更したのが伺えます)

シャウタを取り込んだサメの怪人ならいくらでもいそうな気がしますが、色んな組織から引き抜いてる+そもそもアポロガイストたちの世界のショッカーは壊滅寸前 ということで若干マイナーめな所から登板。

ギリザメ・シャウタスで区切った方が語感が良い気がする。それだとなんだかアンノウンの名前みたいになるけれども……。

流体多結晶合金

いわゆる「液体金属」。映画「ターミネーター2」を参照されたい。

爆発物や複雑な仕組みの機械以外なら何にでも姿を変えられるそうですが、グレネード弾とか液体窒素だとか、強烈な衝撃を受けるとかコピー機能が狂うそうです。CPUの場所だとか動力源の所在は謎。

夢見町

「仮面ライダーオーズ」において、クスクシエがある町の名前。本

編三十九話（町内会長が映司やアンクたちに退去を求める回）に於いてこっそりと紹介されています。

（オーズの世界の）東京都武蔵野市にあるんだとか。

第十三話：「強敵猫系メダルと人々の思いと登場黄色のコンボ」(前書き)

カウント・ザ・メダルズ！ 現在、オーズの使えるメダルは

ヘッド：クウガ・コア、リュウキ・コア、ファイズ・コア

アーム：ヒビキ・コア

レッグ：キバ・コア、アギト・コア

### 第十三話：「強敵猫系メダルと人々の思いと登場黄色のコンボ」

夢見スクエア。町の中心に位置し、人口一万八千人の夢見町民の多くが頻繁に利用する、ショッピングの集合体だ。アポロシヨツカ一の襲来によってメダルの採石場のようになったこの場所の大広場にて、殆どの町民たちが見守る中、仮面ライダーに味方をした四人の男女が処刑されようとしていた。

伊達に後藤、里中に比奈は、ライドベンダーに乗る黒タイトの戦闘員たちに囲まれた中、一様に十字架に磔にされて括られており、彼らの足元には見えているだけで暑くなりそうなほど赤く燃えた溶岩の釜が置かれている。十字架の先には鉄製のチェーンが巻きつけられており、時間と共に溶岩の方へと下がって行く。徐々にチェーンを降ろして、死の恐怖を限界まで味合わせてやろうという魂胆か。

磔にされ、自由に体を動かせない窮屈さ、そして迫り来る溶岩の熱さに苦しむ四人の前に、ツタンカーメンマスクを被ったライオン顔の怪人が現れ、舐め回すように彼らを見た。

「くくく、いい表情だぞ。もつと苦しめ、もつと苦しめ。貴様らの苦痛に歪むその顔だ。お前らが苦しむ度に見物人共は思い知るのだ。アポロシヨツカーに歯向かうことなど無駄だと、アポロガイスト様に従うしか生きる術はないとな！ さあもつと怖がれ、もつと苦しめ！」

「趣味悪いね、まったく」伊達が呆れ顔でぼやく。「油断していた俺たちも悪いんだが、メダル奪って町の人たちから希望をも奪おうとはな。えげつないっいたらありやしない」

「そんなことを言ってる場合ですか」隣の後藤が伊達に言う。「一刻も早くここを抜け出さないと。こんな馬鹿な遊びにいちいち付き

合う必要なんてありませんよ」

「おい後藤ちゃん、奴の目の前で言うことじゃないだろ、そういうこと」

伊達はこの状態でなんてことを言うんだと、後藤に制止を掛けるが間に合わず、彼はデッドライオンの平手打ちを喰らってしまった。「ふふ、慌てるな慌てるな」デッドライオンは得意気な顔で後藤に言う。「貴様たちを殺すのはもう少し後だ。まだ、主賓が到着していないからなあ」

「火野たちが来てもそんな態度でいられるといいがな。俺たちや街の人々にこんなことをしていると知ったら、奴ら黙ってはいないぞ」「ほお、いいぞいいぞ。そういう他力本願で間抜けな台詞が聞きたかったんだ。もつと言え。もつと助けを求めろ。それが無駄になつたと分かった時、お前は今以上に絶望するのだからな」

そう言つて大笑いをするデッドライオンに対し、後藤は怒りよりも彼の底知れなさに冷や汗をかいた。生身で隙があつたとはいえ、自分たち四人を瞬く間に気絶させ、この場所まで連れ去る位だ。単なる慢心ではなく、実力も相当なものなのだろう。

それから暫く、デッドライオンは後藤を小突き回して笑っていたが、何かが空を飛んで来る音を聞き付け、表情が一気に強張った。

「来たな、仮面ライダー……。お前たち、配置に付けーッ！」

戦闘員の一団はデッドライオンの号令に従い、オーズたちを迎え撃つべく十字架の前で陣形を組む。

夢見スクエアの周囲に建ち並ぶビルの合間を縫つて、空の上からオーズたちが現れる。人々の歓声に包まれながら十字架から少し離れた位置に着地したオーズは、土を下ろした所で、襲い来る戦闘員の姿を目の当たりにした。

「多いですね……奴らも、見物人も」

「しゃらくせえ。あんな黒タイツ、とつとと蹴散らしてやらあ」

「蹴散らすつて土さん、変身……するんですか？ 体の方は」

「曲がりなりにも敵の幹部が襲って来てるんだぞ。生身でやれるほど甘くはないし、出し惜しみをしている場合でもねえ。正念場だ、気合い入れるよ、映司！」

変身

KAMEN RIDER「DECADE」

士は肩の傷も残りの体力も気にすることなくデイケイドに変身し、襲い掛かる戦闘員たちに向かっていく。辛くない筈がない、傷が痛まない訳がない。それでもなお痩せ我慢をして立ち向かっているのだ。メダルに変えられてしまった仲間たちを取り戻すために、自身誇りのために。

彼の勇ましい背中感動を覚えたオーズは、両の拳を固く握り締めて決意を新たにし、彼もまた伊達たちが捕らえられた十字架を指して駆けて行った。

いくら戦闘員たちが束になって掛かるうとも、ライダー二人を相手にしては、まともな足止めにはならなかった。デイケイドに切り伏せられ、オーズには稲妻や炎でその身を焼かれ、瞬間に原料のセルメダルに戻されていく。彼らがデッドライオンの元まで辿り着くのに一分も掛からなかった。

「お招きに預かったんで馳せ参じたぜ。そこで転がってる役立たずたちみたいにならなくなきゃ、その四人をさっさと解放するんだな」

「もう後はないぞ！ 観念しろ、デッドライオン！」

二人のライダーはそう言ってデッドライオンに人差し指を突き立てるが、彼はそうなるかと分かっていたのか、表情を全く崩すことなく二人に言い放つ。

「終わりだと？ 馬鹿を言っちゃいけない、ここからが始まりなのだ。アポロガイスト様に仇なす愚かなライダーの生き残り共、この私が貴様らに引導を渡してくれるわ」

デッドライオンは懐から黄色とオレンジが混ざったような色合い



のメダルを取り出して、額に生じた投入口に放り込む。ツタンカーメンマスクのような硬い鬘たてがみは金色に染まって刺々しく伸び上がり、腕の爪は固く太く、下半身はしなやかでバネのある筋肉へと変わり、ぐんぐんと膨れ上がって行く。

変態を遂げたデッドライオンは金の鬘から光を放つと共に、咆哮を上げて見せる。その衝撃でオーズたちは数メートル先まで吹き飛ばされ、見物人たちの列に突っ込んで行った。

「ははは、他愛もない。見たかライダー共、これがアポロシヨッカ―最高幹部『デッドラトラライオン』の力だ。どうだ、理解したか？ 青ざめたか？ 震えて声も出ないか？」

「誰が諦めるもんかよ」体を起こしながらデイケイドが言い返す。

「お前より強い奴なんざ、旅先で腐るほど見てきた。大したこたあねえよ」

「ラトラータのメダルを使ってそれだけだとしたら拍子抜けだな。

俺たちはまだやれる。御託を並べる暇があるなら掛かってこい」

怯むことなく平然と立ち上がってくる二人に対し、デッドライオンは愉しそうにやりと口を歪ませた。

「面白い、そうでなくては狩り甲斐がないというもの。ならば、恐怖を感じることにすら出来ぬまま、無様に朽ち果てるがよい！」

デッドライオンはそう言うと、思い切り大地を踏み締め、両足に力を込める。動物が全力疾走を行う合図だ。それを隙と考えたオーズたちは、動かない彼に向かって剣と撥を振るうが、彼に当たるその瞬間、デッドライオンの姿は彼らの視界から消え失せた。それどころか脇腹を鋭利な刃物で抉られてしまっている。

「ふふふ、どこを見ているのだ。こっちだ、こっち」

二人のライダーが振り向くと、切り裂かれた自分たちの脇腹の肉を持って、デッドライオンが背後に立っている。デイケイドは奴が物凄い早さで自分たちの背後を取り、すれ違い様に自分たちの肉を抉ったのだと理解した。

認めたくはないが、奴は只者ではない。二人のライダーは脇腹の

痛みすら忘れ、眼前の敵に対し冷や汗をかいていた。

このままではいけない。敵は手強いが、こちらも攻め手が無いわけでないのだ。デイケイドは不安を振り切るように頬を叩き、ライドブツカーから二枚のカードを引き抜いた。

「お前が素早いのは良く分かったよ。けどな、早いのはてめえだけじゃあねえんだぜ！」

KAMEN RIDE「BLADE」

ATTACK RIDE「MACH」

デイケイドはカードをドライバーに装填して『仮面ライダーブレイド』に変身し、重ねて『マツハ』のカードをバツクルにセットする。ジャガーの絵柄がデイケイドの胸に吸い込まれ、デッドライオンにも匹敵する早さで駆け出した。

「やはりそう来るかデイケイド！ 相手になつてやる！」

両手の爪を鋭く伸ばし、自身も地を蹴って迎え撃つデッドライオン。その場にいた誰にも二人の姿を捉えることは出来ず、金属と金属が擦れ合う音だけが広場に響く。速さ比べは一見両者互角のように見える。しかし、デッドライオンには勝算があった。デイケイド 門矢士はカニレーザーから受けた毒の効力で体力を著しく消耗している。そんな彼が全力で動いていて、長時間戦える筈がない。

彼の見立て通りデイケイドは数分程で息を切らし、膝をついてその場に倒れ込む。『マツハ』による高速移動は、デイケイドの疲労を瘦せ我慢では誤魔化し切れないほどに増やしてしまったのだ。

デッドライオンは待つてましたと言わんばかりに、倒れ込んだデイケイドを蹴り付け、体が浮き上がった所に自慢の爪を叩き込む。太く硬く鋭く尖った爪はデイケイドの装甲に穴を開けるばかりか、その下にある土の肌をも裂き、彼に血飛沫を上げさせた。

「土さんツ！」飛沫を上げて倒れ込むデイケイドを目にし、オーズが声を上げる。「お前、よくも……ッ！」

「無駄だ、無駄だ。諦める」

デイケイドが倒されたことに怒り、策もなくデッドライオンに突

貫するオーズだったが、何の手立てもなく正面から向かって行った所でどうすることも出来ず、かわされた上で背中に大きな切り傷を負って地に伏した。

「つまらんなあ、まったくもってつまらん」デッドライオンはオーズを足蹴にしつつ言う。「他の奴らは、メダルを持っていながら、こんな雑魚にしてやられたのか。こんな奴らを“脅威”とお考えになるアポロガイスト様の気が知れん」

デッドライオンはオーズの襟首を掴むと、スクエアの端に放り投げて高らかに笑い、それを見ていた残りの戦闘員たちも喜びの声を上げた。

仮面ライダーたちが足蹴にされる様を見て、歓声を上げていた見物人たちも何も言えず押し黙り、辺りには気まずい沈黙が流れる。彼らは皆デッドライオンの思惑通り、アポロショットカーに従うしかないのかと考え始めていた。

しかし彼らは、十字架に磔にされ、溶岩の釜に落とされかけている伊達たちは違う。彼らは 仮面ライダーたちはどんな窮地であっても乗り越え、世界を救って来た。自分たちはそれを目撃している。彼らがこんな所で終わる筈がない。そのために自分たちがすべきことは何か。自力で体に巻き付く鎖を解くのは不可能だ。バースドライバーはガンガンライナーとの戦いで修理中であり、手元にはない。先程町中で見付けたメダルも、デッドライオンに気絶させられた際、彼らに没収されてしまった。

何処も彼処も塞がっていて、一見どうにも出来ないように思える。しかし、伊達明には打開策があった。デッドライオンの戦いを観戦し、彼が優勢になることに“イー”と歓声を上げる戦闘員の中に一人、灰色の小さな箱を持っている者がいる。詳しい事は聞かされて

いないが、ライダーのメダルは映司たちにとつても、アポロシヨツカー陣営にとつても重要なものだと言うことは知っている。となれば、奪えばすぐに首領のアポロガイストに献上されているものだと思うっていた。

あの中には三枚のメダルが入っているに違いない。奪い返して映司に渡したいが、今の自分にはどうすることも出来ない。だが、メダルを映司に渡すのに彼が動く必要はない。伊達は唯一自由に動かせる口を開き、声を張り上げて“彼ら”に呼び掛けた。

「みんな！ この戦いを見ているみんな！ その灰色の箱を持つた黒タイツ、そいつの箱を奪って、仮面ライダーに渡してやってくれ！ 仮面ライダーはあんたたちみんなの為に戦ってるんだ、信じってくれ、ライダーは負けない！ アポロシヨツカーなんてふざけた連中に従うのを由としないのなら、みんなの手で仮面ライダーを救ってやってくれ！」

伊達の力一杯の叫び声は、誰からも答えが返ってくることも無く掻き消える。この惨状を目の当たりにして、アポロシヨツカーに歯向かおうとする者など、見物人の中には居ないのか。虚しく消え行く叫び声を耳にしたデッドライオンは、大笑いで伊達のことを嘲った。「無駄なことだ。この有り様を目にして、我々アポロシヨツカーに歯向かう奴が要るわけ無かるう。まア、念のために言っておくとするか」

デッドライオンは箱を持つ戦闘員に指示を飛ばし、彼に箱を開けさせた上で話を続ける。

「確かに、貴様らから奪ったメダルはこの中に入っている。お前たちを始末した上でアポロガイスト様に献上する予定だったのだな。

この戦いを見ている者たち全員に告げる。一人でも奴の言いなりとなつて、このメダルを奪ってみろ。お前たち全て……、そう、全てだ！ 一人残らず切り刻んで、家畜の餌にしてくれようぞ。これは『忠告』ではない、『警告』だ。分かったな」

奴の言葉に伊達は「しまった」舌を打つ。オーズたちが成す術なく横たわっている今、デッドライオンにあんなことを言われて、民衆が動いてくれる訳がない。現に彼らは伊達たちから目を背け、下を向いたまま押し黙っている。最早何を言おうが無駄なのか。伊達は見物人たちに見切りを付けて目を伏せる。

だがその瞬間、箱を持った戦闘員に飛び掛かり、強引に箱を奪って逃げ出す男が現れた。伊達たちはおろか、デッドライオンすら予想だにできなかった行動に、誰もが目を見開いて彼を見る。

黒いスーツを身に纏い、やや生え際が後退した黒淵眼鏡の男は、黒タイツたちに揉みくちやにされながらも、高台まで逃げ延びて、他の見物人たちに向かって叫ぶ。

「このままで……いいわけないだろう！ 彼らは、仮面ライダーたちは、戦えない私たちの代わりに戦ってくれているんだぞ。そりゃあ私だって死にたくないし、奴らのことは滅茶苦茶怖いさ。けど、それを理由に動かないで、誰かの助けに甘えていて、恥ずかしいとは思わないのか！？ 受け取ってくれ、仮面ライダーオーズ！」

黒淵眼鏡の男は、箱の中から取り出したメダルを握り締めると、遠方のオーズたちに向かってそれを投げ付ける。それまで男に群がっていた黒タイツたちは彼から離れ、皆メダルに向かって駆けて行く。

「あなたは……まさか！」男の姿と声に聞き覚えがあった後藤は、改めて男の顔を見つめる。彼はかつて『正義の味方になる』という欲望をグリードにつけこまれ、ヤミーを産み出してしまった男、『神林進』だったのだ。

そうこうしているうちに、戦闘員は男が投げたメダルに追い付き、折角取り戻したものが再び奪い返されてしまう。奴らの身体能力を考えれば至極当然の結果だ。神林にも分かっていた筈だ。そうなると分かって、何故彼はこんな真似をしたのだろう。

男は黒タイツたちが『それ』に群がるのを見、彼らの密集地帯か

ら離れた場所から駆け出した。

「残念だったなタイツ共！ それは私の『弁護士バッジ』だ！」

神林に言われ、戦闘員たちは握った『それ』をまじまじと見つめる。丸い形をしているが、メダルよりも一回り小さく、金色の向日葵を象った形状で、中心には天秤が描かれている。これは明らかにメダルじゃない。

普通に投げてても戦闘員に奪われると分かっていた神林は、手のひらの中でメダルとバッジをすり替えて投げ、奴らの目をそこに釘付けにしたのだ。神林はそのままオーズたちの方に向かって駆けるが、騙されて逆上した黒タイツたちは素早く、あっという間に彼に追い付いてしまう。

必死に駆ける神林の背に、戦闘員たちのナイフが迫る。逃げるので必死の彼にナイフをかわす手立てはなく、その様子を見ていた誰もが「危ない」と目を背けてしまう。

黒タイツのナイフが神林の背に無慈悲に降り下ろされる。だが、そのナイフは彼を刺すより早く、羽織袴を纏い、鉄パイプを手にした少女に防がれた。

「あ、あなた……は？」

「行って下さい弁護士さん。そのメダルを仮面ライダーに！」

「あ……ありがとう、本当にありがとう！」

少女の助けを借りて、先に進む神林。ナイフを持った黒タイツは彼女が引き受けたが、襲い来る敵の数はまだ多い。神林の行く手を遮るべく、戦闘員同士がスクラムを組み始めた。神林の貧相な体格では、あれを潜って前に進むのは無理だろう。方向を変えようにも、右も左も囲まれていて逃げ場がない。彼は今度こそ駄目かと怯えるが、戦闘員が組んだスクラムは、異様に恰幅の良い男の体当たりを受け、ボーリングのピンのように派手に飛んで行ってしまった。

「よう。大丈夫か、正義の味方さん」男が体を起こしつつ話しかけてきた。「あんたの言う通りだ。ヒーローが頑張ってるんだから、俺たちだって頑張らなくちゃあな。うまい飯も食えなくなっちゃう

しさ」

「誰だか存じませんが、ありがとうございます。それに……」

男に礼をし、神林は周りを見回す。さっきまで目を伏せて黙っていた人々が、戦闘員たちに果敢に向かつて行き、神林の行く道を作ってくれているではないか。デッドライオンの言葉を忘れた訳ではない。だがアポロシヨッカーに従い、いつ命を奪われるかと怯える生活は御免だ。仮面ライダーを信じてみたくなったのだ。

気が付くと彼らは黒タイトの戦闘員たちに向かつて行っていた。仮面ライダーの逆転を信じ、その布石となるメダルを届ける為に。

こうなると面白くないのはデッドライオンだ。彼はアポロガイストよりメダルの奪還と人々に絶望を与える命を受けていた。それに従い、二人のライダーを徹底的に叩きのめした。唯一の希望を失った民衆は絶望するしかない。

だが今はどうだ。彼らは希望を失うどころか、ライダーの逆転に賭けて、死をも恐れず戦闘員に向かつて来ている。人の希望など容易く刈り取れるものと高を九々ついていたデッドライオンは、臼歯が砕けんばかりの勢いで歯を食い縛る。

「ええい、そんな男一人に何を手間取っている！ こうなったら、喰らえッ、『ライオンチェーン』！」

怒りに燃えるデッドライオンは、両手に付いたロックを外し、右腕の中にしまわれていたチェーンを引っ張り出すと、こちらに向かつて来る神林に照準を合わせ、彼目掛けて鋭い爪を右手ごと放った。チェーンは瞬く間に伸びて行き、神林の心臓を狙って突き進む。

放たれた右手は寸分狂わず突き進み、神林と一人分程の距離まで迫る。しかし、命中確実と思われたその一撃は、デッドライオンの背後から放たれた銃弾によって軌道をずらされ、神林に当たることなくタイル張りの床を砕いて止まった。

「くそッ、邪魔をしたのは誰だッ」顔を赤くして振り向くデッドライオン。彼の背後ではつつ伏せになっただまライドブッカーの銃口

をこちらに向けていたりと笑うデイケイドの姿があった。

「大の男が体張ってたんだ。邪魔をするのは野暮ってもんだろ」

「ぬうう、この死に損ないめが！」デッドライオンは地団駄を踏んで、再び神林の方へと向き直る。「まだ左手があるわ、今度こそ死ねイ！」

右が駄目なら左手だと、床に刺さった右手を巻き取りつつ、残った左手を放つデッドライオン。しかしこの一撃も、何処からともなく飛んで来た『クジャク』の形をしたカンドロイドに軌道を反らされ、神林の体をすり抜けてしまう。

「ぬおお！？ 何故こんな所にカンドロイドが！ ええい、邪魔だ、邪魔だ！」

予想外の出来事だらけで慌てふためくデッドライオンを見、十字架に磔られた里中は不敵に微笑む。こう言った事態に供え、こっそりとクジャクのカンドロイドをポケットに忍ばせていたのだ。

「里中ちゃん、グツジョブ！ いつも頼りになるねえ」

「さすが俺の上司！」

「まあ、これもお仕事ですから」

皆の協力を得て走り続ける神林は、漸くオーズが倒れている場所に辿り着く。彼は最後の力を振り絞り、今まで以上に大股でタイルの床を駆け抜ける。

しかし、神林がオーズにメダルを届けることは出来なかった。オーズの元に辿り着く直前、物陰に隠れていた戦闘員の奇襲を喰って、地面に叩きつけられてしまったからだ。

地面に這い蹲ると同時に、三枚のメダルは神林の手を離れ、タイルの上を転がって行く。そのうちの二つ、赤と青のメダルが黒タイツの手によって回収され、最後の一つ、銀色のメダルにも彼らの手が伸びる。

皆の力を借りてまで頑張ったのに、これで終わりなのか。自分たちただの人間は、正義の味方の手伝いすらも出来ないのか。神林は



己の無力と悔しさに涙を流していた。

ちよつとちよつと、ちよつと、待ったーア！

黒タイツの一人が銀色のメダルに手を伸ばし、誰もが諦めかけていたその時、戦闘員がメダルを拾うよりも先に、彼らと同じ物陰から現れた男がメダルを掠め取った。

黒タイツたちがメダルを奪われたことに気付く頃には、男はオーズの元へと辿り着き、彼の頬を何度も叩いていた。

「あの、あのあの、あの！ あんた火野映司さんでしょう？ 起きて、起きてくださいよ！」

「ああ……うん。どちらさま、ですか？」

男の言葉と頬の痛みに、オーズは意識を取り戻してゆっくりと立ち上がる。彼が目を開けた時、最初に映ったのは、黒白縞の衣服を身に纏った、七三分けの気弱そうな青年の顔だった。

「覚えてないんですか？ 俺ですよ、俺俺。山金さんに追われてた奥村安二おくむらやすじですよ」

「奥村……奥村……」オーズは頭の中を必死に探り、一人の人物を思い出す。「ああ、”ヤスさん”……ですか？」

「そうそう、そのヤスさん」

奥村安二 通称・ヤス。相棒の”山金”を警察に売り、追われていた所を助けて知り合った男の名前だ。彼が着ているのは囚人服だ。助かった後で罪を認めて自首したのか、山金に脅されて一緒に刑務所に入ったのか、それは分からない。

それよりも、彼がこんな場所で、何故自分の前にいるのか。オーズには不思議でしょうがなかった。

仮面の下から覗く彼の疑問を汲み取ったのか、ヤスは「そうだった」と思い直し、手にした銀色のメダルをオーズに手渡した。

「みんなして必死になって持ってきたんだ。早いところカチ付けてくださいよ、仮面ライダーオーズさん」

今まで気を失っていたオーズに、このメダルが自分の元に渡るまで、どのような経緯があったのかは分からない。しかし、観衆の誰もが戦闘員と戦い、デッドライオンがその様子に怒り狂っている所から、彼らが自分の為に相当な苦勞と覚悟をして、ここまでメダルを運んで来たことだけは理解できた。

戦えない人々がここまで頑張ってくれたんだ。仮面ライダーである自分が踏ん張らないわけにはいかない。オーズはヤスの手を強く握り、戦闘員に押さえ付けられて涙を流す神林に深々とお辞儀をすると、響のメダルを外し、その代わりに銀色のメダル 『電王』をドライバーの真ん中に嵌め込んだ。

「皆さんの頑張り、覚悟、痛み……無駄にはしません。見ていてください」

変身ッ！

ファイズ！ デンオウ！ アギト！

ドライバーから発せられた歌と共に、オーリングサークルは黄色一色となり、オーズの胸に、腕に、脚に『電車』のレールの様なものが伸びる。

伸びたレールには、ファイズメダルから発せられる『フォトンブラッド』が供給され、オーズの全身が深紅の光に包まれた。

ファイズ、電王、アギト。技に優れたテクニカルな形態・『黄色のコンボ』の誕生だ。

第十三話：「強敵猫系メダルと人々の思いと登場黄色のコンボ」（後書き）

「レッツゴー」のモロパクリじゃねえか！　と言われても仕方のない展開ですみません。そう言われても、この辺の下りはどうしてもやっておきたかったので……。

民衆の中に混じってた名前ありの人たち

・神林進

「オーズ」本編21、22話に登場した知世子の旧友。「正義の味方」になることを望み、司法試験を受けて弁護士になろうとするも、何度も落ちまくってた子持ちの中年男性。

彼のキャラクタよりも、仮面ライダーシンさんに良く似たバツタヤミー、映司の「正義のためなら人間は何処までも残酷になれるんだ」という台詞の方が印象深いような気がしないでもない。

息子も出しておこうかと思いましたが尺の都合でカットしました。

146

・白鳥梨恵（鉄パイプで戦闘員を殴っていた少女）

「オーズ」本編17、18話（伊達さん本格登場回）に登場した剣道少女。顧問の橋本先生に淡い恋心を抱くも、彼が結婚を間近に控えていることを知り、そのことでウヴァに付け込まれ

彼女が、と言うよりも堂々と女子トイレに入ってくるウヴァさんに腹筋を貫かれた視聴者は数多いはず。

某レムリアの剣を持った橋本勝先生が彼女助けに来る展開も書いてはいたのですが、これまた尺の都合でカットしました。

……すみません、嘘です。最初から書いてません。

・腹時門太（スクラムを組んだ戦闘員にタックルをかました男）

「オーズ」本編3、4話に登場した大食い男。その欲望をカザリに

利用され、ネコヤミーにされてしまう羽目に。ネコヤミーから分離させられてもあまり懲りてないようで

最初に紹介した神林以外の人選はほとんど適当ですが、彼にしる先の剣道少女にしる、持ったスキルを活かせるポイントがあつて本当に良かった。

・奥村安二

「オーズ」本編19、20話（タジャドルコンボ初登場回）に登場した男。相棒の山金を裏切ったことで彼と、彼の生み出したライオンクラゲヤミーに追われることになるも、映司たちのメダルを全部奪つたり、あつさりとカザリ側に付いたりとおんまり印象が良くない人ですね。

オーズたちを助けに来る人たちはもつとたくさん出しかつたのですが、あんまり増やしすぎても“WR”みたいになつちゃうなあと思つたのと、さすがにそこまで書ききれないなあということでの四人だけにしました。

ラトラータと勝負させるならクロックアップやアクセルフォームだろ！と思つたのですが、両方とも序盤中盤で消化してしまつたのでブレイドのマツハで代用しました。デイケイド放送当時、「アクセルフォームとクロックアップで戦いが出来るのなら、ラウズカードのマツハだつて行けるだろ」と一部の人がやたらと言つていたのを思い出しました。あれからもう二年か……。

第十四話：「炸裂黄色のコンボとライオンの最期と裏の裏の裏」(前書き)

カウント・ザ・メダルズ！ 現在、オーズの使えるメダルは

ヘッド・コア：クウガ・コア、リュウキ・コア、ファイズ・コア

アーム・コア：ヒビキ・コア、デンオウ・コア

レッグ・コア：キバ・コア、アギト・コア

#### 第十四話：「炸裂黄色のコンボとライオンの最期と裏の裏」

「あれは……！ あの役立たず共が、しくじりよったか！ もういい、私が滅ぼして首をアポロガイスト様への手土産にしてくれるわ！」

デッドライオンはオーズが新たな姿になったと見るやいなや、伸ばしていた手を収め、太股の筋肉に力を込めて、いつでも飛び掛かれる体勢を作る。このままでは先程までの二の舞だ。

だがオーズは恐れることも退くこともなく、かかつてこいと言わんばかりにデッドライオンの前に立ちはだかる。『アギト』の足から灯った光が全身に敷かれた『電王』のレールを伝ってオーラングサークルを越え、『ファイズ』の頭部に昇って、顔を覆う黄色い複眼を金色に染めた。

疾風のような早さと勢いで、鋭利な爪を武器に真正面からデッドライオンが襲い来る。彼は「これで終わりだ」と叫んで爪を突き入れるが、その爪はオーズを裂くことなくかわされてしまった。

「な、なんだ、今は」爪を地面に刺して勢いを殺しつつ、デッドライオンが言う。「私のスピードについて来られる奴など居る訳がない！ 今のはそう……、まぐれだ！ 今度こそッ」

爪を地面から引き抜き、軽やかな動きで地を駆けるデッドライオン。今度は真正面からではなく、オーズの死角に回り込んですれ違い様に彼の首を千切ろうと言う算段だ。オーズは背後を見てすらない。やはりさっきのはまぐれだ。デッドライオンはオーズの背後に回ったと同時に体を弾ませ、勢いを付けて彼の首を狙って飛びかかる。

しかしオーズは振り向くことなく腰の動きだけでそれをかわし、空振って隙だらけになったデッドライオンの腹に拳を叩き込んだ。

「うぬ……ぬぬ、こんなはずは、こんな筈は……ないッ！」

デッドライオンは腹を叩かれてよろけるも、直ぐ様体勢を立て直

し、そんなこと信じられるかと言わんばかりに三度オーズに襲い掛かる。今度はあえて真正面から突っ込み、直前で飛び上がった彼の空振り誘発させて、隙が出来たオーズに空中から切り裂こうというのだ。

オーズの懷まで迫り、彼の体に触れるかどうかの所で跳ねて飛ぶ。デッドライオンはこれならどうだと腕を降り下ろすが、当のオーズは彼のフェイントに惑わされることなく、飛び掛かるデッドライオンの右腕を掴み、動きが止まった所で右足の前蹴りを彼の腹に叩き込んだ。

勢い余って床のタイルに後頭部をぶつけ、頭を押さえて苦しがるデッドライオンを見下ろし、彼に人差し指を突き立ててオーズは言う。

「無駄だよ。お前がどれだけ早く動こうとも、俺には全て『見えてるんだ』」

彼の言うことはハツタリなどではない。『アギト』のメダルに元々備わっていた”見切り”の力が、『電王』のレールを通じて『フアイズ』の頭部に伝わり、彼の動き全てを完全に予測していたのだ。個々のメダルの力を他の箇所運んで強化する『デンオウデンレール』。それを最も効果的に行使出来る形態が、この『黄色のコンボ』なのである。

「おお、のお、れエ……！」頭と腹の痛みを堪えつつ立ち上がるデッドライオン。いくら素早く動けようとも無駄かと理解した彼は、頭部の鬣たてがみに力を集中させ、熱光波に変えてオーズに放った。眩い光と凄まじい熱量に、スクエアにいた誰もが目を背けてしまう。

しかしオーズは違う。デンオウデンレールで『フアイズ』のメダルからフォトンブラッドを引き出し、全身に駆け巡らせてデッドライオンに撃ち返した。

熱線と光線が互いにぶつかり、真っ赤な火花を散らし合う。相対する二つの光は猛烈な衝撃を発して掻き消え、彼らを強く吹き飛ば

す。オーズよりも先に立ち上がったデッドライオンは、彼が起き上がるより前に、一気に間を詰めて襲い掛かった。

オーズは不意打ちにも動揺せず、横に転がって初撃をかわし、横薙ぎに振るわれた爪を蹴りで防いで起き上がった。

「そんなに勝負がしたいのなら……、やってやる！」

オーズは頭部と脚部に力を込め、デンオウデンレールを通じて両方の腕に運ぶ。形のないエネルギー体だったそれは、オーズの掌から実体化し、右手にはファイズの武器『ファイズエッジ』が、左手にはアギトの薙刀『ストームハルバード』として形を成した。

「武器を持った所で何になる！？ 喰らえい、『ライオンチェーン』！」

オーズが武器を構える間、デッドライオンは手のロックを外して、チェーンの付いた右手をオーズに放った。放たれた右手に対し、オーズはハルバードを眼前に構え、わざと絡め取らせて思い切りチェーンを引いた。

まずい、と思い逃げようとするも後の祭り。チェーンを通じて引き寄せられたデッドライオンは、右手のファイズエッジで左目から左足の先まで真一文字に斬り付けられてしまった。

「おご……おお、こんな……善では……」左目を潰され、膝を付いて立ち上がることにすら出来ないデッドライオン。これを勝機と見たオーズは、二つの武器をその場に放り、オースキャナーで三枚のメダルを読み込んだ。

スキヤニングチャージ！

チャージと同時にファイズの複眼が光輝き、デンオウデンレールを伝って脚部に集束されて行く。右の爪先と左の踵に仕込まれた『クロスホーンヒール』が展開し、集束されたフォトンブラッドがヒールに満ち満ちて、紅く輝く巨大な角に変化した。

オーズはそのままデッドライオンに向かって走り出し、よろよろと起き上がる彼の胸部に右足の爪先を突き刺し、引っ掛かった所で



左足を振り上げ、踵の角をデッドライオンの脳天に見舞い、タイルが粉々に砕ける程の勢いで地面に叩きつけた。

「ぐ……おお！ 私の夢が……、いずれこの組織を乗っ取り、『デッドシヨツカー』として、全世界の覇権を握る私の……夢が……ああ、あああ！」

デッドライオンはそのまま立ち上がることなく、大量のセルメダルへと変わって砕け散る。

オーズが右腕を上げると共に、観衆は仮面ライダーの勝利に沸いて、割れんばかりの大歓声を上げた。

「おおい、おおい、火野オ。勝ち名乗りも結構だが、早いとこ俺たちを助けてくれ。足の裏が熱くって熱くって」

「ああ……、すみません、伊達さん」

伊達に助けを請われたオーズは、ファイズの複眼から大量のフォトンブラッドを照射してマグマの釜を蒸発させると、近くに放ったハルバードで十字架を砕き、彼らの縄を解く。伊達たちは自由に動けるのを喜ぶように伸びをすると、オーズの健闘を讃えて彼の肩を叩いた。

「よおよお、やったなあ火野！ お前がぶっ倒れた時はもう、駄目かと思っただぜ」

「すまなかつたな、火野。俺が不甲斐ないばかりに……」

「毎回こんな危機に遭っていたら体が持ちませんし、給料の割に合いません。次からはしっかりしてくださいね、火野さん」

「皆さん、ありがとうございます。でも少し待ってください」

オーズは伊達たちや、自分に群がる見物人たちを振り払うと、床に突っ伏したまま動かないデイケイドに声をかけた。

「土さん。俺、やりましたよ。ここに居る皆のお陰で、あいつになんとか勝てました」

「やったってんならよ」デイケイドはゆっくりと体を起こしつつ言

葉を返す。「俺もやってやったぜ。見るよ」

デイケイドは手のひらに握ったものをオーズに見せる。赤に青に紫のメダル、オーズが手に出来なかった残りの三枚だ。

「お前がライオンとやってる間に奪い返してやったぜ。たくよ、体が思うように動かないってのは辛いもんだな。黒タイツ四五人倒すだけでフラフラとはよ。ここまで来ると逆に笑えてくらあ」

「もう喋らないで下さい土さん、すぐに傷の手当てを……」

先の船での戦いで左肩を負傷し、その上今度はスーツ越しからの胸部出血と来た。無事でいられる訳がない。オーズは彼の体を気遣い、デイケイドの腕を掴んで自分の背に乗せた。

「おい、やめろよ。んなことしなくても自分で歩けるっての」

「無理しないでください。傷口に障りますよ」

「だから俺は平気だって……おお？」

離せ降ろせと喚いていたデイケイドの口が止まる。伊達たちと共に十字架から解放された泉比奈が目の前に立っていたからだ。

「ほらよ、お前のお姫様がお待ちだぜ。俺がいても邪魔なだけだろ。降ろさないってなら勝手に降りろぞ」

「ああもう、降りないでくださいよ土さん！ 比奈ちゃん、ああ、ええと……今はちよつと」

今は重病人の土を治療できる場所に運ぶ方が先決だ。オーズは頼むから少し待っていてくれと彼女に言おうとするが、比奈は彼の言葉を遮ってオーズに抱き付いた。

「ちよつ！ 困るよ比奈ちゃん！ 土さんが、土さんが大変なんだつてば」

「はは、似合いだぜ。もう少しそうしてろよ」

「冷やかさないでくださいよ、もう……」

戦いが終わって気が緩んだのか、比奈に抱き付かれて戸惑うオーズを、こりゃあいいやと笑って冷やかすデイケイド。だからこそ彼らは気付くことが出来なかった。目の前にいる比奈が、オーズの胸に顔をうずめる比奈が、いつもの彼女とは違う、不可思議な”気”

を放っていることに。

比奈が放っていた違和感に最初に気付いたのはオーズだ。自分の胸に顔を埋めて何も言わずにいる比奈を不審に思ったオーズは、彼女に「どうしたの」と声を掛ける。

「どうしたの比奈ちゃん。俺に言いたいことがあるのなら、ここで……」

「ああ、すみません。私、嬉しくって……、つい」

「嬉しくって？」オーズは言葉をオウム返しにして首を傾げる。「何がそんなに嬉しいの」

彼の問いに、比奈はゆっくりと顔を上へ向ける。オーズは目を見開いて驚いた。その時彼女がしていた表情は、とても人間のものとは思えない程に暗く、おどろおどろしいものだったからだ。

恐ろしいのは表情だけではない。比奈はオーズのベルトのバックルに手を伸ばし、嵌まっていた三枚のメダルを強引に引き抜くと、高く足を上げて彼の腹を蹴り付け、強引に変身を解除させてしまったのだ。

「何が嬉しいって……」比奈と思しき人物が、倒されて何も出来ない映司を見下ろしながら言う。「労せず残りのメダルが手に入るかに決まってるじゃないですか、映司くん」

そう言っただけで不気味に笑う彼女を見て、映司は即座に確信した。彼女は泉比奈じゃない。誰かが彼女に化けた偽物だ。確信した方がいいが、胸を蹴られて呼吸がおぼつかない今、奪われたメダルを取り戻すどころか、立ち上がることもすままならない。

映司からメダルを奪ったことで、彼女の興味はデイケイドに移る。デイケイドは取られてなるものかと身構えるが、立っていることすらやっとなデイケイドにはどうすることも出来ず、比奈の回し蹴りを喰って地に伏し、持っていたメダルを全て奪われてしまった。

「アポロガイスト様、メダルが全て 出揃いました」

彼らからメダルを奪い取った比奈は、スクエア周辺で唯一セルメ

ダルに変換されていない、液晶画面付きのビルの前に立ち、手にしたメダルを掲げる。同時に彼女は人の姿から、涼やかな水色の外殻に、頭から二本の触角を、両肩から三本の触手を生やし、右腕に巨大な鋏を付けた海老の化け物へと変わった。

ビルに備え付けられた液晶は彼女の声に応じるかのように一人に起動し、浴衣を羽織った壮年の男性の顔が画面一杯に映った。

「ふふふ、よくやってくれた。さすがは私の懐刀なのだ」アポロガイストは画面下に映る海老の化け物に礼の言葉を掛けると、オーズたちと観衆全てに目を向けて言った。「これでライダーのコアメダルは全て我が手中に落ちた。そしてオーズ、貴様が大切に想っているこの女もまた、私の手中にあるのだ！ 返して欲しくはこの町の外れにある『湯谷温泉ウェイランド』に来るのだ。貴様ら二人だけでな。繰り返す。メダルと女を返してほしくば、『湯谷温泉ウェイランド』まで来るのだ。いつまでとは言わないが、私は我慢強い。待たせると両方ともどうなっているか、保証は出来ぬぞ。それではさらばなのだ」

「待て……この……ッ」

「比奈ちゃんを……メダルを……返せ……ッ」

液晶から男の顔が消えると共に、比奈に化けた海老の化け物も何処へと去って行く。

先程まで仮面ライダーの勝利に湧いていた大観衆も、水を打ったように静まり返っていた。

## 第十四話：「炸裂黄色のコンボとライオンの最期と裏の裏」(後書き)

昨日のうちに掲載したのですが、あまりにも尻切れのラストで、読まれている方に申し訳ないと思い、改めて掲載し直しました。昨晩見てくれた方には申し訳ございませんです。

### デッドライオン

「仮面ライダーストロンガー」第二十五話及び二十六話に登場した、ブラックサタン最高幹部。

ブラックサタン首領からの信頼も厚く、幹部勢の中で唯一首領との越権を許されていた怪人ですが、序盤から中盤まで長きに渡って活躍したタイタンや、雇われ幹部のジエネラル・シャドウに比べると実力の方はぼちぼちな印象。

本編ではストロンガーとの戦闘の最中突然フェードアウトし、ブラックサタン壊滅と共に消息を絶って、以後行方不明となる(デルザーの怪人たちに倒された様子も無し)前代未聞のラストを遂げましたが、これは『ブラックサタン壊滅』と『新組織・デルザー軍団の登場』という二大イベントが同じ話に重なって、入って然るべきのデッドライオンのトドメが尺の都合でカットされたという事情……らしいです。

当初は『トラメダル』を際立たせるべく、背中に砲門を背負ったBADANの『タイガーロイド』を彼のポジションに用意するつもりだったのですが、『デッドドラトラライオン』という本気だか冗談だか分からないネーミングが強烈に頭に残ってしまったので、彼をアポロショットカーの幹部に迎えることに。

そういえば、彼の腕は『デッドハンド』というものらしいですね。結局反映されず独自の武器を装備させてしまっているのですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5226x/>

---

オース・ディケイド・平成ライダー 火を噴け！ 栄光の十二人ライダー

2011年10月28日13時30分発行